原著

内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究(第一報告)(表七、附圖五表)

Eingeweiden. (I. Mitteilung) Experimentelle Untersuchungen über die Geschwulstbildung an den

新潟醫學專門學校病理學教室

助手風間美

一、食物ノ刺戟ニヨル實験

目

次

言

ハ、胃粘膜凸出試験ロ、卵黄飼食並ニ胃潰瘍形成試験

胃潰瘍形成試驗

二、胃内ニ石ヲ插入セル實驗

〇風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

第一節 主トシテ機械的刺戟ニョル實驗

實驗例所見

試驗材料、實驗方法竝二檢查方法

六九

原著

内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究(第一報告)(表七、附圖五表)

Eingeweiden. (I. Mitteilung) Experimentelle Untersuchungen über die Geschwulstbildung an den

新潟醫學專門學校病理學教室

助手風間美

一、食物ノ刺戟ニヨル實験

目

次

言

ハ、胃粘膜凸出試験ロ、卵黄飼食並ニ胃潰瘍形成試験

胃潰瘍形成試驗

二、胃内ニ石ヲ插入セル實驗

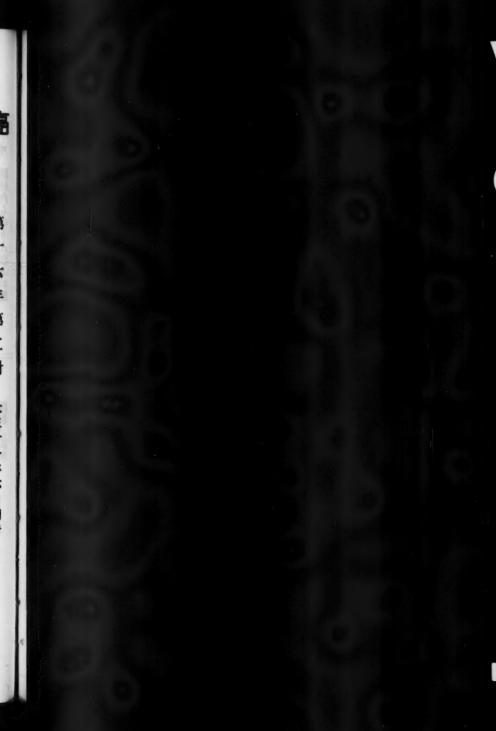
〇風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

第一節 主トシテ機械的刺戟ニョル實驗

實驗例所見

試驗材料、實驗方法竝二檢查方法

六九



楮

癌 V N 腫 ۴ 腫瘍特ニ惡性腫瘍ノ原因ニ就テハ今日尚明カナラズト雖モ種々ナル刺戟 コトハ Æ 一發生原因 ムペ 臨牀 ナリト断言スル能 Ŀ キ刺戟 一及病理 ナシ 解剖上屢~認 = 尚且 ツ癌腫 ハザルノミ。 ムルル ノ發生ヲ認ムル場合 所ニシテ 此レウキルヒョー氏ノ刺戟説ヲ唱ハシ 1 存在 スルヲ以テ吾人ハ ガ癌腫發生ノ原因 刺戟 所以ナリ、 ノミガ唯 トナリ得 然

11 殖、 セ 時フィ ズ、 博士(石炭「タール」癌)及コップシュ氏(圓蟲類幼蟲寄生ニョル蛙 ito 就中異型性増殖ニ關スル研究ハフリード 3 テ 然レ ツシェ ウキ 1." ル氏ノし。 ーるらはろーご 注射ニョル 實驗的研究以來之レニ類似ノ報告決シテ少ナシ モ癌腫ヲ人工的ニ發生セシメ得タ in ヒョー氏以來唱へラレ タル刺 成説ヲ實驗的ニ レンデル氏以降 n ハ實ニフィーピーゲル氏(すびろぷてら癌)山極 證明セント 多クノ學者 癌 ナリトス。 = セル表皮或ハ粘膜上皮ノ増 ヨリテ行 ハレ タリ 特二 ŀ 市 近

ニ Cysticercus fasciolaris ヲ生ゼシメタリシガ其ノ周圍ニ肉腫ノ發生アリ、 ーチス 一三〇頭中五 更ラニ寄生蟲ニ依リ惡性腫瘍殊 兩氏ナリ、 五 頭二於テ 氏等八猫 7 ノ腸內 v ガ 發生ヲ證明シ更ラニ轉移 = = 肉腫 寄生セ ヲ生ゼシムルコトニ成功セルハ米國ノ研究者バルロ IV Taenia crassiocollis ノ形成及移植ノ成功ヲ實驗 過卵 ヲらってーニ飼 十五ヶ月生存 シ居 セ 也 iv ック及カ 者 3 メ肝 テ

Æ 余い日本住血吸蟲症ニ於ケル腸癌腫 癌腫 發生 ノーツノ原因トナリ得ル」トノ信念二基キ大正八年來種々ナ ノ臨床的 顯微鏡的 及實驗 的研 究 -3 y in 學 刺戟ヲ動 E" 得タル 物內臟 ナクク 1 粘

○風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成 ノ研究

IJ

膀胱内ニ石ヲ插入セル實験

膽 膽囊内ニ石ヲ插入セル實驗 丙二縫合絲ヲ插入セル實驗

膀胱内ニ縫合絲ヲ插入セル實驗

第二節 膀胱内ニ膀胱粘膜片ヲ插入セル實験 膽囊內二膽囊粘膜片ヲ插入セル實驗 主トシテ化學的刺戟ニョル實驗

一、ぴちろーるヲ以テノ試験 胃内びちろーる注入試験

ロ、膀胱内びちろーる注入試験

子宮内びちろーる注入試験 腸内びちろーる注入試験

膽囊内びちろーる注入試験

二、らのりんヲ以テノ試験 びちろーる飼食試験

ti 膽囊内らのりん注入試験 膀胱内らのりん注入試験

文 默

たーるヲ以テノ試験

膽囊内たーる注入試験

第三節 機械的及化學的刺戟ニョル實驗 膀胱内たーる注入試験

一、ぴちろーる、ぱらふいん球插入試験 イ、胃内びちろーる、ばらふじん球插入

ロ、膀胱内びちろしる。ぱらふらん球插

石插入及びちろーる注入試験

入試驗

イ、胃内石插入及びちろーる注入試験 、膀胱内石插入及びちろーる注入試

驗

第五章

第四章

括

附圖 ノ説明

ちろーるばらふいん球捕入又へ石插入後更ニびちろーる注入ヲ行へり。 んせっと黙摧法及ゑーてる撒布併用等アルノミ。 余ハ 機械的及化學的刺戟トシテハ胃及膀胱内ニびちろーるばらふぃん 球捕入乃至び 機械的及化學的刺戟ヲ同時ニ座用セル例トシテハ Brosch 氐ノもるもっと皮膚壓摧法ニ策タルばらふぃん塗療法。山極、市川氐ノび

みくろんニ薄切セリ、又必要ニ應ジ 連續切片ヲ製作シ又へばらふらん包埋法乃至凍結切片ヲ製作セリ。 染色法、へまときじりん、ゑおじん複染色法、ワンギーソン氏法ヲ主トシ必要ニ應ジずだん■染色法ヲ應用セリ。 三、権畫方法、是等材料ハ十%ふぉるまりん溶液ニ固定シあるこほる漸次硬化、主トシテちゃろいぢん 包埋法ヲ行ヒ十五乃至三十

第三章 實驗例所見

第一節 主トシテ機械的刺戟ニヨル實験

、食物ノ刺戟ニョル實驗

一、胃潰瘍形成試驗

然粘膜ヲ以テ覆ハレ唯一、二ケ處ニ於テ再生粘膜腺管ノ粘膜下ニ異所的ニ侵入セルモノアルノミ、 然治癒シ後者ハ潰瘍形成部ハ肉眼的ニハ多少陷凹シ縁邊ハ少シク丘狀ニ肥厚セルモ鏡檢上陷凹部ハ全 入シ粘膜ヲ挾ミ此レヲ引キ出シ切除シ切開創ヲ縫合シ以テ拇指頭大ノ粘膜缺損卽チ胃 潰 瘍ヲ 形成セ 的ニ胃潰瘍ヲ作リ此レガ食物ノ刺戟ニヨリ如何ナル變化ヲ呈スルヤヲ檢セントシ二頭ノ幼犬ニ開腹術 ョリ胃底部漿膜面ニ於ラ粘膜下組織ニ達セル約二糎ノ切開ヲ加へ次デ切開口ヨリベアン氏鉗子ヲ插 臨牀上乃至剖檢上胃潰瘍ノ基礎ノ下ニ胃癌ノ發生ヲ見ル場合多キハ周知ノ事ニ屬ス、故ニ余 而シテ術後五十二日及七十六日目ニ剖檢セルニ前者ニアリテハ潰瘍形成部ハ肉眼的竝ニ鏡檢上全 〇風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

此 ラズ真性腫瘍特ニ惡性腫瘍ヲ形成シ得タルヲ以テ其レ等ニ就キ茲ニ報告セント欲ス 膜表面ニ作用サスコトニヨリ腫瘍ヲ形成セント企テ目下續行中ニ屬スレドモ其ノ中ノ或ルモノニ於テ レ等刺戟ニョリ軍ニ粘膜上皮ノ増殖、 即異所性增殖、 異型性増殖乃至類腫瘍ヲ形成シ得タルノミナ

第二章 試驗材料、實驗方法竝ニ檢查方法

内臓へ胃、膀胱、膿囊ヲ主トシ其ノ他子宮、腸管等ヲ選ベリ。 試驗材料、主トシテ家兎及もるもっとヲ用ヒ其ノ他犬、らって、嶋、鷄等ヲ使用セリ。

職粘膜表面ニ作用サスタメニハ後章ニ記載セル特種ノ手術式ヲ應用セリ。 **二、青驤方法、内藤粘膜表面ニ作用セシメ刺戟トシテハ機械的、化學的、** 乃王機械的化學的刺戟ヲ應用セリ而シテ是レ等刺戟ヲ內

法,Stahr 氏ノ燕麥飼養法、池松氏ノ家兎ニ於ケル硝子片、葉鐵、鋼板、魚釣鉤、麥種ノ芒等ノ插入及打撲等ノ如シ。 抑モ人工的腫瘍ヲ發生セシムル目的ノ爲メニ機械的刺載ヲ應用セル者ハ未ダ必ズシモ多カラズ例之 Ribbert 氏ノ ぴんせっと 壓摧

すびろぶれーた寄生、Kopfsch 氏ノ圓蟲類幼蟲寄生、川村教授竝ニ余ノ日本住血吸蟲寄生等ノ如シ。 或へ注射、竝ニ上田氏ノびちろーる塗布、及本田氏ノびちろーるノ舌粘膜下注射等ノ如ク又生物化學的刺戟トシテへ Fiebiger 氏々 煙"及ずだん■或へ じゃーるらは"ろーとノおれーぶ油飽和液等ノ塗布或ハ皮下注射"山極"市川氏等ノてーる或ハてーるらのりん塗布 反之化學的乃至生物化學的刺戟ヲ人工的腫瘍形成ニ應用セル例ニ至リテハ決シテ少ナシトセス、例之 Fischer 氏ノ しゃーるらはろ 余ハ機械的刺戟トシテハ胃ニ於テハ食物ニョル機械的刺戟ノ外石ヲ插入シ膀胱及糖蠹ニ於テハ石、縫合絲及粘膜片ヲ插入セリ。 Bayon 氏ノこーるたーる、らのりん混合液注射、芳我氏ノゑーてる、あるこほる、きしろーる、てーる、ばらふぃん 煤

胃、膀胱、臍糞、子宮、腸管腔内ニ注入シ叉びちろーる原液ヲきらずニ混ジ飼食モシメタリ。 余へ化學的刺戟トシテハびちろーる原液(日本新藥株式會社製造)らのりん(めるく會社製造其ノ他) 石炭たーる等ヲ特種術式ョリ

機械的及化學的刺戟ヲ同時ニ應用セル列トシテヘ Broach モアニコニン

ノ徴ヲ認メズ然レドモ未ダ惡性化ノ傾 アリテハ恰モ腺腫様ノ 呈シ顯微鏡的ニハ旣ニ術後十日間位ニシテ凸隆部ノ粘膜腺管ハ延長シ其 |ハ肥大シ更ニ粘膜下組織乃至筋纖維束間ニマデ腺管ノ異所的增殖ヲ認メ五十日間ヲ經過セルモノ 増殖ヲ營メルヲ見タリ、 向ヲ呈セズ。 而シテ此レ等異所的增殖腺管細胞 ノ基底 部 -腺管間 就テハ退行性變性 腔 11 開 大 3/

二、胃内ニ石ヲ插入セル實驗

表面平滑ナラザル石ヲ插入シ共ノ機械的刺戟ニヨリ胃粘膜ニ如何ナル變化ヲ呈スルヤヲ檢 犬家兎並 |ニもるも。ごニ於テ屚腹術ヲ行ヒ胃切開術 ニヨリ豫メ消毒ヲ施セル 鳩卵大乃至中指頭大ノ t "

犬ニ於ケル實驗

於テ腺管ノ多少異所性增殖 れうすヲ起シテ死セリ、 いい鏡檢上で再生粘膜腺管ヲ以テ被包セラレ唯腺管ハ稍~延長、 犬四頭ニ於ラ術後二十六日ヨリ八十八日間ニ亙リ觀察セリ、其ノ多クハ插入石 其ノ所見ニ ラ見 ルノミ 3 V 10 八胃切開 部 粘 膜 21 肉眼的ニハ多少肥厚スルモ全ク粘膜ヲ以 擴大、 迂曲シ特 ノ腸管嵌 = 縫合絲 入 附近 3 IJ ラ 4

家兎ニ於ケル實験

的 1) 重 ニハ胃粘膜 家兎五頭 セ |増殖ヲ營ミ、後者ハ粘膜腺管ハ不規則ニ ラレ (中術後七日ニシテ插入石ニ關係セザル腸重疊症ノタメ死亡セル(第三號) 周 21 、圍粘膜腺管トハ比較的銳利ニ 縫合部 二一致 シ瀰蔓性 三或 ハぼりーぶ狀ニ肥厚シ鏡檢上前者ハ粘膜腺管著シク 塘 張 シ腺管間ハ圓形細胞浸潤ヲ伴フ徴維性 者 ニアリ テ 延長 肉 =

境セラル。

邊 モ特 殖 ノ狀ヲ認 ムル 能 ハザリキ。

D 卵黃飼食並 二胃潰瘍形 成 試

迂曲シ其 前 大トナリ其 硬 H 行フニ第 固 後再 式二 特種 日二 於ラ先ヅ卵黄飼食ヲ三十日(一日一ケ宛)間 = 觸 £' ノ榮養狀 剖 開腹 ノ間質並ニ粘膜下組織中ニ多量ノ脂 知 E 腺管ハ腺腫様ノ増殖ヲ營 1 t 檢セルニ何レモ拇指頭大乃至一錢銅貨大ノ顆粒狀隆起ヲ認ヌ粘膜ハ多少黄色ノ色調ヲ帶 幽門前 例へ潰瘍形成部 リ、 粘膜面 術 ノ下ニ 態 鏡檢上何 壁 が腫瘍 1 = 米粒大顆粒狀隆起ヲ呈セリ、而シテ術後百四十二日 (第二例)及百九十二日 (第 胃 約 小指 切 ノ發生ニ素因ヲ與フルモノナル レモ 開 ニ一致シ示指頭大ノ 術 頭大ノ潰瘍ヲ形 其 ラ行 ジ部 ٤ り。 硬 ノ粘膜及粘 結ヲ檢スルニ先ニ示指頭大ナリシ第一例潰瘍部硬結ハ中指 成 肪特ニこれすてりんえすてるノ沈著ラ 硬結ヲ第二例ハ小指頭大ノ 2 行とこれすてりねみーヲ惹起サセ然ル後開 膜下組 更二卵黄飼 織 コト 共肥厚シ粘膜腺管ハ延長シ、腺間腔 食ヲ い明カナル事實ナリ、 續行 2 術後三十日後 硬結ヲ 觸知 故二余 認メタ セ 試 ッ " 的 腹 1 更二三 開 術 ラ行 何 ハ開 20 V 大 頭 7 4

胃粘膜凸出 試驗

t

×

ナ + 頭大ノ Tabaksbeutelnaht ヲ置キ此 ル變化ヲ 食物ニョル機械 亙り観察セリ、其ノ所見ニョレバ肉眼 惹起ス IV 的 刺 ヤヲ知ラント 戟ヲシ テ胃粘膜ノ一部 欲シ ノ部 五匹ノもるも、とニ ノ粘膜ヲシ ニ特ニ强ク作用 的 ニハ其ノ部ニ一致シぼりーぶ狀乃至乳鴨狀 ラ特 -一胃內 於テ開 セシ 脖 腹 = 2 [ii] 術 N ラ四 1 -3 リル 出 ニョリ其 12 3 ノ胃壁ノ漿膜 * ノ部 術後 1 十日 粘膜 ノ隆 面 乃至五 3 リ小

り、ローこへ「

シ顕微鏡的ニハ既ニ術後十日間位

5

3/

Ŧ

凸隆部ノ粘膜腺管ハ

延長シ

其ノ基底部腺管間腔ハ開大シ細

リ且ツ膽管ノ腺腫様増殖ヲ認ム。 ヲ營メルアリ、潰瘍部ニアリラハ全ク胃壁ヲ認ムル能ハズ肝臓ニ移行セル强固ナル結繙織纖維ヨリナ 的ニハ潰瘍邊緣粘膜腺管ハ延長、迂曲、乃至腺管腔ハ開大シ叉ハ粘膜下組織中ニ異所性増殖

組織筋層ヲ穿破シテ漿膜下組織中ニマデ侵入増殖セリ。 二十七日間ヲ經 過セル モノニアリラハ胃壁縫合部ニー致セル胃粘膜腺管ハ著シク延長迂曲シ粘膜下

膀胱内ニ石ヲ插入セル實驗

合乃至結紮ニヨリ閉鎖シ以テ其ノ機械的刺戟ニヨリ膀胱粘膜ニ如何ナル變化ヲ呈スルヤヲ檢セリ。 家兎及どもるも。とニ於テ膀胱高位切開術ニ 因リ膀胱ヲ切開シ豫メ 消毒セル石ヲ插入シ切開創ハ縫

家兎ニ於ケル實驗

然レドモ石插入後十五日ニシラ死亡セルモノニ於ラ插入石ハ旣ニ排出セリト雖モ膀胱内ニ示指頭大 排出シ膀胱粘 膀胱内ニ示指頭大ノ石ヲ插入セルニ頭ニ於テハ何レモ十日乃至十五日ニシラ死亡シ且ツ插 レモ七日乃至十一 面ニハ肉眼的乃至顯微鏡的ニ著變ヲ認メズ又拇指頭大ノ石ヲ插入セルニ頭ニ於テハ 日間 ニシテ插入石ニョル尿閉ノタメ死亡シ其ノ粘膜ニ於テ著變ヲ認メザリキ。 入石ハ既

乃至米粒大ノ黄褐灰色ヲ呈セル表面平滑ナラザル結石ヲ證明セリ。

もるもっこニ於ケル實驗

五匹ノもるもっご膀胱内ニ約小指頭大ノ石ヲ插入セルニ何レモ七日乃至八日ニシテ死亡セリ。 脱粘膜ハ縫合絲乃至結紮部ニー致シテ肉眼的ニハ何レモ肥厚ヲ呈シ顯微鏡的ニハ粘膜ハ乳嘴狀乃

粒狀ニ隆起セルノミ、然レドモ幽門部後壁ニ於テ拇指頭大、中央ニ淺キ陷凹部ヲ有スル限局性隆起竝 二中指頭大乳嘴狀隆起ヲ認ム。 術後六十六日ニシテ漸次衰弱死亡セルモノ(第一號)ニラハ剖檢上胃切開部ハ全然治癒シ唯粘膜ノ顆

多形ヲナシ細胞中心ニ占居シ屢~核分剖ヲ營メルヲ見ル。全ク腺腫ノ像ヲ呈ス。 管ヲ構成セル細胞ハ一層ノ高圓壔狀ヲ呈シ其ノ基底ニ長橢圓形ノ核ヲ有スル細胞ヨリナルアレドモ其 ノ間腔擴大シ不規則ニ配列セル腺管ヲ構成セルモノニアリテハ骰子形又ハ多形ヲ呈シ核モ亦圓形乃至 ハ薯シク延長シ或ハ大小種々ニ薯シク擴張シ不規則ニ配列シ此レ等腺管間ハ細胞ニ富ム纖維性結綿織 ノミナレドモ幽門部中指頭大隆起部ニ於テハ粘膜及粘膜下組織共限局性ニ蓍シク肥厚シ粘膜腺管ハ或 ヨリナリ粘膜筋層ハ細クナリ或ハ分裂ス然レドモ増殖腺管ハ未ダ粘膜下組織中ニハ侵入ヲ認メズ、腺 胃切開部及幽門部拇指頭大隆起部ニ於テハ唯粘膜腺管ノ延長及粘膜下組織ノ肥厚ヲ認ムル

リキ。 然レドモ百十五日及二百十三日間生存セル二頭ニ於テハ共ニ粘膜ノ高度ノ加答兒ノ外蓍變ヲ認メザ

ハ、もろもっと二於ケル實驗

長シ腺間腔ハ開大シ又ハ粘膜下組織中ニ異所性増殖ヲ營メルアリ。 術後七日ニシテ旣ニ胃壁縫合部ニー致セル胃粘膜ハ肉眼的ニ多少肥厚シ顯微鏡的ニハ粘膜腺管ハ延 胃内ニ石ヲ插入セルもるもっこハ總敷十匹ニシテ何レモ七日乃至二十七日ニシテ衰弱死亡セリ。

二十五日間生存セルー匹ニ於テハ大豆大圓形ノ胃潰瘍ヲ形成シ且ッ此ノ部ハ肝臓ニ密ニ濫著セリ、

顯微鏡的ニハ潰瘍邊緣粘膜腺管ハ延長、迂曲、乃至腺管控ハ朔大シ又ハ粘膜下組織中ニ異所生育液

レド ÷ 時 三圓壔狀細胞ハ更ニ高圓壔狀トナリ間膜ニ 所々核分剖ヲ營メルヲ見ル。 向テ乳嘴状ニ凸出 七 N コトアリ、 何 レニ 七日

腺管組 濃紫色ニ著染セル内容物ヲ藏ス腺管ハ骰子形ヲ呈シ其ノ中央ニ大ナル泡狀ノ核ヲ有スル細 層ニ配列セリ、而シテ是等腺管ハ膽囊ニ於ケル異型性增殖腺管トハ全ク連絡ヲ認メズ、 更ラニ是等膽囊及肝臟ト纖維性癒著ヲ營メル胞壁中肋軟骨ニ接近セル結締組 織 M 在 性 = 或ハ數個集簇シテ増殖セルヲ認ム是等腺管ハ大ナル間 腔ヲ有シへまごきしりん 織乃至筋織 胞 維間 ヨリナ y

即チ膽

壞性腺腫 ノ胸壁内轉移形成ナル ヲ知ル。

Ŧ 朧養内ニ縫合絲ヲ插入セル實驗

斷 端ヲ各一 ニョリ膽囊粘膜 (術ニヨリもるも) と膽囊ニ切開ヲ加へ豫メ殺菌セル縫合絲 (一號) ヲ二重ニ結ビ結節 糎殘シテ切斷セル縫合絲二個ヲ膽囊內ニ插入シ切開創ヲ結紮シ以テ其ノ縫合絲 二如何ナル變化ヲ呈スルヤヲ檢セリ。 ノ機 械 リ其 作

管内ニ粟粒大ノ暗褐色ヲ呈スル結石一個ヲ有ス。 球狀 = 腫 脹 後二十日ニシテ死亡(尿道結石ニヨル尿閉ノタメ)セル者(第一號)ニアリテハ膽囊 3 灰白 色ヲ呈シ 硬固 二觸知 ス、 割面纖 維性造構ヲ呈シ中央ニ狹少ナル間隙ヲ有ス、 八大豆大 輸胎

鏡檢 接觸部ニ於テハ長キ圓壔狀ヲ呈シ其ノ基底ニ近ク橢圓形ノ核ヲ有スル細 ○風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研 上腫 ニジシキ强固ナル 瘍 ノ中 央 = 插 結 入縫 締 織 合絲ヲ認メ其ノ問 纖 維 ョッナ リ種 タナ 園ヨリ腺管ノ異型性増殖ヲ營メルヲ見 in 方向 = 走行 ス、 腺管ラ 胞 構 成 3 ŋ 七 + in ルモ 細 ル、増殖 胞 其 12 插入缝 V 腺 ョリ周 管間

呈セル顆粒状物質ヲ以テ獲ハレ 枝狀 增 殖 シー部 ニ於テハ粘膜下組織 居レ 中 二異所性増殖ヲ認メマリ 插入石表面ハ何レモ帶

膽棄内ニ石ヲ插入セル實驗

り閉鎖シ以テ膽囊粘膜ノ變化ヲ檢セリ。 もるも、ご膽囊內ヲ切開シ豫メ消毒セル 大豆大平滑ナラザル石ヲ插入シ切開創ハ 縫合乃至 3

色ヲ显シ シ肥厚壁 術後 然レドモ術後百〇三日目ニ撲殺 中所 一種固ニ觸知ス、割面ニ於テハ插入石ニ接觸セル部ハ其ノ壁著シク肥厚シ粘膜面ハ乳嘴狀ヲ呈 日乃至七日ニシテ死亡セルモノニアリテハ單ニ粘膜ニ多少ノ肥厚ヲ 認ム ル 外著變ヲ呈セ 々小ナル間 腔ヲ認ム、 且ツ肝臓ト密ニ セル (第一號) 者ニアリテハ膽囊ハ外観上ハ示指 癒著セリ。 Mi 大二腫 脹 シ灰白

テ大小種 於テハ隣接肝臓 = 織中二 7 = 鏡檢上、 一走行 富ム結縮織纖維ニョリ圍繞セラル然レ共筋層ニ一致スル場處ニ於テハ屢と筋纖 張 ヤナル in 粘膜腺管ハ或ル部ニ於ラハ乳嘴狀ニ延長シ屢~之レト連絡ヲ保チテ粘膜筋層ヲ ルヲ見 腺管ラ モノニ 間腔 = n 増殖セルアリ又ハ粘膜腺管ト連絡ナク粘膜下組織中乃至筋層内或ハ更ニ n 構成セル細胞ハ高圓壔狀ヲ呈スル部多ケレドモ増殖程度劇シキ部ニ 又漿膜ニ一致スル場處ニ於テハ比較的鬆粗ナル結稱機 リソン氏鞘中ニ アリテハ骰子形ヲ呈シ其ノ中央ニくろまちん豊富ノ核ヲ有スル細胞 |ヲ有スル腺管組織! 異型性ニ増殖ヲ營 メルヲ見ル而シテ 是等腺管間 異型性増殖ヲ營 メル腺管ヲ認 メ得、 斯ル 繊維ヨリナル而 部二於テ 維 特 ノ不 於テ ヨリ -21 漿膜中ニ於 破 3/ 規 其間 ナ 形 ラ 則 " 多クハ細 或 細 = 此 IV

胞 間

=

ŀ'

Æ

時

圓場狀細胞

21

更二

高圃塘狀トナリ間膜ニ向ラ乳嘴狀ニ凸出セル

3 ŀ

アリ

何

レニ

Ł

ョ此

V

組

接肝臓中ニマデ腺管ノ侵入ヲ見ルアリ。 リラハ高圓壔狀上皮ヨリナルモ間腔大ナル腺管ヲ構成セルモノニアリテハ骰子形トナル而シラ更ニ隣 認ム、面シテ腺間腔ハ時ニ著シク擴張セルモノヲ見ル、腺細胞ハ間腔小ナル腺管ヲ構成セルモ **ルノ音ノ 有別別省 < 超長シ乳呼別 = 増別 シ 更 = 粘膜下 筋層乃至漿膜下組織中 = 異型性 = 腺管 ノ 増殖 ヲ**

八、膀胱内ニ膀胱粘膜片ヲ插入セル實驗

|頭共肉眼上竝ニ鏡檢上著變ヲ認メザリキ。 もるも^ご膀胱内ニ前試驗同様ノ方法ヲ以テ膀胱粘膜ヲ插入シ 四十八日間ヲ經過セルモノニ 於テハ

第二節 主トシテ化學的刺戟ニョル實験

一、びちろーるヲ以テノ試験

イ、胃内びちろーる注入試験

筋切開縁ニ縫合シ次デ皮膚縫合ヲ行ヒ然ル後びちろーるヲ注射器ニ入レ注射針ヲ腹壁皮膚胃壁ヲ穿入 びちろーるヲ胃内ニ注入スルタメニハ犬、家兎、もるもっご、らってニ於テハ開腹術ニヨリ胃壁ヲ腹 二到達セシメ然ル後びちろーるヲ注入セリ。

家鷄竝ニ鳩ニ於テハかてしてるニョリ胃内ニびちろしるヲ注入セリ。

(一)、犬ノ胃内びちろーる注入試験

部ノ粘膜ニ於テ多少ノ充血乃至潰瘍ヲ形成セルモ特ニ粘膜腺管ノ延長肥大乃至增殖等ヲ認メズ。 二頭,犬ニ於テ二十日乃至三十二日間ニ亙リびちろーる二•五乃至七•○瓦ヲ胃内ニ注入セルニ其ノ

(二)、家兎ノ胃内びちろーる注入試験

リラハ肝臓内ニマデ侵入セルモノヲ認ム。 濃紫染セル同質性ノ内容ヲ入ルアリ、而シテ瑁殖腺組織ハ漿膜下組織中ニマデ侵入シ更ニ或ル部ニア 1ニ於テハ漸次ニ腺間腔ハ開大シ細胞ハ骰子形トナリ核モ比較的中央ニ位シ又時ニへまどきしりん

リ是等腺管ヲ構成セル細胞ノ狀態等全ク第一例ト類似ス、尙隣接セル肝臟被膜中ニ腺組織ノ侵入ヲ認 シ断面ニ於テ其ノ基底部粘膜ハ小豆大ニ結節狀ニ隆起シ膽囊腔内ニハ插スセルニ個ノ縫合絲ヲ認ム。 鏡檢上、結節部ハ異形性增殖腺管ト之レヲ種々ナル狀態ニ圍繞セル細胞ニ富ム結繙織纖維トヨリナ 術後四十七日間ニシテ撲殺セル者(第二號)ニ於テモ略~同樣ニシテ肉眼的ニハ膽囊ハ瓢曹狀 二擴張

而シテ以上ノ増殖腺細胞ノ或ル者ハ核分剖ヲ營ムヲ見ル。

ハ、膀胱内ニ縫合絲ヲ插入セル實驗

少ノ充血ヲ見タルノミニシテ粘膜上皮ノ増殖ヲ認メザリキ。 ニ於ラ何レモ膀胱結石ヲ形成シ得タルモ其ノ粘膜ニハ肉眼上著變ヲ認メズ鏡檢上唯粘膜下組織中ニ多 もるも。と膀胱内ニ前試驗ト同樣ノ方法ヲ以テ縫合絲ヲ插入シ 二十日乃至四十七日間經過

七、膾養内ニ膽嚢粘膜片ヲ插入セル實驗

認ム、而シテ腺間腔ハ時ニ著シタ擴張セルモノヲ見ル、腺細胞ハ間腔小ナル腺管ヲ構成セルモノニア **術後四十八日間ニシテ撲殺セルニニ例共、同様ニ肉眼的ニハ其ノ基底部小豆大結節狀ニ隆起シ鏡檢上** 此ノ部ノ粘膜腺管ハ延長シ乳嘴狀ニ増殖シ更ニ粘膜下筋層乃至漿膜下組織中ニ異型性ニ腺管ノ増殖ヲ もるもっさ二頭ニ於テ脷腹術ノ下ニ膽囊粘膜ノ 一部ヲ切除シ其レヲ膽囊内ニ 插入シ切除繰ヲ結紮シ

1 : 引起作二 炸研	الما المال ا	111111111111111111111111111111111111111		腫瘍乃至腫瘍後上部などの	易後上	乃至庫	類腫瘍
組載中二人以上・計画、粘膜腺管ハ延長迂曲シ粘膜下	拇指頭大(注入部)丘狀ニ隆起ス	三三天	11	144	\$	23	+
變化ナン	高度ノ加答見ノ外變化ナシ	六五	3	-10	4	14	九

Bill .. the bill or beautiful was .. and

ルガフ三加別多公音化多クハ胃粘膜ノ腹壁ニ ニ相當シテ發生ス然レドモ時ニ注入部以外ノ場所ニ發生ス 縫合 セル部即チ びちろーるヲ注入スル ルコ -3/

トアリ。

ナ 隆起乃至ぼりーぷヲ形成 服 的 所 其ノ多クハ中央部 セルコトアリ而シテ大サハ大豆大乃至拇指頭大ニ達シ其ノ敷ハーケ乃至數個 ニ漬瘍ヲ形成セル結節狀隆起ヲ呈スルモ 時ニ潰瘍ヲ有 セ iv 結節狀

顯微鏡的所見、 其ノ増殖程度ニョリ之レヲ大體數型 -區別スルヲ得。

ŀ

同 膜筋 三相當スル粘膜ハ腺管著シク延長シ漸次健康部ニ移行ス、 型、 層モ之レニ從ヒ肥厚ヲ r 結節状乃至ぼりーぷ狀隆起部ノ粘膜下組織 呈シ粘膜固有層ニ於テモ屢~血管ノ擴張ヲ認ム、而シテ以上諸組 ハ肥厚シ血管ハ擴張充血シ時ニ細胞浸潤ヲ**伴** 而シテ是等腺管ハ全ク健 康部 ノ其 織 肥 1

粘膜筋層間 ノ走行不規則トナリ、或ハ斷裂 強シ其 乃至粘膜下組 粘 膜下組織 ノ基底部ニ於テハ不規則ニ蛇行シ或ハ擴張シ又ハ分岐シ時ニ粘膜筋 1 織中ユ 肥厚 血管ノ擴張等ノ狀態ハ第一 異所性增 シ此レニ接近セル粘膜固 殖ヲ營ム、 斯ル部ニ於テハ腺管上皮細胞 有層八細 型ト類似スレドモ粘膜筋層 胞 浸潤、 結綿織ノ増殖ヲ伴 モ正常ノモ 纖 維 ٠٠ 間 部 7 1 = 突破 E 粘膜腺 筋 比 シテ

テ肉眼上乃至鏡檢上、類腫瘍乃至腫瘍ヲ形成セルモノハ六例ニシテ他ノ四例ハ蓍變ヲ認メズ。 百七十七日ニ亙リびちろーる注入囘敷ハニ囘乃至十一囘ニ及ビ其ノ總量ハニ兎乃至三十三兎ナリ而シ 胃内ニびちろーるヲ注入セル家兎中旣ニ檢査セルモノ十例ニシテ其ノ試驗後生存期間ハ十五日ヨリ 不一表 家兎ノ胃内びちろーる注入ニョル胃粘膜ノ變化

八	七	六	五	29	Ξ	=	-	新號
12	8	5	13	4	15	3	9	番試 號驗
4	4	4	4	\$	9	\$	4	性
一〇九	1011	四	三七	三四	311	Olu	<u></u>	期生間存
4	4	3	3	2	2	3	2	囘注 數入
t	八	四	五	=	[FG]	六	=	總注
瓦	五	五	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	量入
状隆起ヲ呈ス	状ヲ呈セル半球形ノ隆起ヲ見ル 成シ共ノ附近ニ拇指頭大ノ顆粒 腹壁縫合部ニ一致シテ潰瘍ヲ形	變化ヲ認メズ	變化ヲ認メズ	ル拇頭指大半球狀隆起ヲ見ル	で大豆大ノぼりーぶ状隆起入部ニー致シテ敷個ノ小豆	ケノ大豆大ノ乳嘴状隆起ヲ見ル半球狀結節ヲ竝ニ其ノ附近ニ數注入部ニ於テ拇指頭大顆粒狀ノ	變化ヲ認メズ	肉眼的所見糖要
粘膜腺管ノ延長竝ニ迂曲ヲ認	腺腫性增殖	變化ナシ	變化ヲ認メズ	乳嘴腺腫形成竝ニ異所性增殖	殖 乳嘴腺腫性增殖並二異所性增	下組織中ニ増殖ヲ見ズ腺腫及乳嘴腺腫形成但シ粘膜	變化ヲ見ズ	顯微鏡的所見擴要

曲シ細胞 ヲ破リ粘膜下組織中乃至筋層中ニマデ増殖侵入シ或ルモノハ此處ニ於ラ更ニ腺間腔ハ擴大不規則ニ迂 ニ觸知セリ、顯微鏡的ニハ注入部乃至其ノ周圍粘膜腺管ハ延長迂曲シ更ニ其ノ基底部腺管ハ粘膜筋層 シ注入囘數十囘(九兎)ノモノニアリテハ注入部ニ一致シ粘膜ハ大豆大ノ乳嘴狀乃至結節狀ヲ呈シ硬固 シ顕微鏡的ニハ粘膜腺管ノ乳嘴性乃至腺腫性增殖及ビ異所性乃至異型性増殖ヲ認ム、尙ぉ百五日生存 ハ肥大セルヲ認メ或ルモノハ核分割ヲ營ム、然レドモ腺細胞ハ未ダ浸潤性ニ**増**殖セズ然レド

オル・一年日、 イノーニーン・ショニン・公田・アンラができ作者・一生

第二表 もるも。ごノ胃内びちろーる注入ニョル胃粘膜ノ變化

6	3	五 7	5	4	2	1	香 號
1 七四	₹ - O £	平 六六	\$ ==0	10	٠ - 0	\$ <u>#</u>	性生存期間
15	九五	6	4 二 ○ 五	2 〇 五	2 0 <u>f</u> i	0. =	闾敷 注入總
大豆大ニ結節狀ニ隆起ストリカー	大豆大乳嘴狀ニ隆起ス	五 乳嘴狀乃至結節狀ニ隆起ス ・	八小豆大二乳喘状ニ肥厚ス		1 加答兒	五 粘膜/充血	量內眼的所見摘要
著シキ異型性増殖ラナス 粘膜下、筋層、乃至漿膜下ニ於テ	増殖ヲナス	性增殖 性增殖	性增殖、異所性乃至異型	著變ナシ	著變ナシ	變化ナシ	顯微鏡的所見摘要

多少粘液顆粒ニ富ミ且ツ高經トナル、 基底部增殖腺細胞ハ屢~核分剖ヲ營ム、是等増殖腺管

型樣變化ヲ經テ正常粘膜ニ移行ス。

分岐増多甚シク且 粘膜筋層乃至粘膜下組織中ニマデ侵入増殖シ且ツ屢~核分剖ヲ營メリ、 ヲ伴フ而シテ是等増殖腺管ト健康部トノ境界ハ鋭利ニ纖維性結締織ニョリ境セラル、増殖腺管ハ時ニ 織 ノ纖維性增殖ヲ伴ヒ各增殖腺管ハ全ク個々ニ 粘膜下組織ノ肥厚、圓形細胞浸潤、粘膜筋纖維ノ不整斷裂等益~著明ニ腺管ノ蛇行 " 粘膜固有層中粘膜筋層二 接近セル部ノ結締織ノ増殖ノ外更ニ各異型性増 纖維性結締織ニョリ圍繞 即チ形態學上全ク腺腫 セラレ 時二圓形 殖 細胞浸潤 原管間 擴張、 ノ像ヲ

粘膜下ニ著シキ異所性乃至異型性増殖ヲ營ムモノアリ。 肉眼的ニハ粘膜ノ肥厚著明ナラズ唯顯微鏡的ニ多少腺管ノ延長ヲ認ムルノミナレドモ

ス。

以上諸型ハ屢~混合シテ認メラレ又移行型ヲ生ズベキャ勿論ナリ。

(三)、もるもっとノ胃内ぴちろーる注入試験

回ョリ十五回ニ亙リびちろーる總量○・三瓦乃至十二瓦ナリ。 ぴちろーるヲ胃内ニ注入セルもるも^さハ七例ニシテ生存期間ハ五日ヨリ百七十四日間、注入囘敷

入部ノ胃粘膜ニ加答兒乃至多少ノ充血ヲ呈スルノミナレドモ、注人囘敷四囘乃至六囘、生存 乃至六十六日ノモノニテハ注入部胃粘膜ハ肉眼的ニハ小豆大乃至大豆大ノ乳嘴狀乃至結節狀隆起ヲ 回數一囘乃至二囘ニシテ生存期間五日乃至十日間ノモ ノニアリテハ肉眼 的並 期間三十日 二鏡檢上

シ顕微鏡的ニハ枯葉泉等ノ化衛生の巨泉重生計直をご見行生の言志型と計算

1

瓦、 -於テハ尿石 也 家兎膀胱內 シ メタ ノ期間 in 7 E = 21 形成 十日 ノハ檢査例十六例中十二 單ニびちろーるヲ反復注入 シ四例二於ラハ著變ヲ認メザリキ 3 リ百七十七日間 ナリ、 例二 ス シテ是等注入囘敷ハ一囘乃至五囘 N m 3 コトニョリ肉 テ多ク ハ衰弱 眼 的乃至顯微鏡的二類腫 1 タメ死亡セル モノナリ 其ノ量ハ二乃至十五 瘍乃至腫 共ノ中五 瘍 7

領列形形がひてアーを沿入市略

然レドモ結石形成アリシ 瘍 乃 至 類 腫 邁發 4 部 位 常二 æ ノニ 膀 テ 朓 ,, 腹 其ノ部 壁縫 合部 = 二一致セ 致シテ發生 IV 膀 3 胱 又小諸處二發 粘膜 乃至 往 入部 生 位 -致シ テ 發生

E 3 秋 シテ 1) 内 服的 1 限局 潰瘍ヲ モノニ 頭大ニ 所見 性 認メザ 1 達シ其 多ク 3 びちろーるノ二乃至五 時 ルヲ 二十數倍 い乳嘴狀乃至ぼ 1 普通 数ハ多クハー個ナル 1 1 厚サト ス。 りーぷ状ラ ナリ、 且ッ其ノ他ノ各層共著シク肥厚セリ、 モ時二多發性二發生スル 呈七 in 腫 温寫乃至 類 腫 瘍 コトアリ、 1 形成ヲ見 3 ۱۰ = 是等二 IV 其 而シテ是等 ノノ大サ 3 り其 於テハ粘膜 ノ部 腫 小豆大 =

起 -3 セル 如 粘膜面 IJ M 浸潤並 鏡 包 充血 縮 的所見 七 ŋ = 5 深部粘膜下組織中二 盆 性 充 in 3 凸起ハ更ニ 血ヲ呈スル 恰恰 粘膜下組織並三固 减 モ正常粘膜上皮ノ如キ狀態ニテ)而 少ス、 樹 モ漸次注入回數ヲ重テ且ッ古キ imi 枝狀ニ分岐ス、 3/ テ 侵入シ細胞 = 有 V 7 層いぼりーぷ狀乃至乳嘴狀ニ延長シ其ノ表面い粘膜上 獲フ細 而シテ是等結締織 性蜂窠樣 胞 E 亦結 ノ像ラ呈シ或ル 3 テ 綿 是等 織 E 性 1 = 間 21 粘膜下組 强固 質 P リテ 中 ナ Æ -ノハ 侵入シ ル纖 八乳嘴 織八鬆粗 中央 維性 八狀乃 漸 次細 結締 結縮 -間腔 至 + 織 13 織 分岐 7 1 3 生ジ圓 + IJ ぶ狀 一皮細胞 7 1) ナ 生 y 細 胞 3 = 細 更 浸 隆

至 5 æ 百七十四日(注入囘數十二囘、十五死)ヲ經過セルモノニアリテハ單ニ腺管ハ注入部ニ於テ乳曠性乃 マデ異型性増殖ヲ營、且ッ多少浸潤性増殖ノ傾向ヲ有ス而シテ本例ニアリラハ注入部腹壁皮膚ニ於 - 腺腫性増殖或ハ異型性増殖ヲ營メルノミナラズ注入部以外ノ部 ノ粘膜下組織筋層乃至漿 膜下組織中

(四)、らってノ胃内びちろーる注入試験

テ表皮組織ノ肥厚並ニ増殖ヲ認メタリ。

モ胃粘膜ニ肉眼的乃至顯微鏡的ニ著變ヲ認メザリキ。 らって十匹ニ於テ六日ヨリ五十七日ニ亙リ びちろーる○•三瓦乃至五•○瓦(一囘乃至四囘)注入セル

(五)、鳥類ノ胃内びちろーる注入試験

家鷄一羽ニびちろーる一囘五兎宛二十囘總量百兎ヲ百五十日間ニ亙リ胃管ニヨリテ胃内ニ注入セル

二胃粘膜二於テ唯加答兒症狀ヲ呈セルノミ。

四二亙り九十五日間生存セシメタルモ胃粘膜ニ加答見ノ外著變ヲ認メザリキ。 鳩五羽ニ於テびちろーるヲ一囘一乃至五瓦宛三日置キニ胃内ニ胃管ノ媒介ニヨリ注入スルコト三十

ロ. 膀胱内びちろーる注入試験

縫合シ次デ皮膚縫合ヲ行ヒ注射器ニびちろーるヲ入レ注射針ヲ腹壁皮膚ヲ貫通シテ膀胱内ニ送入シテ 後びちろーるヲ注入スル 膀胱内ニびちろーるヲ注入スルタメ ニ ハ膀胱高位切開術(Sectio alta)ニヨリ膀胱壁ヲ腹壁筋創線ニ カ又ハ毎回 Sectio alta ヲ行ヒ直接膀胱内ニ注入セリ。

(一)、家兎膀胱内びちろーる注入試験

Kayen ...

	乳嘴腫形成	面乳嘴狀ヲナス結節ヲ見ル膀胱基底部ニ於テ拇指頭大ノ表	瓦	10	4	一七七	우	12	十六
	ル異型性増殖の環膜下ニ於ケ	嘴性結節狀隆起ヲ見ル 膀胱基底部ニ於テ拇指頭大ノ乳	瓦	- Hi	5	1 33 1	\$	30	五五
	ほりーぶ形成	スル隆起ヲ見ル	五	-0	5	1111	4	25	十四四
成勝及胱	ニ脳レル所多シ 壁起スルモ全り壊死 お膜ハ所々結節状ニ	レル所多シ ア以テ端タサレ粘膜ハ壊死ニ陷 膀胱へ全ク灰白色粘稠性膿様物	瓦	八	4	七九	4	29	<u>+</u> =
發膀 性胱 結	性)乳嘴性増殖	ル大石	瓦	29	2	七七	\$	11	+=
形膀 成胱 血結	性増殖ほりーぶ形成乳嘴性増殖及ど異所	結節ヲ見ル は筋ヲ見ル	瓦	=	3	四八八	\$	3	+
膀胱瘤	形成と関レル肉芽腫	レリ 半球狀ノ隆起ヲ見ルモ壊死ニ陷 中球財計等入部ニー致シ中指頭大	瓦	六	4	四八	4	I	+
	變化ナシ	變化ナシ	瓦	五	3	11111	\$	1.7	九

有スルモ核ハ多少小形トナリ時二くろまちんノ豐富ナルモノアリ。 ノ細胞ヨリナル、核ハ大ニシテ胞狀ヲナス、粘膜下ニ侵入セルモノモ 粘膜上皮細胞ハ一層ヨリナリ圓柱形或ハ骰子形ヲナスヲ常トスルモ少數例ニ於ラハ多層トナリ多形 表面ヲ覆フ細胞ト同様ノ性質ヲ

モ亦著シク肥厚シ細胞浸潤ニ富 三 且ツ血管ハ充血ス。 粘膜下組織ハ一般ニ 肥厚シ細胞浸潤並ニ血管ニ富ム、 筋層ハ 筋纖維ノ配列不規則トナリ漿膜下組織

〇風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

胞ヲ充滿スルアリ又ハ或ルモノニアリテハ是等細胞ハ周圍ニ浸潤セントスル像ヲ呈ス、終ニ不規則ト ノアリ。 ナレル筋層間二上皮細胞群ノ侵入ヲ見ルアリ更ニ漿膜下組織中ニ腺管狀ヲ呈シ異型性増殖ヲ營メルモ

第三表 家兎膀胱内びちろーる注入ニョル膀胱粘膜ノ變化

八	七	六	Æ	四	=	=	-	番號
7	25	18	6	24	19	2	28	番試號驗
4	\$	4	4	\$	\$	4	\$	性
OIII	二六	110	五	<u></u>	111	10	-0	期生間存
2	2	2	2	I	1	2	1	囘注 數入
29	五	29	79	五	_	=	=	總注
瓦	五	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	量入
變化ナシ	隆起ス ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	キ莖ヲ有スル隆起ヲ見ル 膀胱基底部ニ於テ小指頭大ノ長	變化ナシ	結節ヲ見ル お節ヲ見ル お節ヲ見ル	變化ナシ	於テ乳嘴狀乃至皺襞狀ニ肥厚ス注入部粘膜へ拇指頭大ノ範圍ニ	基底部ニ帽針頭大ノ隆起アリ	內眼的所見摘要
變化ナシ	乳嘴性腫瘍形成	ぼりーぶ形成	變化ナシ	乳嘴腫形成	變化ナシ	異所性增殖	ぼりーぶ形成	顯微鏡的所見補要
	兩側輸尿管擴張ス	腎石形成						摘要

漏出ヲ防グモノトス。 固定シ此ノ部ヨリ注射針ヲ膽囊内ニ穿入シ然ル後びちろーるヲ穿入シ注入部ヲ結紮シテびちろーる 膽囊内ニびちろーるヲ注入スルタメニハ開腹術ニヨリ膽囊ヲ取リ出シ其ノ基底部ヲペアン氏鉗子ニ

(一)、犬ノ膽囊内びちろーる注入試験

性増殖ヲ認メタルモ一頭ニ於テハ變化ヲ認メザリキ。 犬二頭ニ於テ其ノ膽囊内ニびちろーる一•○瓦注入シ術後三十日乃至六十日間生存セ シ メシニ其ノ 『ニ於ラ基底部ニ小豆大丘狀ノ隆起ヲ認メ鏡檢上粘膜腺管ノ乳嘴狀増殖及粘膜下組織ノ肥厚及異所

(二)、家兎ノ膽囊内びちろーる注入試験

ニ増大シ灰白色膿様粘液様物 ヲ 以テ備チ其ノ壁ハー様ニ結綿織性ニ肥厚 セ ルモ粘膜 ノ 増殖 ヲ 認メ 二頭ノ家兎膽囊内ニびちろーる○•五尾注入シ三十日間生存セシ メ シモ ノ ニ於テ ハ 膽囊ハ鷄卵大

ヲ営メリ 七十日間經過セルモノニアリテハ其ノ基底部ハ小豆大半球狀ニ隆起シ鏡檢上粘膜腺管ハ乳嘴狀増殖

(三)、もるもっと膽囊内びちろーる注入試験

至〇・四尾、其ノ生存期間ハニ十五日乃至百五十日ナリ。 膽囊内ニびちろーるヲ注入セルもるも。ご十六頭ニシテ注入囘數ハ何レモ一囘、注入量ハ○•一尾乃膽囊内ニびちろーるヲ注入セルもるも。ご十六頭ニシテ注入囘數ハ何レモ一囘、注入量ハ○•一尾乃

其ノ中三例(三、十三、十四)ニ於テハ膽囊基底部粘膜ノ乳嘴性乃至乳嘴腺腫性增殖及異所性增殖ヲ、

(二)、もるも。どノ膀胱内ひちろーる注入試験

六日間生存セシメシ七頭中九十二日間生存セル一頭ニ於ラ膀胱粘膜ハ肉眼的ニ多少肥厚シ顕微 顕微鏡的ニ著變ヲ認メザリキ。 粘膜ノ乳嘴性増殖及異所性増殖ヲ認メシノミ其ノ他ノ者ニアリテハ單ニ粘膜ノ多少ノ充血ヲ認メシモ もるもっさノ膀胱内ニびちろーるノ○•五乃至一•○瓦ヲ一 囘注入シ放置シ術後、十八日 ヨリ百三十

:後十八日ニシテ死亡セルモノニ於テ膀胱竝ニ尿道結石ヲ形成シ其ノ部ニ於テ粘膜ノ充血乃至出血

(三)、犬ノ膀胱内びちろーる注入試験

ヲ認メタリ。

犬四頭ニ於テ其ノ膀胱内ニびちろーる二兎乃至三兎ヲ一囘注入シ術後三十日ヨリ七十日間ニ撲殺檢

査セルニ何レモ膀胱粘膜ニ變化ヲ認メザリキ。

ハ、腸内びちろーる注入試験

家兎二頭ニ於テ盲腸ヲ腹壁ニ縫合癒著セシメびちろーるヲ一囘ニ二兎乃至五兎宛十囘總量二十兎乃

至五十兎注入シ五十日乃至百十日間生存セシメシモ其ノ粘膜ニ蓍變ヲ認メザリキ。

ニ、子宮内びちろーる注入試験

メシ二頭ニ於テ其ノ粘膜ニ著變ヲ認メザリキ 家兎子宮内ニびちろーる○・五兎宛二囘 (毎囘開腹術ヲ行ヒ) 注入シ五十日乃至八十四日間生存セシ

*、 職豪内びちろーる注入試験

1 胎養内ニびちろーるヲ注入スルタメニハ開腹術ニヨリ膽養ヲ取リ出シ其ノ甚底部ヲベアンモ甘みニ

核ヲ有スル原形質ニ富ム細胞ヨリナリ一層ニ配列シ多クハ大ナル間腔 浸潤 ヲ件フ 是レ等腺管ヲ構 成セル細胞ハ高圃壔狀ヲナシ其ノ基底ニ近ク橢圃形ノくろまち ラ有 3 内容ヲ 認メズ。

ハラ県ハ南ミラ札服司和和アヨ所権専防ィ事ノ維維ノ西ダ栖メラ不規則トナツ肥厚シ目ツ隷緩固形組

消失セ 間 維トヨリナリ諸處圓形細胞浸潤ヲ認ム而シテ各層ハ 種ナル間 世ノ 底二 腔ニ内容ヲ入ルアリ、 グリソン氏鞘中ニマデ侵入セルモノアリ(十五)、是レ等腺管細胞ハ主トシテ高圓 レドモ 增殖腺 近ク橢圓 ルアリ、 ニ於テハ |腔ヲ有シ不規則ニ配列セル腺管ト之レヲ圍繞 第五 管ト連絡セリ、時ニ粘膜腺管ハ萎縮ニ陷レルアリ、又漿膜中ニ増殖 |形ノくろまちん豐富ノ核ヲ有スル原形質ニ富ム細胞ヨリナルモ時ニ骰子形ヲ呈 然レドモ粘膜腺管ハ不規則ニ開大迂曲乃至延長シ乳嘴狀ニ増殖シ或ル 六、七、八、九、十二、十五號ニアリテハ肉眼上結節ヲ形成セル部ハ全然、 而シテ何レモ一層ヨリナ IV. 稍~真ノ影ヲ止ムルアレドモ全 之等腺細胞ノ スル 細胞 ニ富ム纖維性結綿織ト少量ノ滑平筋 或 in Æ 1 25 明二核分剖 セル腺管ハ癒著セ 7 壕狀ラ モノハ 不明ト 7 呈 ナリ 粘膜下 シ其 大小 4 種

央乃至基底ニ近ク圓形乃至橢圓形 ルモノハへまどきしりん濃紫染セル内容ヲ入ル、 第十六例二於テハ輸膽 膽囊癒著部肝臓ノ反對側ニシテ眞ノ被膜ニ近キ部ノ肝組 ノ核ヲ有 ス ル原形 質二富ム細胞ノ一層ヨリナル腺管群ヲ認ム、 即チ肝臓内轉移 ラ形 成 + 織 y 中二般子形ラ呈シ 其ノ中

形 織トヨリナリ粘膜腺管ハ正常ノ粘膜腺管ノ如ク ん豐富ニ核ヲ有ス 質 二富山 3 N リナリ 原形 延長、 質二富山細胞 管壁ニ發生セル結節ハ骰子形ヲ呈シ其ノ中央乃至基底ニ 迂曲乃至間腔 1 列二 ハ開大シ或ルモノハ粘膜筋層ヲ破リラ粘膜下ニ於ケ 一配列 高圓濤狀ヲ呈シ其ノ基底ニ近ク 也 ル腺管ト 之レヲ圍 繞 七 ル細胞ニ富ム 橢圓 近ク 形 圓形 1 核ヲ有 纖 維 ル原

リテ 成 ハ輸 7 證 明七 膽管二腺腫性 六、七、八、九、十二、十五)、ニ於テハ膽囊基底部ニ破壞性腺腫ヲ形成シ一例 癌ヲ形成セリ、 而シテ第五例ニアリテハ同時 = 膽石ヲ形成シ且ッ肝臓

例(二、 三)ニ於ラハ膽囊水腫ヲ形成セリ、然レドモ三例(一、十、十一)ニアリテハ全ク變化ヲ

接 其 y, N セリ、 觸部 |ノ境界判然タルコト多ケレドモ時ニ不明瞭ナルコトアリ、膽石ヲ形成セルモノ(五)ニアリテハ其 部)ニ於テ乳嘴狀肥厚又ハ小豆大乃至大豆大ノ限局性ノ結節狀隆起ヲ形成シ、 内 何レモ 眼 灰白色ヲ呈シ時ニ小ナル間腔ヲ明ニ認メ得 的 所見、 第十六例 硬固ニ觸知シ割 ハ一般ニ著シク肥厚シ其レト健康粘 其ノ多クハ膽囊基底部 ニアリテハ膽囊粘膜 面灰白色ヲ呈セリ。 ニハ著變ヲ認メザルモ輸膽管ニ於ラ米粒大半球狀 (即チびちろーる注入ニ際シ注射針ノ穿入シ及穿入孔 iv 膜トノ境ニ於ラ大豆大ノ間腔ニ向ラ突出 コトアリ、 而シテ多クハ隣接肝臓被膜ト癒 硬固二 觸 ノ結節 セル 知 結節ヲ形 7 ス 割 結 ラ答 形 セ

列シ其レ等腺管ハ纖維性結綿織ニヨリ圍繞セラレ更ニ粘膜下組織内ニ迄デ腺管 ヲ見ル 增 鏡的 殖 而シラ枯膜下組織乃至筋層漿膜ハ其ノ纖維ノ配列極メラ不規則トナリ肥厚シ且ツ諸處圓形 所見、 シ且ツ此ノ 號ニ於テハ粘膜管ハ延長、 第三、 部ノ粘膜下組織乃至筋層漿膜下組織共ニ 十四號ニアリテハ結節 迁曲、 7 開大シ、 形 成 セ 乳嘴狀 N 部 ハ粘膜腺管 結縮織性 = 増殖セルノミナラズ腺管 21 -增殖 延長、 3 且 迁 ノ異所性 ッ 曲 叉 形 増殖ヲ營 27 細 不規則 胞 開 大シ乳

浸潤ヲ伴フ是レ等腺管ヲ構成セル細胞ハ島圃壽伏ヲトンまノ表気ニエア常圃彡

+ ;	五	十四	+=	+=	+	+	九
14	6	10	9	13	8	7	111
\$	9	2	\$	9	4	4	\$
<u>=</u>	三三六	三五五	三五	OHI	11110	1011	1011
ī	ī	1	1	1	ı	I	1
○四五	四瓦	○三五	○・三瓦	〇三五	0.二页	〇三瓦	〇・三瓦
狀結節ヲ形成ス	基底部ニ大豆大結節ヲ形成ス	基底部ニ米粒大結節ヲ見ル	基底部ニ米粒大ノ結節ヲ見ル	基底部ニ小豆大ノ結節ヲ見ル	變化ナシ	變化ナシ	基底部ニ小豆大ノ結節ヲ見ル
腺腫性癌形成	増殖ス リソン氏鞘中ニ 一根臓が 世界腫 で リソン氏鞘中ニ	乳嘴性增殖	異所性增殖 乳嘴性腺腫形成	破壞性腺腫形成	變化ナシ	變化ナシ	破壞性腺腫形成

へ、ぴちろーる飼食試験

五尾乃至八二・五尾飼養セシメ其ノ胃粘膜ニ如何ナル變化ヲ呈スルヤヲ檢セリ。 家兎三頭ニ於テ毎日○•五兎ノびちろーる原液ヲきらずニ混ジ三十日ヨリ百六十五日間ニ 亙リ總量

ル能ハザリキ。 其ノ所見ニョレバ胃粘膜ハ高度ノ加答見ト點狀出血ヲ認メシノミニシテ潰瘍乃至限局性肥厚ヲ認ム

魔々粘膜筋層ノ斷片ヲ認メ得ルモ其ノ他ノ各層ノ造構明ラカナラズ周圍組織トハ比較的鋭利ニ境セラ 殖腺管ニ移行スルアリ而シテ是レ等腺管ハ其ノ間腔ハ大小不同且ツ不整形ヲナシ内容ヲ入ル、而シテ

第四表 もるもっご膽嚢内びちろーる注入ニョル膽嚢粘膜ノ變化

IV.

7	七	六	五	79	=	=	_	番號
12	15	16	2	I	4	3	5	番試號驗
\$	4	\$	우	\$	4	\$	\$	性
101	九五	九二	六五	六五	四七	mo	三五	期生間存
ī	I	1	I	I	I	1	I	囘注 數入
〇三五	〇三五	〇三五	〇三五	〇三五	0.二五	〇二 五	〇. 二五	總注 量入
基底部ニ豆粒大結節ヲ形成ス	基底部ニ小豆大ノ結節ヲ形成	基底部ニ米粒大ノ結節ヲ見ル	肥厚シ其ノ輸贈管トノ移行部 脱厚シ其ノ輸贈管トノ移行部	・ の は 明大 ニ 擴張 ス	基底部米粒大ニ丘状ニ隆起ス	リージをあっるヲ含有セリー	變化ナシ	內眼的所見摘要
破壞性腺腫形成	破壞性腺腫形成	破壞性腺腫形成	轉移形成	消失セリ		厚ス。粘膜ハ消失セリ腺囊壁ハ結締織性ニ児	變化ナシ	顯微鏡的所見摘要
			大豆大/膽石形成	ル、騰囊水腫形成悪色砂状物體ヲ見	1 料土様物質ヲ認	騰囊水腫形成		摘要

九

11

\$

101

I

○・三五 基底部二小豆大ノ結節ヲ見ル 破実性操重形成

リテハ骰子形ヲ呈シ比較的中央ニ圓形ノ核ヲ有スル原形質ニ富ム細胞ヨリナリ何レモ一層ニ配列セル ちん豐富ノ核ヲ有スル原形質ニ富ム細胞ヨリナルモ間腔大ニシテ内容ヲ入レ腺管ヲ構成セルモノニア 間腔ノ小ニシテ内容ヲ有セザルモノニアリテハ圓壔狀ヲ呈シ其ノ基底ニ近ク橢圓形乃至圓形ノくろま 而シテ是レ等腺管ヲ構成セル細胞ハ固有ノ粘膜腺管竝ニソレニ連絡乃至接近セル増殖セル腺管又ハ 是レ等墳殖セル腺間ハ細胞ニ富ム纖維性結釋穢竝ニ少量ノ筋纖維 ヨ リ ナ リ諸處圓形細胞浸潤ヲ認

コノニフリラン多グン温男等もル氏容ラスル

第五表 もるもっこ膽嚢内らのりん注入ニョル膽嚢粘膜ノ變化

モ時ニ多形ヲ呈セル細胞ノ不規則ニ配列シ全ク間腔ヲ有セザルアリ、

而シラ是レ等腺細胞ハ屢~核分

六 六 四 七	1 1 1 1
0 0 0	0 0 0 0
五 五 基底部	五 五 本 二 五 加
隆部 起部 ス勝ス	選点 では では では では では では では で
部騰重壁へ大豆大ニ丘状 破壊性腺腫形	部勝重壁へ大豆大ニ丘状 破壊性腺腫形成起ス 検形成 を実性・肝臓
	・ 魔基基底部へ大豆大ニ結節狀 破壊性腺腫、肝臓

二、らのりんヲ以テノ試験

イ、もるもっご膽嚢内らのりん注入試験

腹壁筋束 シメ以テ膽囊粘膜ノ變化ヲ檢セルニ何レモ破壞性腺腫ヲ形成シ且ツニ例(一、四)ニ於テハ肝臓內乃至 五頭!もるもっご!膽囊内ニらのりん○•一兎ヲ 一囘注入シ術後四十三 日乃至百二十 五日間 二轉移ヲ證明セリ。

豆大乃至小豆大ノ丘狀乃至結節狀隆起ヲ認メ硬固ニ觸知シ多クハ周圍組織ト癒著ヲ營ム割面ハ灰白色 ヲ呈シ諸處小ナル間腔ヲ認ム。 肉眼的所見、 何レモ膽囊粘膜基底部(即チらのりん注入ニ際シ注射針ノ穿通部竝ニ結紮部)ニ於テ大

粘膜腺管ハ延長、 ク腺上皮ヲ認メザルアリ(第一例)。 顯微鏡的所見、膽囊壁ハ一般ニ肥厚シ特ニ結節形成部ニ蓍シ、全ク各層ノ造構明カナラズ、此ノ部ノ 迂曲、開大、分岐シ時ニ乳嘴性増殖ヲ營メルアリ然レドモ時ニ粘膜ハ萎縮ニ陷リ全

殖ヲ營メルヲ見ル而シラ是レ等腺組 圍乃至附近ニ骨樣組織ヲ認ム (第四例)而シテ是レ等腺管間腔ハ大小極メラ不同ニシテ間腔ノ開大セ 異型性増殖腺管乃至腺細胞群ハ肥厚セル漿膜中淋巴管隙内ニ侵入セルアリ更ニ膽囊壁ト反對側肝臓内 ニマデ侵入増殖ヲ營メルヲ認メ(第一例)尚膽囊癒部腹壁筋纖維間ニ増殖セルアリ尚是レ等轉移 モノニアリテハ多クハ濃紫染セル内容ラ入ル。 然レドモ粘膜下組織筋層乃至漿膜ニー致セル部ニ於テハ不規則ニ開大、分岐セル腺組織ハ異型性増 織ノ或ルモノハ増殖セル粘膜腺管ト連絡ヲ認メ得ルアリ。又是等 腺管周

部胎重量ハ乳咿別乃至大豆大粒質別ニ隆起シ鎖梯上粘膜腺質ハ乳喂性増殖ヲ營ミ且ツ各層共可成著シ **ク肥厚シ且ツ圓形細胞浸潤ヲ認ム而シテ増殖腺管ハ粘膜筋層ヲ破り粘膜腺管ト連絡シテ或ハ之レト連**

絡ナク粘膜下組織、筋層乃至漿膜下組織中ニ異所性乃至異型性増殖ヲ營メルヲ見タリ。 ロ、膀胱内たーる注入試験

至鏡檢上著變ヲ認メザリキ。 頭ノもるも。と膀胱内ニたーるヲ〇•一兎一囘注入シ九十日間生存セシメシニ其ノ粘膜ニ肉眼上乃

第三節 機械的及ビ化學的刺戟ニョル實驗

一、びちろーるはらふらん球插入試験

レヲ冷却シテ後球トセルモノナリ。 びちろーるばらふらん珠ハ四十五度!ばらふいんヲ 融解シソレニ十%! 割合ニびちろーるヲ混ジ之

イ、家兎買内びちろーるはらふらん球插入試験

起ヲ認メ鏡檢上粘膜腺管ノ腺腫様増殖ヲ示セリ、而シテ増殖腺管ノ一部ハ粘膜下組織中ニ異所性増殖 七十日乃至七十二日間生存セシメシ二頭ノ家兎ニ 於テぴちろーるばらふ ん球ハ旣ニ 吸收サレシト ヲ營メリ。 開腹術ヲ行ヒ胃切開ニヨリ約鳩卵大ノびちろーるぱらふらな一個ヲ 插入シ胃壁竝ニ 腹壁ヲ縫合シ (ノ胃壁縫合部ニー致シテ肉眼上孤在性乃至多發性ニ大豆大乃至指頭大ノ結節狀乃至ぽりーぷ狀隆

メ何レモ二十三日乃至三十六日間ニシテ死亡セルガ其ノ胃壁縫合部ニ於テ肉眼上粘膜ハ肥厚ヲ呈シ鏡 ぴちろーるぱらふら の球插入後更ニびちろーる注入ヲ二囘 (二元)行ヒシ 二頭ノ家兎ハ衰弱ノタ

剖ヲ營ム。

ロ、もるもっご膀胱内らのりん注入試験

第壹例ニラハ小豆大潰瘍ヲ形成セルモ粘膜ノ肥厚乃至増殖ヲ認メズ第二例ニ 於 ラ ハ 著變ヲ認メザリ 頭中第三例ニ於ヲ肉眼上膀胱基底部粘膜ハ大豆大乳嘴狀ニ肥厚シ鏡檢上粘膜ノ乳嘴性増殖ヲ認メタリ もるも。とノ膀胱内ニ○・一 死ノらのりんヲ一囘注入シ四十三 日ヨリ百二十五日間生存セ シ メシニ

第六表 もるもっご膀胱内らのりん注入ニョル膀胱粘膜ノ變化

キ、然レドモ第一及第二例ニアリテハ何レモ尿石ノ形成ヲ見タリ。

二儿寄生
ノ遺瘍
摘要

三、たーるヲ以テノ試験

イ、膽囊内たーる注入試験

部膽囊壁パ乳嘴狀乃至大豆大結節狀ニ隆起シ鏡檢上粘膜腺管パ乳嘴性增殖ヲ營ミ且ッ各層共可成著シ ク肥厚シ且ツ園形糊胞浸潤ヲ認ム而シテ律値泉等、占莫防計ヲ皮)占莫泉等、 医サント えいごう 真 もるもって二頭ノ膽囊内ニたーる○・一瓦ヲ一囘注入シ九十日生存セシメシニ何レモ肉眼上其ノ基底

		戟	刺	的	b	Ŕ	機	(7	· v	ŀ	主)	刺ノ4	10	類ノ東
		粘膜片插入		継合絲插入				石插入			胃粘膜凸出	哪黃飼食及胃潰	胃潰	試驗方法
	同	もあもっと	同	6 6 6 2	68606	68606	家 克	60606	家苑	犬	60000	家 見	犬	動物ノ種類
	膀胱	職	膀胱	融畫	聯查	膀胱	膀胱	胃	胃	胃	胃	P	胃	職 基
	2	2	2	2	3	5	4	10	3	4	5	2	2	數
	四八	四八	110-114	110-四七	五一10三	七一八	七一五五	七一二七	t-==	一六一八八	10-五0	一四二一一九二	五二一七六	生存期間
1	著變ナシ	破壞性腺腫形成2、肝	粘膜ノ充血	破壞性腺腫形成2、肝	破壞性腺腫及胸壁轉移	乳嘴性增殖及異所性增殖	著題ナシ	異所性增殖2、胃潰療	乳嘴性乃至腺腫性ノ魚	腺上皮異所	性增殖3 1 腺腫性	乳嘴性腺腫形成2	著變ヲ認メズ	所
		川臓被膜内轄移形成 1		川臓内轉移形成 I	砂形成Ⅰ	相殖 5		海形成工	增殖工、腺腫形成工		醮性增殖 工、 祿上皮異所			見
			膀胱結石形成			膀胱結石								捕
			形成			形成								要

檢上粘膜腺管ノ増殖ヲ認メタリ。

ロ、家兎膀胱内びちろーる、はらふらん球插入試験

球ニ因ル尿閉ノタメ死亡シ鏡檢上球ニ接觸セル膀胱壁ハ其ノ粘膜壊死ニ陷レルモー部ニ於テハ粘膜上 膀胱内ニぴちろーる、ばらふらん球ヲ插入セル一頭ハ術後十七日ニシテ插入びちろーる、ばらふらん

皮ノ乳嘴性増殖ヲ認メタリ。

致シ指頭大乳嘴狀隆起ヲ認メ鏡檢上粘膜ハ乳嘴性增殖ヲ營ミ結稀織性ニ肥厚シ且ツ圓形細胞浸潤ヲ伴 シメタル二頭ニ於ラハ插入びちろーるばらふ。んハ吸收サレシト雖前者ニアリラハ膀胱壁縫合部ニー ぴちろーるばらふ。ん球插入後更ニぴちろーるヲ四囘(一○•兎)注入シ九十二日乃至九十九日生存 粘膜下組織中二異所性増殖ヲ認メタリ。

ヲ多數ヲ證明シ且ッ其ノ結石ニ接觸セル膀胱壁ハ拇指頭大、 血管ノ新生増殖著明ナリ而シテ結節部ト健康粘膜トノ移行部ニ於テ粘膜ノ乳嘴性増殖ヲ認ム。 節ヲ形成 ル者ニ於テハ膀胱内ニ小指一節大ノ棒狀ヲ呈シ灰白黃色ヲ呈セル結石竝ニ同様ノ色ヲ帶ベル砂狀物體 七 壌死ニ陷り唯一部ニ於テ粘膜ノ生存セル部ニ乳嘴性増殖ヲ見タリ而シテ何レモ米粒大灰白黄色ヲ呈 ル結石ヲ 後者ニアリテハ尿瘻ヲ構成シ膀胱粘膜ハ多發性ニ指頭大ノ丘狀隆起ヲ形成セリト雖モ是レ等ノ多ク セリ鏡檢上結節部ニ於ラハ粘膜上皮ノ増殖ハ著明ナラザルモ却ラ粘膜下組織 證明セリ、 更二球插入後、 びちろーるヲ四回、 (十二死)注入シニ百九十七日ニシテ死亡セ 硬固ニ觸知スル表面、 顆粒狀ヲナセル結 ノ圓形細胞浸潤

石振入及ビびちろーる注入試験

〇風間。内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

1	一る注入	石插入及びちろ	注入	ハ更ニびちろしるばら びちろしるばら		たーる注入		らのりん注入	びちろーる嗣食		
犬	家鬼	家	家	家見	もあるっと	もるもっと	ろももっと	4000	宋	686	家
胃	膀胱	胃	膀胱	胃	膀胱	牌	膀胱	赠	胃	激	順
I	2	2	3	4	2	2	3	5	3	16	2
三五	二六四一三一四	五二五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五	一七—二九七	114-04	九〇	九〇	四三一二五五	四三一二五五	三〇一一六五	五一五〇	三〇一七〇
腺上皮異所	著變ナシ	著變ナシ	乳嘴性增殖,異所性增殖」	ぼりーぶ形成、腺腫性增殖、異所性増殖2	著變ナシ	乳嘴性增殖及異所乃至異型性增殖。	乳嘴性增殖工	破壞性腺腫 5、肝臟內轉移 1、腹壁轉移 1	加答兒及點狀出血	職內轉移形成 1 破壞性裸腫形成 7、輸贈管腺腫性癌 1、肝破壞性裸腫形成 7、輸贈管腺腫性增殖及異所性增殖 3	乳嘴性增殖!
	=排出セリ の氏		膀胱結石形成3				输尿管結石 I 、			騰 養不 水 屋 2 I	

	10	Ę	刺	的	學	化	(7	V	F .	主)		ノ戦刺類 租
						びちろーる注入						試驗方法
犬	家苑	家	犬	60606	家	旭	家	5 7	60602	家	犬	動物ノ種類
計畫	子宮	1886	膀胱	脱	脱	胃	胃	胃	胃	胃	W	巌器
2	2	2	4	7	16	5	1	10	7	10	2	數
110-X0	五〇一八四	五0-10	04-0III	- 八一一三六	10-144	一五一九五	一五〇	六—五七	五一一七四	一五一一七七	110-1111	生存期間
乳嘴性增殖及異所性增殖工。	著變ヲ見ズ	著機ナシ	變化ヲ見ズ	粘膜充血6、乳嘴性增殖乃至	成5、乳嘴腫形成5、異利乳嘴性增殖2、異所性增殖	粘膜ノ加答兒	粘膜ノ加答兒	著變ナシ	異型性增殖工	腫形成2異所性增殖3 乳嘴性乃至腺腫性增殖2、乳	粘膜充血」、潰瘍形成」、粘	
•				至異所性增殖工	性増殖リーぶ形				一異型性增殖 1	乳嘴腺腫乃至腺	視点を増殖すり	見
				形膀 成胱 I 及	腎胱 形結石 形式石							捕
				尿道結石	4形成3			1				要

其ノ胃及ビ膀胱ニ於テもるもっさニ於テハ胃及膽囊ニ於テ單ニ上皮ノ増殖ヲ起 セシノミナラズ 類腫 (腫瘍狀新生物)乃至腫瘍特ニ惡性腫瘍ヲ形成スルヲ得タリ。 |插入後ぴちろーる注入| ヲ、反復的ニ乃至一定期間持續的ニ作用セシムルコトニヨリ家兎ニ於テハ 鳰

タリ。 乃至らのりん注入)ニヨリ(一囘乃至數囘)尿石乃至膽石ヲ形成シ同時ニ其ノ部ニ腫瘍ヲ形成スルヲ得 二、家兎及もるもっこノ膀胱乃至膽囊粘膜ニ化學的刺戟ヲ作用サスコト(膀胱乃至膽囊内ぴちろーる

ヲ最モ多ク且ツ强ク享受スル場所ニ發生ス、卽チ冑壁切開部潰瘍縁、びちろーる注入部 並 1二孤在性ニ發生ス然レドモ時ニ多發性ニ發生ス |二穿入孔結紮部|| 乃至胃内容物ノ送出時最モ多ク刺戟セラル、幽門部等ニ發生ス而シテ多クハ限局 腫瘍形成部位、以上刺戟作用ニョル上皮ノ増殖、 ルコト 類腫瘍乃至腫瘍發生部位ハ何レモ是レ等刺戟 アリ。 (注射針穿入

狀乃至半球狀ヲ呈ス何レモ硬固 ヲナシ、 w ŀ アリ、 3 T 腫瘍肉 " 多ク 而シテ其ノ周圍粘膜モ屢~肥厚ス、家兎、膀胱乃至胃ヲ腫瘍ニ於テハ屢~中央ニ潰瘍ヲ認 ハ半球 眼的所見、 『狀ヲ呈ス、もるも』と ニ 於テハ胃及膀胱共小豆大乃至大豆大ノ結節狀乳嘴狀、丘 腫瘍ハ家兎ノ胃乃至膀胱ニ於テハ中指頭大ヨリ拇指頭大ノ乳嘴狀乃至結節狀 |二觸知シ灰白色ヲ呈ス、割面ニ於ラ屢~大小種々ナル間腔 ヲ認ムル

組 織ノ肥厚圓形細胞浸潤血管ノ充血或ハ新生等ヲ呈スルノミナレドモ漸次乳鴨狀丘狀乃至結節狀隆起 Ŧį, 腫瘍顯微鏡的所見、單ニ粘膜ノ肥厚部ニ於ラハ粘膜上皮細胞ノ肥大、 延長ヲ來シ同 時 ニ粘膜下

イ、胃内ニ石ヲ插入シ後びちろーるヲ注入セル實驗

多少延長擴張シ縫合絲ノ附近ニ於テ多少ノ異所ヲ認ムルモ増殖ノ狀ヲ見ズ。 間經過セルモノニ於テハ胃切開創ハ圣ク治セルモ其ノ部ノ粘膜ハ多少堤狀ニ肥厚シ鏡檢上粘膜腺管ハ 犬一頭ノ胃内ニ拇指頭大ノ天然石二個ヲ插入シ然ル後びちろーるヲ二囘(二・○兎) 注入シ二十五日

夕十五日乃至二十五日ニテ死亡シ何レモ著變ヲ認メザリキ。 家兎二頭ニ於ラ其ノ胃中ニ鳩卵大ノ石ヲ插入シ同時ニびちろーる二兎ヲ注入セルニ何レモ衰弱甚

、膀胱内石插入及びちろーる注入試験

後六十日ニシテ死亡シ其ノ膀胱ニ變化ヲ認メザリキ尚他ノ一頭ハ目下生存ス。 得ザリシカバ更ニ一頭ニハびちろーる三兎注入シ一頭ニハ鳩卵大ノ石ヲ再ビ插入セルニ前者ハ再手術 然ル後先がぴちろーる!一瓦ヲ注入シ其ノ後三十日後ニ二囘ぴちろーるヲ注入シ術後、二百六十四日 二於テ試驗的開腹術ニヨリ膀胱ヲ檢スルニ何レモ插入セル石ハ消失シ且ツ膀胱粘膜ニ蓍變ヲ認ムルヲ 家兎二頭ニ於テ膀胱高位切開術ノ下ニ膀胱壁ヲ切開シ其ノ中ニ指頭大ノ石ヲ插入シ膀胱壁ヲ縫合シ

第四章 總 括

以上余ノ試験成績ヲ總括スレバ左ノ如シ。

等ニ機械的、(食物ノ 刺戟、石插入、縫合絲插入、粘膜片插入)、化學的、(びちろーる 注入、びちろ 余い家見、もるもっと、らって、犬、家鷄、鳩等二於ラ其ノ内臓即チ胃、 らのりん 注入、たーる注入) 乃至機械的及化學的刺戟(びちろーる、ばらふぃん 球插入、 膀胱、

石插入後びちろーる注入)ヲ、 反復的ニ乃至一定期間非資的ニド用ニノ・ノー

フルスインド・ニュー・フェッ・・コント マニカブンゴル到ってフヨルルニドミゴ

第五章 考 案

以上ノ所見ヨリ考案スルニ

ク作用スル場處ニ於テ最モ屢く之レヲ認ムルコトニヨリ明カナリトス。 於ラハ多數ニ於ラ斯ル類腫瘍乃至腫瘍ヲ發生セ もるも。とニアリテハ斯ル類腫瘍乃至腫瘍ヲ見ルコト殆ド無キ事、 至腫瘍ノ上述機械的、 余ノ人工 的二形成 化學的乃至機械的化學的刺戟ノ合同作用二因 セ シメタル家兎及もるも。こニ於 ケル胃、膀胱乃至膽囊等ニ於ケル類腫瘍乃 3 メ得タルコト、 竝二是レ等ハ以上刺戟作用ノ特ニ 是レ等刺戟ヲ作用セ ルモノナルコトハ、正常家兎乃至 シメシモノ

分岐、 間結締 富トナリ、比較的細胞中心ニ占居シ屢~核分剖ヲ營ミ、腺管ハ延長迂曲ス同時ニ粘膜固有層中. 漿膜下組織又ハ漿膜中ニマデ増殖シ全ク各層ヲ區別シ得ザルニ至リ或ハ淋巴管隙 胞 附近ノ結締織 群 二、是レ等新生物ハ肉眼的乃至鏡檢上ぽりーぷ乳嘴腫(家兎膀胱)及腺腫(家兎胃)乃 至 破 壌 ノ配列愈~不規則トナリ或 血管ノ充血 織 坦 |殖ヲ來シ健康粘膜トノ境界鋭利トナリ腺管乃至上皮細胞群ノ増殖ヲ來シ各腺管乃至上皮細 (肝臟乃至腹壁 (もるもって膽囊)ノ像ヲ呈セル ハ増殖シ圓形細胞浸潤ヲ來シ粘膜筋層ノ不整、 新生等ヲ來シ遂ニハ筋層乃至漿膜下組織ノ肥厚圓形細胞 胸壁等)ニ轉移ヲ ルモノハ粘膜筋纖維間乃至粘膜下組織中ニ侵入增 モノト云フベシ、即チ上皮細胞 形成スルニ至リ全ク形態學的並二生物學的二悪 肥厚、分裂及ビ粘膜下組織ノ肥厚、延長 ハ肥大シ核 浸潤 內 殖 ヲ呈シ = 2 マデ 更二筋層中乃至 ハくろまち 更二 增殖 粘膜筋 性 シ更 腫

○風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

ヲ呈 至 成 胸 下組織中ニマデ異 7 E 一漿膜 Æ デ増殖 ノ(もるもっと膽囊) ニアリラハ轉移ヲ形成シ全ク形態學的竝ニ生物學的ニ惡性腫瘍 スルニ至 屢~核分剖 侵入シ 部二 組 織 1 7 於テハ粘膜腺管ハ間腔 同 ヲ答ミ、 所性 デ 時 及ビ -増殖上皮細胞ノ配列並ニツレト結締織トノ關係配列狀態等甚ダ 二増殖シ或ルモノニアリテハ 塗二 著シキ肥 形態學的二乳嘴腫、 厚ヲ呈シ 開大、 迁曲、 更二粘膜上皮細胞乃 分岐シ圓形細胞浸潤い粘膜下組織 腺腫乃至破壞性腺腫 更二異型性ニ増殖シ途ニ筋層乃至漿膜下 至粘膜腺管八益~不 (腺腫性癌)ノ像ヲ呈シ 規則 ノミナラ 不規則ト (腺腫性癌)ョ構 = 組織 ズ筋 殖 更二或 ナサリ 3 中 粘 膜 iv -

中六例二於ラハ轉移ヲ證 轉移形成、 余ガ もるもご 膽囊ニ於ラ人工的ニ形成セシメ得タル破壞性腺腫 (形 明セリ其中四例ハ 肝臓内ニシテニ例ハ腹壁乃至 胸壁ナリ 態學的)十八例

或ハ化膿シ或ハ早期ニ移植動物死亡セルアリ為メニ其ノ成績ニ就テ斷言スル能ハザルヲ遺 以上試驗動物中、 移植試驗 余八以上形態學的乃至生物學的 もるもっと、家鬼ハ上述刺戟作用ニョリ上皮ノ増殖、 二破壞性腺 腫ヲ構 成 t ル數例二於テ移植 類腫瘍乃 至腫 悩トス。 瘍ヲ形成 試 3 2 毛

用 著變ヲ呈 同種動物ニアリテモ其 ス ルアリ又百乃至百數十日間二及ブ(多量ノ刺戟作 ノ形成ニ難易アリ、僅々試験後十乃至十五日間ニラ(即チ少量ノ刺戟作 用) モ 全 ク變化ヲ 認 × + in T

シ易シ然レドモ家鶏、

鳩並ニらって乃至犬ハ最モ變化ヲ呈シ難シ。

びちろーるニ 同一動物二 3 ル威受性ハ胃ノソレヨリ大ニシテ もるもっと ニ於テハ其膽囊ハ胃乃至膀胱二比 於テモ各職器ニョリ同 刺戟ニ對スル威受性ニ相違アリ、 即チ家鬼ニア y ラ

ノ威受性極メテ大ナリ。

膀胱乳嘴腫等ト同様ノ作用ニョルモノナルコト多言ヲ要セズ。 層乃至粘膜下組織中ニ向テ異所性乃至異型性ニ侵入增殖シ同時ニ筋層乃至漿膜下組織ニマデ圓形 於ケル 上皮性腫瘍、 化學的刺 性腫瘍ヲ形成セルニ至レルモノニシテ恰モフィーピーゲル、コップシュ氏等ノ寄生蟲ノ産出物 浸潤乃至肥厚 大増殖ヲ來シ遂ニぼりーぶ狀乳嘴狀乃至腺腫狀増殖ヲ營ミ更ニ不規則ニ肥厚且ツ粗鬆トナレル粘膜筋 等兩喇戟作用ノ粘膜表面ニ反復乃至一定期間持續的ニ加ヘラレシコトニヨリ先ヅ粘膜及粘膜下組 敬ニョ [反應トシテ血管 ノ充血新生粘膜固有層乃至粘膜下組織 ノ圓形細胞浸潤竝 ニ上皮細胞 ノ肥 並二本田氏ノ舌ニ於ケルびちろーる注射ニョル異型性増殖 ラ來シ類腫瘍乃至腫瘍ヲ形成シ更ニ淋巴管隙乃至他ノ臓器中ニマデ轉移ヲ形成シ以テ惡 - ル癌腫形成、山極、市川氏等ノたーる癌、今氏ノらのりん腺腫、上田氏ノびちろーる 池松氏ノ機械的刺

順肥乃至砂場性順順(開脱性癌) ト科スペキモノニシテ是レ等ハ以上ノ機械的、化學的乃至是レ

、一定ノ場處即チ注射針ノ穿入部及穿入孔結紮部ニ一致シテ發生スル ifi シテ余ノ實驗二於テ單二胃。 一戟ノ威受性ヲ大ナラシムルモノナルコトヲ證スルモノナリ。 膀胱、膽囊内ニびちろーる乃至らのりんヲ注入スル場合ニ於テ多ク コトヨリ考フル時

リト云フヲ得べシ。 吾人ガ臨牀上乃至病理解剖上屢~認ムル膽石症ニ於ケル膽囊癌ノ發生原因ヲ實驗的ニ證明 トニョリ斯ル類 特ニ本實驗ニ於テ興味アルハ單ニぴちろーる又ハらのりん等ヲ胃、 温息ヲ 形成セルコト竝ニ膽囊内ニ石ヲ插入スルコトニヨリ腫瘍ヲ形成セルコトニシ 「腫瘍乃至腫瘍ヲ形成セルコト及ビびちろーる注入ニョリ膽石」 膀胱乃至膽囊腔内ニ注入スルコ ラ形 成 シ其 刺 セルモノ テ是レ賞 戟 3 y ナ

○風間・内臓ニ於ケル人工的腫瘍形成ノ研究

性質ヲ發現スルニ至ル。

態ニ於テ + ルヤ否 而シテ、以上胃乃至膀胱ニ於ケル腺腫乃至乳嘴腫ノ更ニ腺腫性癌乃至扁平上皮癌ニ惡性化スルモ 生存シ得が癌腫變性ノ最モ可能ナルヲ思ハシム。 ヤハ不明ナレドモ少ナクトモ漸次惡性化ノ 傾向ヲ認メ得ルヲ以テ其ノ動物ニシテ更ニ 此 狀

的素因ノ必要ナルハ明カナリ。 ノ刺戟ヲ加フルモ全ク變化ヲ見ザルアリ故ニ是レ等類腫瘍乃至腫瘍發生ニ於テモ臓器的乃至個人 同一動物 ノ種々ナル臓器ニ同一刺戟ヲ加フルモ其ノ反應ニ大差アリ、又同種動物ノ同一職器

腫瘍ヲ形成シ難シ故ニ是レ等腫瘍發生ニ於テモ亦個人的素因ト同樣生物學的素因ノ存スルコト多言ヲ 四、犬、らって、家鷄、鳩等ニ於ラハ同一臓器ニ同一刺戟 ヲ 加フルモ家兎乃至もるもっと ノ 如ク 類

完備ヲ必要トスルモノナルベシ。 即チ是レ等腫瘍發生ニハ刺戟ノ種類(性質)強サ(量)竝ニ個體ノ威受性(素因)トノ間ニ於ケル要約

ドモ是レ等結石形成ニ就テハ他日改メテ述ブル所アラントス。 結石ノ主トシテびちろーる又ハらのりん注入ニョル粘膜ノ炎性反應ニ基因 家兎ノ膀胱もるもっこ ノ 膀胱乃至膽囊内ニひちろーる又ハらのりんヲ注入シテ形成 スルモノナルコト セシ 明 プカナ メタ

嘴腫 腺腫乃至破壞性腺腫(腺腫性癌)ト稱スペキモノニシテ是レ等ハ以上ノ機械的、 要之余ノ家兎及もるもつこノ胃、膀胱乃至膽囊等ニ人工的ニ發生セシメタル新生物ハぼりーぶ、乳 化學的乃至是

10) Fischer, Die exp. Erzeugung atypischer Epithelwucherungen u. die Entstehung hösartiger Geschwülste, Münch. med. Fiebiger, Bang, Det Kgl. Danske Videnskabernes Selskab, Biologiske Meddelelser. III, 4. 14) 風間,日本住血吸蟲症=於 Virchows Archiv. 208. H. 3. 9) Benthin, Erzeugung atypischer Epithelwucherungen. Zeitschrift f. Krebsforschung X. 1911. 本田, ぴちろーる注射= 国ル舌上皮ノ異型的増殖=孰テ・日本病理學會會誌・第十一年・ 30) 寶井, まうす=於ケル人工的 京都醫學雜誌, 第十七卷, 第十二號, 28) 石體, 大谷, 家兎ノ胃=於ケァ人工的乳嘴機臊隱形成, 揺, 第十五年, 第一册, 年。第四號・ 25) 驟瀾, 疾病ノ素因殊=腫瘍ノ素因=就テ・日新醫學・第二年・第八號・ 26) 上田, びちろーる塗布=ヨル 飼養家兎ノ胃ニ於ケル質験的きさんとまとーゼニ就テ、日本病理學會會講、第七巻、 24) 山極, 液狀球結晶 / 武嶽的研究 . 竝=該物質 / 沈著=因スル病鑾=耽テ・(第三同報告). 日本病理學會會講 . 第七卷・ 23) 権厭, 題粉末 り入ラ以テ飼養セル家兎ニ於ケル腺腫及乳嘴腫形成ニ就テ·日本病理學會會誌·第七卷·同第九卷· 22) **角田, 動物體ニ於**ケル 第二號 - 18)山極,市川,人工的「はびろーむ」養生=就テ・日本病理學會會議 第五卷 - 19)山極,市川,振騰ノ人工的養生=就 ノ腸管上皮細胞 ~てろとびー=就デ・日本病理學會會誌: 第十一年: 17) 山橋, 市川, 上皮異型的増殖=就デ・癌: 第八年: クル犬ノ腸管上皮細胞ノ へてろとびーニ就デ・日本病理學會會講· 第十年· 16) 川村, 鳳凰、日本住血吸蟲管生ニ因スル家兎 クァ腸癌=就チ・粒=ソフノ發生ト蟲明トノ原因的腸痛=就チ・癌· 第十五年- 第三册· 15) 川村, 鳳鷹, 日本住血吸蟲症=於 von Granulationsgeschwülsten und Adenomen, Karcinomen und Sarcom durch die Larve der Nematode Rhabditis pellio. und carcinomatöse Geschwülstbildungen. Zeitschrift für Krebsforschung Bd. XIII. 1913. 12) Fr. Kopsch, Die Entstehung Wochenschr. Nr. 42. 11) Fiebiger, Untersuchungen über eine Nematode (Spiroptera sp. n.) u. deren Faehigkeit; papillomatöse Krebsf. Bd. XIII. 8) Takeyoshi, Mori. Experimentare Untersuchungen über die Genese atypischer Epithelwucherungen. Aetiologie epithelialer Geschwülste. 7) Haga, Die Erzeugung atypischer Epithel u. Schleimhautwucherungen. Zeitschrift für 1) Aschoff, Allgemeine Pathologic, 1919. 2) Kaufmann, Specielle Pathologic. 1911. 3) Bibbert, Geschwulstiehre 上皮性腫瘍=就テ・日本外料學會維誘・第二十回・第二號・ 27)遊戲, 主トレテ機械的刺戟=由來スル人工的腫瘍發生=貮チ 5) Bayon, Epithelial proliferation induced by the injektion of Gaswarks tar. The Lancet. Dec. 1912. 6) Stahr, 4) Fischer, Uber experimentelle Erzeugung u. Epithelmetaplasie, Centralbl. f. allg. Pathol. u. Pathol. Anatomie. Bd. 20) 山楂,市川, 人工的乳癌養生=就テ. 東京醫學會雜誌. 第三十三卷. 第十四號. 据原因論·日新醫學·第三

以上ノ實驗成績ヨリ結論スルコト左ノ如シ。

至一定期間作用セシムル時ハ途ニ其ノ最モ多ク作用スル部ニ於テ粘膜ノぼりーぷ狀、乳嘴狀、腺腫狀. 一、家兎及ピもるもっさ ノ 胃、膀胱、膽囊等ノ粘膜表面ニ機械的、化學的乃至是等兩刺戟ヲ反復乃

増殖乃至乳嘴腫、腺腫又ハ破壞性腺腫(腺腫性癌)ヲ人工的ニ形成シ尚轉移ヲ形成シ得。 二、家莵及どもるもっさノ膀胱乃至膽囊内ニびちろーる或ハらのりん等ヲ注入スルコト(一囘乃至數 ニョリ膀胱結石、腎臓結石、尿道結石乃至膽石ヲ人工的ニ形成セシメ得。

二於ラモ個人的ニ差アリ更ニ異種動物ニ於テハ其ノ發生ニ更ニ大ナル差異ヲ認ム、故ニ是等發生ニ於 三、而シテ以上腫瘍發生乃至結石形成ハ同一動物ニ於テモ各臟器ニョリ發生ニ難易アリ又同種動物 個人的乃至生物學的素因ノ存在ヲ認メザルベカラズ。

以上動物中、もるもっとノ膽囊ハ是等刺戟ニョリ最モ腫瘍ヲ形成シ易シ。

素因トノ間ニ於ケル要約ノ完備ヲ必要トスルモノナルベシ。 從テ以上腫瘍形成ニハ刺戟ノ種類(性質)强サ(量)竝ニ臓器的、個人的乃至生物學的感受性即チ

(本編ハ大正十年十月三十日北越醫學會總會席上ニ於テ發表セルモノニ更ニ其ノ後 ノ 研究ヲ追加セ

主ナル文献

モノナリ

(大正十年十二月三十一日稿)

1) Aschoff, Allgemeine Pathologie, 1919.

2) Kaufmann. Specielle Pathologie Torr

つと體養内らのりん注入ニ因スル破壞性腺腫粒ニ其ノ肝臓内轉移形成(體養内らのりん注入もるもっと第一號)。

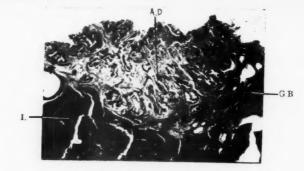


Fig. 2.

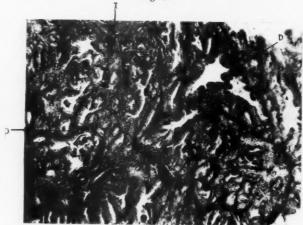


Fig. 3.



(Kazama)

Histogenesis der malignen Geschwälste, Virch. Arch. Bd. 162. 32) 川村, 前上本田氏戦告=讃スト追加・ 日本刺選學會書誌 表皮癌=数ラ. 癌. 第十二年. 第二册. 31) Brosch, Theoritische u. experimentare Untersuchungen zur Pathogenesis u. 第十一年 33) v. Flebiger, Virchows Peiztheorie und die heutige experimentelle Geschwulstforschung D. m. W. Nr. 48, 49.

階層ノ党明

もるもっと贈鑑内石插入ニョル破壊性腺腫竝ニ其ノ胸壁轉移形成"(贈鑑内石插入もるもっと第一號)

第一圖、腫瘍部顯微鏡的標本寫真(暑寒大)、A <贈鑑破壞性腺腫、Lハ肝臓、G <肥厚セル贈鑑壁

第二圖、同(張原大)、D<異型性增殖腺管、I<間質

第三圖,同胸壁轉移形成部,顯微鏡的標本寫真,MA轉移,BA胸壁,KA肋軟骨

第二表、膽靈內縫合絲捕入ニョリ葱起セルもるもっとノ膽靈破壞性腺腫竝ニ其 ノ 肝臓内轉移形成(膽靈内縫合絲捕入も るもっと第二

第一圖、腫瘍肉眼的標本寫真,G < 膽靈腫瘍、D. < 輪贈管,L ハ肝臓

第二圖,同腫瘍部顯微鏡的標本寫真(弱原大),D<異型性增殖腺管Nハ縺合絲,Lハ肝臟,Gハ贈囊破壞性腺腫

第三表,もるもっと 臍囊内ニびちあーるヲ注入シテ生シタル購石竝ニ破壊性腺腫,(臍囊内びちろーる注入もるもっと第二號) 第三圖、同,肝臓内轉移形成部ノ顯微鏡的標本寫真、Mハ轉移、Dハ異型性增殖腺管、G、外肥厚セル騰囊、Lハ肝臓、Kハ肝臓被膜

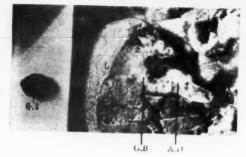
贈石竝ニ腫瘍肉眼的標本寫真。G.ハ贈石、A.ハ腫瘍、G.パ蓍シク肥厚セル贈叢壁、Lハ肝臓。

同腫瘍ノ顕微鏡的標本寫真(強廓大)、A ハ異型性增殖腺管、M ハ筋繊維束(断裂セル)。

肝臓内轉移電ノ顕微鏡的標本寫真(强原大)ひへ肝臓内ニ轉移セル腺管、Lハ肝臓

っと贖重内らのりん注入ニ因スル破壞性線匯粒ニ其ノ肝臓内轉移形成(贖重内らのりん注入もるもっと第一號)。 第四表、贖靈內びちろーる注入ニョ リ惹起サレ タル,もるもっと輪躪管腺腫性癌(膽靈內びちろーる注入もるもっと第三號)及もるも

Fig. 1.



M.B Fig. 2.

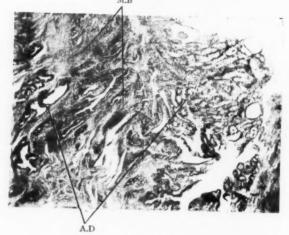
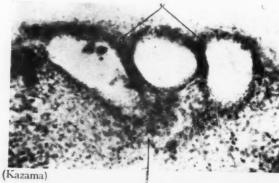


Fig. 3.



風 間 論

文

附 圖 (第三表)

Fig. 1.



Fig. 2.

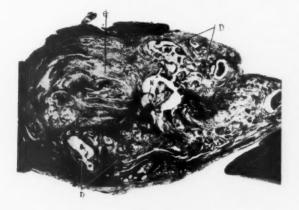
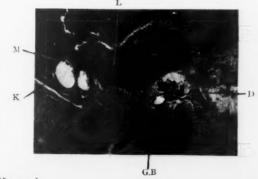


Fig. 3.



(Kazama)

風

間論

文

附

圖

第二十

Fig. 1.

風

間論文附圖

第五表)

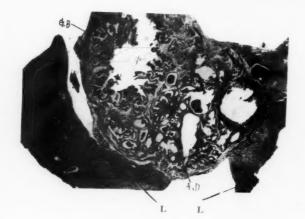
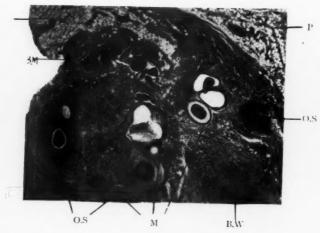


Fig. 2.



(Kazama)

PLATE IV.

Fig. 2.



Fig. 1.

風

間論文附圖第

四 表



Fig. 3.



Fig. 4. G.B



(Kazama)

第二圖、臍囊破壞性腺腫ノ肉眼的標本寫真、A. ハ腫瘍、B. ハ臍囊、Lハ肝臓。 第一箇、輪贈管膜離性疾肉眼的標本寫真、A、A、種類、C、輪贈管、B、A、腱鍼。

第三圖,第一圖,腫瘍部顯微鏡的標本寫真(强廓大)A、腺腫性癌,N. <輪臍管粘膜。

第四圖ハ第二圖腫瘍部竝ニ肝臟內轉移部顯微鏡的標本寫真(强廓大)D.ハ 異型性增殖腺管,MA肝臟內轉移,B.ハ膽囊,LA肝臟。 第五妻、くるもっと 贈鑑内らのりん注入ニョリ惹起サレタル贈鑑破壊性腺腫竝ニ腹壁轉移形成。

第二圖、同第五號贖露破壞性腺腫ノ腹壁轉移部ノ顯微鏡的標本寫真(强那大)、MA腹壁ニ轉移セル腺管。Sハ骨樣組織、Wハ腹壁、 贈鑑内らのりん注入もるもっと 第三號贈鑑腫瘍部顕微鏡的標本寫真(弱原大)、A ハ破壊性腺腫、G ハ正常贈鑑壁、L ハ肝臓。

節ガ急ニ著朋ナル餐育ヲ呈シ、或ハ發育ヲ呈シタル = 認メラ 左ノ如キ 如キ場合ニ n 0 ナル 所ニシテ、 腫瘍患者 ベシ。 最近長與博 ガ外科學的操作ニ依 士ノ報告セラレ リ 受り ベキ影響 7 ラシク思考セラル ル白石氏剖檢例ノ如キモ亦其適例ナル 其精神的不安或ハ疼痛等ヲ除ケバ大 、場合ノ助 カラザ w 1 ベシ、 從

是世間別し相前自形治「ドラル号別男」を引起自己相談・ノニ国

111

一、同一個體ニ於ケル腫瘍數ノ減少。

二、操作中ニ生ジタル出血

三、手術中ノ麻酔。

ト云 腫瘍!發育或ハ轉移形成ヲ促進ス、Tyzzer モ亦日本産まうす腫瘍ニ就キ斯クノ 更二實驗回數ヲ ŀ 3 ノ適用いまうすノ腫 テノ實験 テ從來屢~論議セラレ、 3 是等ノ影響中第一ノ同 フ 7 傷ノ發育ヲ促進 n 麻醉 者 ガ腫瘍ノ發育ニ 報告アリ、 少 カラズ、 關 重子タル上二於テ記 スル氏等ノ實驗ハくろゝほるむ及ピえーてるヲ使用シタルガ、くろゝほ 腫瘍發育ニ對 進スル事え^ー 氏等ニ依レバー時ニ大量ノ失血或 同一 及ボス影響如何ニ關スル實驗的研究報告ハ Gaylord & Simpson ガまうす癌 或ハエールリッヒノあされぶし一説ヲ以ラ、 個 個體內 體內 對スル抵抗力ヲ害スル者トシ、其結果ヨリシテ人體ニ於ケ てるヨリモ顯著ナリ、是等ノ實驗ノ結果ヨリシ = 二於ケル腫瘍ノ数ノ減少ハ手術 述スル 於ケル腫 所 瘍數 アルベキヲ期シ茲ニハ其詳說ヲ避ク。 減少ノ殘留腫瘍發育ニ及ボス影響ニ關シラハ余等ガ 小數回反復セラル、少量ノ失血ハ 後残遺腫瘍ノ迅速ナル發育 或八腫 **温璃抗體** テ氏等 如キ事實ヲ認 上記第二第三ノ失 ヲ以テ説 るむ ノ原因 明セ メタリ 醉,

くろ、ほるむ麻醉ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ

The Effects of Chloroform Narcosis upon the Growth of the transplanted Animal Tumors.

東京慈惠會醫科大學病理學教室

丙 くろゝほるむヲ直接腫瘍組織ニ作用セ

シメタル場合

動物體重及ど轉移形成 實驗成績總括

第二、實驗材料及方法

實驗成績

第一、緒

惡性腫瘍ノ根治的療法トシテ原發腫瘍ヲ外科學的ニ切除セルニ際シ、旣ニ他ノ部分ニ存セル轉移結

節がき二番月トンをディミノ、え、そ

くろゝほるむ麻酔及ど手術

くろゝほるむ麻酔及乳酸注射

追試 一ノ想像 n ハ上記 ハ核分部 發育 3 n 促 iv \ Gaylord = ラブ 像二 進 過ギズ、何レ 其結 ノ事 モ亦影 果 實 等ノ報告ト 21 T 後 IJ 響ラ及が ロニ示ス = þ モ ス セ V ガ 110 3 對 シ、或ハ更 如 更 麻 比 醉 7, = 3/ ララ動 其原 ノ影響如 從來 因 物 =1 7 腫 其 ノ報告ト 究 何ヲ 一發育 鴉 x -更二 二作 2 Æ 異 或 F 精細 用、 y 21 1 斯 ストル 殆 テ、 -7 1 所ナキャ 實驗シ、 ノ如 ら、て肉腫 F. 發育促 + ヤハ想 事 若シゲー 7 進 及 in 1 癌 ~" 像、 ラ、生 + 事實ヲ認メ難 腫 TI p ード氏等 ピリ 家兎肉 7 思 3/1 31 考 71 セ " カ -ノエフ 3/ リリシ 就 x タ + ラ

ŀ 5 同 定 3/ 倘 ルトノ事ヲ、Bac. mycoides, Proteus, Heubazillen ニー乃至〇・〇一%ノ乳酸 時、 3 × 7: 告ヲ記載シ居レリ = > 麻 次 ガ通常空氣中ニ存スル非病原性ナル細菌ヲ單純ナル化學的物質ノ添加 醉 V IJ ・五%ノ乳酸○・五竓ヲ皮下注射シテ、 ルガ、 1 h 同 ノ報告 時 同ジ雑誌中Rostock いまうすノ可移植性腫瘍(Keysser, = 余等ハ乳酸 ア リ、其後昨年十一月 Lange u. Yoshioka 0 注 射 1 腫 瘟 發 育ニ 其發育或以移植陽性率习人工的二促 及 ボ ス 影響ヲ檢 Much シタリ、 Carcinosarcoma) ノ此實驗ヲ 此乳酸 溶液ヲ併 = 依リ病原 注 進セン 追試 用 射 ノ實 性 3/ ヲ、接、 シャメト ラ 2 7 其 得 殿 病 原 セ 胜 スト 3/ 7

T = 進 IV 然ルニ余等ガ上 スルノ事實ヲ認メラレ 取リテハ多大ナ らってノ暴レ廻ル勞働 記 n ノ麻酔 が如 アリ、 カ 7 認メ ガ其體内二乳酸發生ノ動機トナ 施スニ際シ動物殊ニらってハ鰻内ニテ暴レ廻ル者多ク 生理學ニ於ケ 5 iv 然 IV ル此實驗 二一方生 理 28 動 學ノ實驗 物體 リ、或ハ麻酔 3 リ切り 二依 v バ筋 離サレ ガ乳酸發生ラ 1 タル 收 縮 筋 11 其筋肉勞働 乳酸 = 促スガ如キ 就 + ノ發生ヲ促 テノ

〇木村・大場・和田・くろゝほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ教育ニ及ぶス影響ニ

學的 いの適用上 |注意ヲ要スト切言シタリ、(此實験ノ詳細 ナル 記 述 10 原報告或ハ本

抄

錄欄

7

見

ラレ

汉

NI 場合ノミナラズ Phenylhydrazin ニ依り化る影響ニ就キ多數ノ動物ヲ使用シタル報告 其使用動物數 少 7 尙 715 其 化學的特別 後 ノ報告 二、移、沼 貧、形、、、血、成、小 ナキガ如シ、 ヲヽヲ、此 ア生ゼシメタル場合これ 促進シ、尚お失血いのは、 しまりの 失血 ガ可移植 台ニモ同様ノ事實 ニハ人工的機械的(腫 性 腫 ピまうす 瘍 ノ轉 移 實ヲ認メ得 形 成

Ŀ ルヲ見ル可シ、くろゝほるむ麻酔ノ影響い上記 !ノ如ク Gaylord & Simpson 氏及ビ蓼沼、小此木氏等ノ失血ノ影響ニ闌スル實驗成績ハ或 ノ報告後追試セラレタル事ナキ ガ 如 程

職報告アリ、抱水くろらーる、くろゝほるむ等!種々ナル溶液或ハ蒸氣ヲそらまめ、Vicia ゑんどう Vicia sativa 等種々ノ植物ノ種子ノ發芽ニ作用セシメタル時、其幼芽中ノ くろもぞー ル不規則ナルくろもぞーめんノ發現多キ事ノ記載アリ、氏ノ報告ノ附闘中ニ見ラル、種 [41化學的樂品ガ細胞或ハ其核分剖像ニ及ポス作用ニ關シテハ坂村理學博士 1 極メテ廣汎 甚、チ、ダ、或、 8) 規、ノ、 A 則、麻、 んノ像 (Hyperchromatosis, Asymmetrische mitotische Figuren, multipolare ガ ラ、薬、物 シムル事實が、其應用ハ方法ニ於ラ多少ハ相違アノ作用(細胞ニ直接作用セシメタル場合)が植物細 ノ悪 性腫瘍細胞中ニ屢~遭遇スル核分剖像ト其 形態 りいれた。旅三於テガル態ニ於テガ 核分剖像 EN ナッ共 動物ハス核分 二種 R ナル實

<u>あい亥分別象こもが影響するボシ、 歩い巨っ其後有っち用スレ所ナキャハ想象すまピシオタリ、 七杉</u>

モノー :女男:」:カッドノお身行ノガコニ諸型治罪 モラ胆維制

第三、實驗成績

くろゝほるむ麻酔法

らって肉腫瘍一囘實驗。(一九二一年十一月二十一日—十二月十日)。

麻醉群。十四匹

對照群。十三匹。

結果,移植陽性率及ビ其發育ヲ比較スルニ嘛酔群及對照群ノ問ニ差異ヲ認ノ難シ。腫瘍接種十一月二十一日,二十二日ヨリ十二月十日ニ至ル迄十三囘麻酔ヲ施ス。

らって肉腫第三間實驗(一九二二年一月二十一日一二月十日)。

麻醉群

乳酸注射群各七匹宛。

對照群

一月二十一日腫瘍系むるじなん○・一五竓皮下接種。

麻酔ハー月二十三日ヨリ二月九日迄十七同施ス。

乳酸注射八一月二十三日二年皮下注射。

結果、腫瘍移植陽性率及ビ發育程度へ上記三群ノ問差異ヲ認メズ。

らって癌第一回實職(一九二一年十月二十六日-十二月十日)。

甲、體重四〇乃至六〇瓦ノ若キ動物ヲ使川シペル場合。

麻醉群、七匹。

〇木村・大場・和田・くろ、ほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ

育促進ノ事實ヲ認メズ或ハ却リテ制止セラレタルガ如キ場合アリテ、Rostock ノ 報告ト全ク相反シタ 定ノ關係ヲ認メ得可キカ否ヤヲ檢索スル必要アルヲ以テ、此實驗ヲモ追試シタリ、 アリテ乳酸注射ト同様ノ結果ヲ生ズルガ如キ事アリトスレバ麻酔ト乳酸注射及ビ腫瘍發育等ノ間ニー 然ルニ其結果ハ發

第二、實驗材料及ビ方法

使用シタル可移植性動物腫瘍ノ種類ハ左ノ如シ。

エンゼン氏らって肉腫、

フレキシナー氏らって癌腫。

京都大學家兎肉腫(加藤博士)

くろゝほるむ麻酔法。

内ニテ走り廻り或ハ上方ニ飛ビ上がり騒がモ、終ニハ全麻酔ノ狀ニテ静止スルニ歪ルモ口邊ノ剛モノミハ尚ホ動カシ居ル事多シ、 クノ如き動物ヲ縁内ヨリ出ス時ハ敷秒乃至一分以上靜止ノ狀ニテ横臥ス、斯クノ如き操作ヲ毎日或ハ隔日繰リ返スコト九囘乃至四十 直徑一五糎,深サ一五糎ノ硝子固筒内ニくろ、ほるむノ適富量ヲ適下シ一乃至三匹ノらってヲ入レ テ蓋ヲナス、多クハ暫峠ノ後曦 時々動物ノ體重及ビ腫瘍ノ大サラ皮膚上ヨリ計測シテ其教育ノ狀態ラ比較シタリ。

家兎ハたおるニテ包ミ硝子こつぶノ底ニ脱脂綿ヲ置キ其ニくろゝほるむヲ適下シテ口部ニ當テ其蒸氣ヲ吸入セシムルノ法ヲ取リタ

乳酸注射

獨選めるく會社製乳體!○•五%水溶液ヲ腫瘍接種部ノ他側ノ背部皮下ニ注射シ且ツ成ル可ク注射液ノ皮下ニ瀰蔓浸潤 シ テ腫瘍組

對照群

一月十六日腫瘍ゑむるじおん○・一五竓皮下注射。麻酔一月十七日─二十六日迄九囘行フ。

乳酸注射八一月十七日,十九日二一连宛,二十三日二八二连皮下注射。

三月二日二腫瘍ノ存セル者

殆ンド吸收セラレ又ハ吸收消失

[IC

Ξ

匹

而シテ腫瘍繋育ノ狀態へ麻酔群ト對照群トハ略;相等シカリシモ,乳酸群ハ他ノ二群ニ比シ劣レル事精く著明ナリキ。

家兎肉腫第一回實驗(一九二二年二月十三日—三月二十日)。

匹

(腫瘍注射箇所八ヶ所)

二月十三日腫瘍粥○・三竓宛ヲ背部及ど腹部皮下ニーケ所宛接種ス。

IA.

(同上)

麻酔ハ二月十四日以後へ毎日(三回休止)麻酔ヲ行ヒ三月二十日ニ至ル約三十回麻酔ヲ施シタリ,内一頭ハ二日目ニ死シタルヲ以テ

麻酔群ハ三頭腫瘍敷ハ六箇所トナリタルナリ。

結果、移植陽性率へ雨群共百%ナリ。簽育ノ狀態ハ麻酔群ハ對照群ヨリモ少シク劣レルヲ示ス。

麻醉及隨滿切除併用青點

らって癌第二囘實驗(一九二一年十一月十五日—二月二十四日)。最初らってノ後背部兩側 ノ 皮下ニ腫瘍ヲ接種シ一定時日ノ後其略

〇木村・大揚・和田・くろゝほるむ麻酔可移ノ植性腫瘍ノ發育ニ及ボス影響ニ就

對照群, 六匹

十月二十六日腫瘍ヲ接種シ十一月九日其大サ及ビ動物體重ヲ檢シ其略;同様ナル者ヲ二群ニ別チテ、十一月九日以後十二月十日ニ

の、發育モ劣リテ從來ノ報告ト却ツテ反對ノ結果ヲ見クリ。 至ル迄二十一回麻酔ラ行ヒタルナリ。 對照群ノ六匹ハ麻酔群ノ七匹ニ比シ腫瘍接種陽性率及ビ發育ノ程度ニ於テ促進ノ狀ヲ示ス、麻酔群ハ對照群ヨリ陽性率モ少

乙、體重一三〇乃至二一五五ノ老ヒタル風ラ使用シタル者。

肺醉群、六匹。

對照群、四匹。

腫瘍接種及麻酔ノ方法ハ甲ト同様ナリ。

物ノ成績ノミヨリシテ、直チニ他ノ實驗ノ成績ヲ壓倒否定シ得ル程顯著ナル者ニ非ザル事左表ノ如シ。 結果、麻酔群ハ對照群ニ比シ腫瘍移植陽性率及ビ赞育度ニ就テ稍、優リタルノ成績ヲ得タリ、然レドモ是等ノ結果ハ單ニ此少數動

檢查月日 十一月九日 十二月十日

10	羊照業	Ŋ	群醉麻						
	79		ti						
	匹		Tr.						
	同		二倍大豆						
	Ŀ			し ラ					
吸收消失	小豆大	D	收	過大豆大	TO.				
=	amili	gards.	=	-					
匹	匹	TC.	TC.	匹	T.				

らって極第三回實驗(一九二二年一月十六日—三月二日)。

手術群(腫瘍一箇)

十三匹

ナシ

H 匹

對照群(腫瘍二箇){死

八腫瘍ノ大サヲ増サズ或へ全ク吸收消失ノ狀ヲ呈ス。 乳酸液注射。七匹中一匹ノミハ其後ニ於テ腫瘍ノ大サヲ稍;増レタルモ之ヲ他ノ二群ノ者ニ比スレパ賢育度甚が劣レリ、他ノ六匹のののの。

腫瘍組織ニ直接くのゝほるむ蒸減ヲ作用セシメタル實驗

らって肉腫、(一九二二年二月十一日一三月十四日)。

昨二共中二脫脂綿ヲくろヽほるむニテ充分ェ瀛潤シタルモノヲ容レ蓋ヲ施シテ一時間半放置シ、尙ホ其間一囘腫瘍粥ヲ搔キ廻ハシ擴 腫瘍ヲ鋏ニテ細切シタル者ヲ徑約二寸! しゃーれニスレル可ク渉暦ニ之ヲ擴ゲ、更ニ之ヲ徑約三寸!ペトリー氏しゃーれニ スレ同

上記ノ腫瘍粥ト同様ニ所置を唯くろ、ほるむヲ入レザリシ者ヲ對照腫瘍トシテ川ヒタリ。

七匹ノらって ノ右側ニくろゝほるむ蒸氣ニ曝露シタル腫瘍粥ヲ接種シ、反側ニハ對照トシテ無所置腫瘍粥ヲ接種シ其成績ヲ檢シタ

接種陽性

くろゝほるむ賺露

らって傷(一九二二年二月二十四日一三月二十九日)。

實驗ノ法へ上記らって肉腫ノ楊合 ト同様ナリ、唯此實驗ニテハくろゝほるむ蒸氣曝露ヲ大ナル硝子縄内(動物ノ麻酔ニ川ビタル者)

〇木村・大場・和田・くろ、ほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ

獲育ヲ促進セラル、二至ルカ香カヲ檢シタり。 是等ノらって中最初ヨリ腫瘍ノ發育不良ナリシモノヲ選=實驗 ノ或時期ニ乳酸液二鈍ヲ皮下ニ注射シテ、發育不良ナル腫瘍組織が共 **競青ノ狀ヲ檢シ、一群ハ對照トシテ何等ノ操作ヲモ施サズ同一篤體ニニ箇ノ腫瘍ヲ發青セシメテ其大サヲ手術群ト比較シタリ、** 同樣ニ發育セル大サノモノヲ二群ニ分チ,一群ハ其一側ノ腫瘍ヲくろゝほるむ麻酔ノ下ニ剔出除去シ,腫瘍敷ヲ一億ナラシメテ其

新期群

手術群十三匹,

1酸群 七 匹,

十二月十五日腫瘍接種。

月二日八匹手術, 一月八日五匹手術, 一月十八日一匹手術。

月十九日乳酸液注射。

結果

筒ノ腫瘍ノ大サトノ比較ハ後者が劣レル事者シキハ勿論ナリ。 ノ優レルガ如キ者アルモ總括的ニハ兩群ノ間其差ヲ認メズト云フノ至當ナルガ如シ、對照群ノ二箇ノ腫瘍ノ大サノ和ト、手術群ノ一 [編ノ大サ。一匹ノ動物體ニ一筒ノ腫瘍ノ存セル手術群ト二筒ノ腫瘍ノ存セル對照群トノ比較ハ幾分カ手術群が簡々ノ腫瘍ノ大サの 000

ルヲ以テ、比較的長時生存セル省ハ腫瘍發育度ノ小ナル者ノミナルペキが故ニ、此比較ニ於テハ容易ニ優劣ヲ斷ジ得ズ。 僧腫瘍發育ヲ促進スルが如ク思考セラレザルニ非ザルモ、此場合ニハ對照群ノ動物ハ腫瘍發育著明ナル者ハ共以前ニ旣ニ斃死シ居レ 月二十三日迄生存セル動物ノ腫瘍ノ大サノ比較ハ手術群ノ方稱:優レルが如シ、故ニ手術後長キ時日ノ間ニハ腫瘍敷ノ減少ハ境

20、零ロくる^ほるむ麻酔!下二腫瘍敷ヲ滅ズル事が、動物!生存期間ヲ長カラシムルが如ク思考セラル。 (ルモ明ラカナリ、是等!點ヨリスルモ腫瘍!發育或ハ轉移が手術ニ依り急ニ促進助長セラレタルが如キ宇冀ハ此資驗例ニテハ認メ |存ノ長短。手術ニ依り一筒ヲ除去セル者ヨリモ。二筒ノ腫瘍ヲ存スル對照群ノ動物が痙削衰弱シテ早ク斃死スルニ歪ルハ左表ヲ

二月五	同州	一月十六日		らって癌	同十	十二月五	同	同十	同廿	同十	同十	十一月九		甲	らって傷	同十	同五	同州	一月廿一	
à	B	n		らって揺第三回青嶽	В	B	B	五日	H	十七日	十三日	B			らって癌第一回青粒	A	П	B	A	
一〇五、〇〇(同)	100、四1(同)	六五、四一(十二匹)	對照群(平均)	粉.	七八、CO(同)	七五、二〇(五匹)	六八、〇〇(同)	六二、三三(同)	五二、五〇(同)	五三、三三(同)	五三、三三(同)	五三、三三(六匹)	對照群(平均)		ARR	九六、一六(同)	八七、五〇(六匹)	七二、八五(同)	五四、〇〇(七匹)	
九五、六三(同)	八七、二七(十一匹)	バ六、九一(十二匹)	麻醉群(平均)		七三。〇〇(同)	六六、六〇(同)	六五、〇〇(同)	五六、六〇(同)	五〇、四〇(五匹)	四四、六六(六匹)	四三、〇〇(同)	四五、〇〇(七匹)	麻醉群(平均)			九1、〇〇(六匹)	七三、〇〇(同)	六五、七一(同)	五四、四二(七匹)	
一二〇、五八(同	101、六六(同	六七、九一(十二匹)	乳酸群(平均)		一三八、二五(同)	一四五、二五(同)	一四五,五〇(同)	一三九、二五(同)	一三三,五〇(同)	一四一、二五(同)	一五二、五〇(同)	一五五、〇〇(四匹)	對照群(平均)	Z		九四、五〇(六匹)	七九、二八(同)	七〇、四二(同)	五二、八五(七匹)	A PLANTAGE STATE OF THE PARTY O
\cup	~	匹)			一三五、〇〇(同)	一三五、六六(同)	一四六、六六(三匹)	一五二、五〇(同)	一四四、八三(同)	一五八、六六(同)	一六三、三三(同)	一七〇、八三(六匹)	麻酔群(平均)						The best of the be	

三五

〇木村・大場・和田・くろゝほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ポス影響ニ就テ

ヲ殆ンド認メ難シ、卽チ此場合ニハ腫瘍組織ノ動物體内發育ハ何等ノ影響ヲ蒙ラザリシナリ。 ニテ行ヒタルト、躁露時間が一時間ナリシ事ノミ異レリ、對照トシテ用ヒタル無所置腫瘍刺モ亦細切後一時間放置セル者ナリ。 上記ノ兩種ノ腫瘍粥ヲ七匹ノちってノ左右兩側ニ接種シタルが、其結果ハ移植陽性率ハ兩者共ニ百%、其發育ノ狀態モ亦兩者ノ相違

動物體重及び轉移形成

精密ニ云へパ決シテ動物體ノミノ重量ニ非ザルモ、上記ノ如ク腫瘍ノ移植陽性率及其發育程度が甚シキ差異ヲ呈セ ザ ル 楊合ニ於テ リ、要スルニ體重ノ增減如何ニ依リテ其鍵否ヲトスル大體ノ標準トナシタルナリ、勿論此體重へ(動物體+移植腫瘍ノ重サ)ナルヲ以テ が動物體ニ於ケル腫瘍發育ニ影響ヲ及ボスが如キ事ナキカヲ順慮シ、實驗動物ハ其腫瘍ノ大 サ ヲ 計測スル毎ニ、其體重ヲ計量シタ 其平均體重ヲ事グルニ止ム。 腫瘍」ノ發育が如何ナル影響ヲ受ケタルカ否カヲ觀察スルヲ得可シ。動物體重ノ詳細ナル報告ハ他日ニ讓リ玆ニハ各實驗列動物數及い。 いいいいいいいいいいいいいいいいいい A、「動物體+腫瘍ノ重サ」ノ和ニ依リテ動物體重ノ極メテ大體ヲ窺知スルヲ得可ク、尙ホ兩者ノ和ノ重量ノ比較ニ依リテ、「動物體+ 殆ンド毎日或ハ隔日ニくろヽほるむ麻酔ヲ行フ事が其動物ニ何等カノ爲害作用トナリ、特ニ動物ヲ不健康ナラシメ痩削衰弱ノ結果

らって肉腫第一囘實驗

一月		507	同	十二月	同	同	+		
一月廿一日		肉腫瘍	+	五	三十日	二十六日	十一月二十一日		ON 100 AN
		らって肉腫第三回青驗。	B	B	B	H	B		
五四	對照		八五、	六七、	Ö,	五九、	四五	對暗	
五四、〇〇(七四)	對照群(平均)		八五、二五(八 匹)	六七、六六(十二匹)	三〇(同	五三(同	四五、一五(十三匹)	對照群(平均) 瓦	
9			<u>E</u>		J	_		五	
五四、四二(七四)	麻酔群(平均)		七五、	六三、	大一、	五九	四七	麻	
到)			七五、二五(八匹)	六六(同	六一、六六(十二匹)	五九。〇〇(同	四七、二八(十四匹)	麻醉群(平均) 瓦	
			U	_	远	_	匹)	五	
五二、八五(七匹)	乳酸群(平均)								

五四 〇〇(七四) こ、ノ豆(り

11. 11. 11 · 五四、四二(七匹)

家 夷 肉腫、第一囘、

上記1六囘ノ實驗成績ヲ通覽スルニ、對照群及ビ麻醉群ノ腫瘍發育ノ比較ニ於ラ殆ンド差ヲ認 メ難

+ 場合、 四囘 (らって肉腫第一、第三囘、 ら、て癌第三囘、 家兎肉腫 第一囘)。

麻醉 群 1 發育良 ナリシ場合 们 甚ダ輕 度)、 一囘(らって癌第一囘、 2

麻醉 セ、放 セシムル者ニ非ズト部 似ニ余等實驗ノ結果 群ノ發育不 良 ナリシ 認ムルラー 場合 至常大学 면 リトス可シ。 (3) て癌 タッル・ 第 が、如い P 甲 クト 動、 物體 內、 ニ於ケル可移 植、 性。 腫、 瘍、

11

發育、

ヲ、

增、

麻醉及腫瘍切除實驗

らつて癌第二囘實驗

ム、瘍、生 1 スル者 かります。減い事い減い 間 ラ 腫 八次 認 搗 個 間 x ラ 2 1 宵、 々ノ大サ が、ル、認、事、 iv テ二個 個々ノ大サヨリ • 所 17 30 = 1 依。 * = 7 21 = いしたか 3/ 切 シ 有スル者トー個 比 テ、 除 較 手 ラ・的 決シテ手 Æ 術 ウシムルヲ得ル者、 二依 稍~大ナル リーニ 7 術 個 有 後 ノ腫 ス 殘 n ラブ 留 イノ如い 如キ観 瘍ョー スル迄生 者トノ大サニ 腫 瘍 クい カデ 倜 直 7 麻酔及手術ノ結果腫 チ IN -減 ---Æ 差ヲ認メズ、 顯 20 著 此 ラレタ 事 迅 速 實 ル場合 ナ 21 ンテ、 IV 動 發育 物 唯腫 瘍、動、 ガ = 長 , ハ物 瘍 7 呈 時 殘 ノ、敷 育、生、ヲ 生存 2 協 來 セ 急いハ IV IV 也 腫 ル者 劇、手、 = 非 術、 瘍 V 1 カ 增、二、 比 進、依、ル セッリ、者 個 シ、腫、 7

くろ、ほるむ蒸氣ニ直接曝露シタル實験

〇木村・大場・和田・くろ、ほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ボス影響ニ就

〇木村・大場・和田・くろゝほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育ニ及ポス影響ニ就

一二六

其體重	是等	三月	同	同	二月
二甚シ	ノ表ハ	Ξ Π	#==	十七日	九十日
キ影響	各箇動			1-3	
ラ蒙ル者	物體重增	0.	一六		10八
ニ非ズシ	減數ラ示	00(同	一六、六六(同	11、1六(同	1〇八、四一(十二匹)
テ、無	サール	_	_	$\overline{}$	
所置ナル	ヲ以テ				
が対照群ト	充分二理	11111	一〇九、	一〇五	101
其增減二	解セラレ雑	00(+	五四(同	00(同	〇一、〇九(十一
於テ大體歩調	た 計アランモ	<u>E</u>	_	<u> </u>	
ラーニセ	モ、大	_	-	_	_
ル	八體麻醉	四三	二六	六	一二、一六(十二匹)
ヲ認ム	或八乳	九一(同	六六(同	一六、九一(同	一六〇
ルヲ得	酸注	同	同	同	十二元
可少"唯	射等ノ操))	
THE.	TH:				

動物體重二甚シキ影響ヲ及ボス者ニ非ズ。 稍く関係スル所大ナリ、是等ノ貼ヲ充分ニ考察スレバ共平均體重ハ一層甚シキ差ヲ示サレル事ヲ認メ得可シ、卽チ麻酔或ハ乳酸注射ハ : 五十瓦前後ノら「てハ其後ニ於ケル體重ノ増加ハ雌獣ニ比シ雄ハ 甚が大ナル場合少カラズ,雄獣ノ多キカ否カハ其群ノ體重増加ニ 余等が使川シタ 作二依り

精彩形成

12 テハ一例を認ムルボヲ得ザリシナリ、故ニらって肉腫ノ此實驗ニテハ麻酔或ハ乳酸注射ハ轉移形成ニ大ナル影響ヲ及ボス者ト認メ か かタメ全部ノ動物ヲ檢索スル能ハザリシナリ)ヲ肉眼的ニ檢シ"更ニ肺"肝"脾ニ就キ組織學的檢索ヲ行ヒ轉移ノ有無ニ らって肉腫第三回實驗動物ノ 斃死セル者。 何レニモ轉移ヲ認メ得ズ、嘗テ藤純氏ハ らって肉腫轉移ノ組織學的ニ肺臓ニ認メラル、事多キヲ記載セラレタルガ余等ノ此實驗 對照列四匹,麻酔列及乳酸列各五匹宛(夜中斃死セル者ハ翌朝迄ニ他ノ動物ニ喰セラル

第四、實驗成績總括

くろゝほるむ麻酔法

らって癌腫、第一囘甲、乙、第三ら、て肉腫第一囘、第三囘

家兎肉腫、第一囘

動物ニ反復くろゝほるむ麻酔す施行スルモ該動物體ニ存スル腫瘍餐育ヲ促進セシムルヲ得ズ。

川古ノ助相ラ後クリ

體內接種後ノ發育ハ決シテ堉進セラル、事ナシ。 くろゝほるむ蒸氣ヲ直接腫瘍組織ニ作用セシメタル後(一時間乃至一時間半)、該腫瘍組織ノ動物

三、二箇ノ腫瘍ヲ有スル動物ヲ〈のゝほるむ麻酔ノ下ニ其一箇ヲ外科的ニ除去シタル後、殘留セル腫 瘍ガ急ニ其發育ヲ増進スルヲ認メズ、且ツ動物ノ生存期間ハ此手術ニ依リニ箇ノ腫瘍ヲ有スル對照 動物ヨリモ長カラシメ得可シ。

四、乳酸注射モ亦動物腫瘍ノ發育ヲ促進スル作用ヲ有セズ。

くろゝほるむ麻酔ノ反復,或ハ乳酸注射ニ依リ動物體重ノ著明ナル減少、或ハ發育障碍ヲ惹起セ (大正十一年五月二十二日)

(余等ノ此實驗ハ癌研究會ノ補助ニ據ル所多シ、謹ンデ感謝ノ意ヲ表ス)。

References

1920.) 9) 慰沼富二、宋鶴肉腫・鶴移=鯛スル研究・(痛・第十二年・第三冊・) 47. Jahrg., Nr. 44, 1921.) 4) Much, Künstliche Virurenz u. Chemie. (Ebenda, 47. Jahrg., Nr. 22, 1921.) 47. Jahrg., Nr. 44, 1921.) Anesthetics and Loss of Blood upon the Growth of Transplanted Mouse Cancer, (Journ. Cancer Research, Vol. I, No. 3., p. 1) Bayliss, Principles of General Physiology, Third Edition, 1920. 2) Gaylord and Simpson, (癌. 第十五年. 第二册.) 7) Rostock, Künstliche Virulenzsteigerung bei Mauseimpfrumoren durck Milchsaure. (D. med. Wschr., 3) Lange u. Yoshioka, 自石育三氏造骸剖檢錄、(癌、第十二年、第一册、) 6) 小此本修三、懿诏憲二、 泉痛ノ刺移=闖スル實驗的研究。 8) T. Sakamura, Experimentelle Studien über die Zell-u. Kerntellung mit besonderde Rücksicht Virurenzsteigerung apathogener Bakterien durch chemische Mittel. (D. med. Wschr., The Effect of Certain

〇木村・大場・和田・くろゝほるむ麻酔ノ可移植性腫瘍ノ澄育ニ及ボス影響ニ就テ

らって肉腫一囘、らて癌一囘

ラ Æ = 13 11 、八對 廣キし、一れト狭キし、一れ内、換言スレバくろうほ IV 2 者 ナ = ラハ其後 ニ・む 腫 IV 依、 瘍組 3 t リ腫瘍 IJ Æ 知 æ 織 鴉、濃組、厚 著シク ト其 IV 接 可ラズ 種 織、ニノ、シ 一發育狀態ニ於ラ何等 セ 抵 ラレタル 發育ヲ促 抗 (實驗成績ノ條下参照)、 力弱キ事ヲ實驗シ居 腫 進セシムル 瘍 組 織 ノ差異 1 ルガが抗如い抗 動 物 レリ、 7 體 北力弱キガ 然レ 部 內 メ難 = 肉腫 共 於 るむ蒸氣ガ濃厚ナル ケル 3/ 及、タボンナ ガ始 方余等 肉腫 發 ンド 育 事・ル ۱۱ 1 21 發育 癌 著シク 6 ル・ザリン・主因タ 腫 T ŀ ス 四害 71 肉 n -キャルガ 事 腫 否 於 ガ 能 7 21 73 セ 如 ラレ 或 = iv 21 ザリ 依リラ生 種 シ、 此 1 實 京 化 何、 2 y 學 成 ニトシト 的 ゼラレ 作用 いく ノ差

乳酸注射實驗

って肉腫第三囘、らって癌腫第二囘、第三囘

腫、 7 ナ " 試 肉 ニラハ Rostock がまうす腫瘍ニ認メタルガ如キ發育促進作用ナキヲ認メ得可 " 久 um terms iv テ -接種 ハ乳酸 第二囘實驗 セラレテ不良 注 射 ノ成績 群 1 對照群 ナル發育ラ示セル癌 毛 乳酸注射が腫瘍發育促進作用ナキョ示シタリ、 1 腫 瘍發育ニ差異 組 ヲ認メズ、 織 ガ乳酸 注射ニ依リ其發育ヲ促進 癌第三 [2] ニテハ 乳酸 卽 チ乳 注射群 セ 酸、 注射いらって 1 發

界五、結論

成績ヲ得タリ 如クらって癌 腫及肉 腫、 家兎 肉 腫 ラ使 用 3 7 ル余等實驗 1 結 果 1 從 來 1 報告ト 全然 致

也

動物二反復くろうまる。確率を施了ストを変力が豊に子にく意味と

又ハ之ヲ粉末ニシテ御移植ニナリマシタカ。 方法ハ乾燥腫瘍ヲ移植苗ノマ、御移植ニナリマシタカ、

■一日張海にありノ銀ノ外イ名アウチェッ ラジェコ・ 「「ス化考与(節目) フラン・衛毛権 ニフンション・

センデシタカー寸御伺ヒ致シマス。モシ兩方法ヲトラレタナラバ成績ニ何カ相違ハ ア リマ

場合ノ關係ハ不詳デアリマス。 と下ニ移植ヲナシ特ニ乾燥末其儘ニ テ 移植セザル故兩しい之レヲ粉末トシ生理的食鹽水 ニ テ團子樣ニナシ鶏向山孝之、私ノ移植ニ川ヒタル大島系肉腫 ノ 乾燥セルモ

組織學的所見。

物ニ就テ

京都府立醫科大學病理學教室(角田博士主任)

木村嘉一

部ハ不規則ヲ呈シ、硬度ハ靭、断面ハ灰 白 赤色、同質性隆起シ。皮膚ハ灰白赤色ヲ呈シ完全ニシテ損傷ナ ク 周縁物ヲ發見シタルヲ以テ此處ニ報告セントス。物ヲ發見シタルヲ以テ此處ニ報告セントス。

世勝ヲ形成スル細胞ハ小ナル淋巴細胞ョリ 成 リ、一見淋巴腫・水の一、 大い何等増殖スルコトナク吸収セ ラ レ ズ、尚本腫瘍テ十二 大い何等増殖スルコトナク吸収セ ラ レ ズ、尚本腫瘍テ形成スル細胞ハルナル淋巴細胞ョリ 成 リ、一見淋 腫瘍ラ形成スル細胞ハルナル淋巴細胞ョリ 成 リ、一見淋 腫瘍ラ形成スル細胞ハルナル淋巴細胞ョリ 成 リ、一見淋

ハ 血管外鞘淋巴濾胞ノ 養育著明ナルヲ以テコノ部ニ加ハタルモノニ シ テ、令其發性、原因ヲ考フルニ元來家鷄ニ血病及真性淋巴腫ニ 非ザル 腫瘍樣淋巴腫ノ存在ヲ認メ得如上ノ理由ニヨリ余ハ家鷄ニハ淋巴性白血病 乃 至假性白如上ノ理由ニヨリ余ハ家鷄ニハ淋巴性白血病 乃 至假性白

絲

抄 錄

癌研究會第十四囘學術集談會演說抄錄

(大正十一年四月四日於京都帝國大學病理學教室)

一、熱帶地ニ於ケル腫瘍ノ研究

向山孝之

八木金之丞

腫瘍ノ研究ヲ臺灣ニ於テ繼續シ且ツ熱帶地ニ 於 テ得タルスルハ興味多キ事ナリ、余ハ眥テ名古屋ニ於 テ 行ヒタル溫帶地方ニ於ケル可移植性腫瘍ヲ熱帶地ニ於 テ 比較研究

腫瘍ト内地種トノ比較研究ヲ始メタリ。

レドモ臺灣ニ於ケル鷄ハ孵化後六ケ月ニシ テ 選キモノク速カナルヲ實驗セリ、發育ノ速カナル理由 ハ 不詳ナルニテ陽性成績ヲ示スヲ常トセルモノガ臺灣 ニ テハー上ニテ陽性成績ヲ示スヲ常トセルモノガ臺灣 ニ テハー

セラルサレバ臺灣産可移植性腫瘍モ亦多數ア ル ベキラ、臺灣ニ於テハ鷄ノーケ年消費數約七百萬羽 ナ リト稱多少腫瘍增殖ニ意義アルカヲ思ハシムルモノナリ。ト産卵シ平均七ケ月位ナリトノ事ナレバ是 等 ノ事實ハ

可移植性ナルヲ確メ、纖維腫ハ陰性脂肪腫 ハ 目下觀察脂肪腫ハ背中ニ發生セルモノナリ是等ノ内 骨 腫肉腫ハ腎腫、肉腫ハ緊ニ原發セルモノニシテ纖維腫ハ腹壁ニ、骨腫一、纖維腫二、肉腫一、脂肪腫一ナリ。即、

討論

中二層ス。

山本伊勢男(福岡) アナタノ御移植ニナツタモ ノ ハ、其

方法ハ乾燥腫瘍ヲ移植苗ノマ・御移植ニナリマシタカ、| 肉様、血液ニ富ミ所々暗赤色ノ部ヲ 認 メ、 腫瘍ハ參閏生

|肉狀ニ腺管ノ増殖ヲ認メタルモノアリ。||コノ場合ニ於テ往々潰瘍縁ニ肉腫組織ヲ閒質ト シ テ、息

別日 一章 エスタンノ・一首 ・」

液形成ノ傾向强シ。 機可以上 大後二於テハ腫瘍ハ腸管壁二移植シタル腫瘍ハ、皮下へ移植シタル時ヨリ粘 増殖シ、績テ腸間膜、肝臓其他ニ轉移チ形 成 ス。一般ニ其後ニ於テハ腫瘍ハ腸管壁ヲ浸潤性ニ或 ハ 一部熈排性ニ

ル肉腫組織ノ伴ヒ存在シタルモノ四例アリ。 機能性トナレ 時ニ肉腫組織ノ伴ヒ存在シタルモノ四例アリ。 間上の腹腫の骨折成セルモノニ剣、又強 ク 機能性トナレ で燥末材料ヲ注射シタルモノニ剣・形成 セ リ。是等ハ注射後 一一日、永キハー二五日ヲ經過セルモノ ナ リ。而シテ同 世二 内腫組織ヲ形成セルモノニ親テ述ベタレ ド モ、余ノ實 以上ハ肉腫組織ノ伴ヒ存在シタルモノ四例アリ。

シ、

結締織増殖著明ナリ。

型トノ二型ニ別ツコトヲ得。 今其ノ八例ヲ形態上ヨリ分類ス レ バ、潰瘍性型、息肉性

ニシテ、注射部ニ於ケル粘膜及其他ノ腸壁ニ於 テ ハ、結潰瘍性型ニ屬スルモノ ハ、第二、三、四、五、六、八 例

い筋層下部ョリ漿膜面一般ニ渉リ存在シ、且 ツ 肝臓、腸筋層内ニ至レルヲ認メタリ。第七例ノ合併セ ル 肉腫組織へハ、管腔内ニ小指頭大及ビ母指頭大ノ腺腫性息肉 ヲ 形成シ、管腔内ニーを細胞ノ増殖ヲ呈シ、一部ハ全 ク 分離シテ、料膜面ニ於テハ强キ炎症像アリ。而シ テ 深部組織へハ、第二型ニ屬スル息肉性型ノモノハ、第一及七例ニシテ、腸第二型ニ屬スル息肉性型ノモノハ、第一及七例ニシテ、腸第二型ニ属スル息肉性型ノモノハ、第一及七例ニシテ、腸

在シ、リッベルト氏説ヲ證セル如 キ ハ、腺管ノ遠型的増設述シタル二型ニ於テ、何レモ强 キ 圓形細胞浸潤像ノ存

間膜ニ肉腫轉移ヲ認メタリ。

V V 2 n 刺戟 × タルモノト考フベキナリ。 又ハ他ノ原因が淋巴濾胞ラシテ腫瘍様增殖ラ營

可移植性鷄肉腫ノ一新實驗ニ

北

ル

家鷄肉腫ニ於テ F 博士等ノ報告ラ初メ、其外二、三アリ。 セル時二於テ、 カ 1 二當り、上皮組織ノ増殖ラ認メ得タルモノ 二就テハ、 バシホルド、レウィン、最近我國ニ於テハ林、 n 疑問ノ存スル處アリ。 發生ノ 1 コトアル 加藤博士ハ鷄ノ盲腸内肉腫移植試験ニ 肉腫トハ組織形態學上明ニ異ナリシモノナレドモ、 原因ニ就テハ、 1 內腫組織卜共二卵膜上皮細 曾テ林博士ハ孵化鳥卵内 レオーべ。 鼠癌ノ移植經過中 兩腫同一ナルカ、 エールリッ 大 然レド 島 -E 义 2 -於 胞ノ増 鷄内腫ラ移 福 全 ŧ 内腫ノ發 ルコト テ、 アホラン ク異 內腫移 造 增殖 樋口 殖ラ 7 ナ

> 又特種加工ラ施シタル肉腫材料ラ川ヒ、實驗ラ 重テタリ。 成績ニ就テ述ベン。 今其 ノ中特ニ興味ラ 喚起セル腸管系ニ移植シ 夕 n

腫瘍ハ 移植後十日目ニ於テハ、腫瘍發生部ニ於ケル 粘膜面。。。。。。 是等ノ部ニ於ケル腸腺管上皮細胞ハ刺戟狀ラ呈 移植後七日目ニ於テハ粘膜下組織内のののののの 傾向アリ。 腸管ハ腫瘍組織ノ間ニ點々介存シ、 小潰瘍ヲ呈シ、 今新鮮材料ヲ移植シタル場合ニ於ケ 六羽ナリ。其内内腫組織ノ發生陽性ナルモノ七六羽アリ。 腸管粘膜下組織ニ注射シタルモノニ 織ハ筋層ニモ浸潤性増殖ヲ呈ス。小潰瘍ノ邊緣ニ 於ケル ク且ツ延長ス。又一部粘膜面ニ腫瘍ノ現出セルモノアリ。 験ハ新鮮。 腸ノ絨毛組織内ニ浸潤性ニ増 上ニ汚穢黄緑色ノ物質ラ附 濾過其他ノ處置ラ施セル肉腫 殖シ、 僅二腺上皮 -ル テ 腫瘍結節ラ生ジ。 所見ヲ記載スレ 為二 絨毛八太 著 使川動物一六 増殖 腫瘍組

7 移口 破り、 植後十四日目ニ於テハ、 漿膜面ニ至り、 漿膜面上二大ナル腫瘤ラ形成ス。 潰瘍益く大トナリ、腫瘍ハ筋層

3

1)

余ハ大正八年度ヨリ鷄內腫組織ノ上皮組織ニ對スル

+攻究スルノ目的ラ以テ、種々ノ移植地ラ選ビ、

to

ノ場合ニ於テ往々潰瘍縁ニ肉腫組織ヲ閉質ト シ テ、息 | 帝哉曾谊シ、一郎い貴島テキン、より気形及 デ 腫象ニミ

リ。第一群ノらってハ同上液ト 鷄卵黄ト ヲ 混合シ、又ハリ。第一群ノらってハ国及ビ肩胛部養腫狀物)ノ ア リシモノノミオリ。第三群ノ らってハツノ自然狀態ニ テ 偶然發

十トナレリ。個所宛ニ移植ヲ施シタリ。ソ ノ 移植個數ハ總計約二百數個所宛ニ移植ヲ施シタリ。ソ ノ 移植個數ハ總計約二百數他ノ健康らって皮下ニ移植シタリ。毎列 ノ らってニ各頭二以上ノ各群ノ動物ニ就キ其各種ノ職器組織ヲ取リ テ 之ヲ

"

瘤ヲ大別スレバ、概略次ノ数種ニ分類スルコトヲ得。 タルモノ・ミヲ主要ナル陽性例トス。而シ テ 該原發性腫シ、此處ニ生ゼル病變ヲ觀察シタリ。此試職ニ ヨ リ肉眼シ, 此處ニ生ゼル病變ヲ觀察シタリ。此試職ニ ヨ リ肉眼以上ノ移植所置ヲ施セル後、一定期間毎ニ 移 植部ヲ檢査

成分含マレタリ。腫瘍様」ノ観アリニサレドソノ組織中ニハ増殖 セ ル組織甲型。コレハ小形ニシテ、一時性ニ經過シ、恰モ「炎症性甲型。コレハ小形ニシテ、一時性ニ經過シ、恰モ「炎症性

乙型。是二屬スルモノハ中等大(大豆大前後)ニシテ經過

〇抄

明ナルモノアレドモ、一方増殖セル組織成分 ハ 明ニ之ア 八型。(潰瘍型)。是二謀入セルモノハ前者ヨ リ モ概シテ 八増殖現象ハ組織的ニモ亦右ノモノヨリモ著明ナリ。 と 長ク、右ト同ジク「炎症性腫瘍樣」ノ觀アリ。サレドソモ長ク、右ト同ジク「炎症性腫瘍樣」ノ觀アリ。サレドソ

11人では、1人では、一次行列を作っている

リアリ。 (腫瘍型)。本種類ニ於テハ形狀次第 々 々ニ増大シ、丁型。 (腫瘍型)。本種類ニ於テハ形狀次第 々 々ニ増大シ、丁型。

おお以上に正安とし易生利に居なり「重慎」「月長りませい種々ナル中間型モ存スルコトハーー示説 セ ル標品ニテ以上/分類ハ極メテ概略的ノモノ ニ テ、是等數種/間ニ以上/分類ハ極メテ概略的ノモノ ニ テ、是等數種/間ニ

殖ノ組織發生ラ論ズル上ニ、注意ラ要スベキ點ナリトス。

ナリ。又材料注射當時ニ於テ、目前ニ其ノ部 ノ 變化全ク 同 そハエレス我國二於テハ林博士ノ報告ア り。是等ノモノ 鶏ノ腸ニ特發性ニ癌腫ノ原發アルコト ナキラ確實ニシテ注射シタルモノニ シテ、且ツ注射部ニ タルモノハ、幼鳥或ハ中等大ノ鷄ニシテ、且ツ悉ク雄鳥 モ老齢ノ鷄ニシテ、且ツ雌鳥ナリ。然レドモ余ノ 使用シ ŀ 一致シテ發生セルモノナリ。次二注射ノ際二於ケル操作 |樣像ラ呈ス。カ、ル特發性癌腫ヲ認メタルモ / ハ、何レ 余ノ得タル例ヲ比較スルニ、内眼上。 ハ、エールリッ 組織學上 殆ンド

テノ實験的研究

可移植性鼠肉腫狀新生物ニ就

京都帝國大學醫學部病理學教室ニテ

1)

ニソノ中ノ十餘種ハ「可移植性鼠肉腫」ナルコトラ明ニシ 數ノ「可移植性鼠肉腫狀新生物」ラ形成セシメ得タリ。 未ダ試ミタルコト無キ實驗的研究方法二由 リテ、新二多 内腫ラ發生セシメタリトノ報告未ダナシ。著者ハ先人ノ セル實驗二就テハ哲ク之ヲ措キ、一定ノ動物 ニ 可移植性 自然界二發見セラレタル可移植性動物腫瘍及 ビ 之二欄聯

常ノ如り飼育シ、ソノ局部二起レル變化ラ種々ナル方法 側背皮下ニー個宛、普通ノ移植方法ニ由リ移植シテ、 類ノ職器ヲ應川セリ)ノ一小片ヲ通常ノらってノ左及ピ右 實驗方法ハ次ノ三群ノらってノ諸職器組織(殆ド總テノ種 得タリ。

第二群ノらってハ濃厚ナル てーる水抽出液又ハ 之 ヲ乾燥 粉末トシテ女米二混ジタルモノニ シテ一定期間飼育シタ

ニテ検査セリ。

成セシメ得タルモノト信ズ。 強ハ、鷄肉腫ラ比較的弱毒ニナサシメタ ル 材料ラ以テ形 能ハズ。之レラ以テ觀レバ余ノ得タル上皮ノ遠型的增 ツ他ノ器械的刺戟ニョリテ發生シタルモノト モ 解スルコ 八例ガ特發性ニ在リタルモノトハ認ムルコト 能ハズ。且 組織學上ニモ何等ノ變化ナキラ以テ見レバ、余ノ得タル キカニ就テハ、余ノ對照試験ノ示スガ 如り、悉り陰性、 並ニ注射液ニヨル刺戟ニヨリ上皮細胞ノ増殖ス ル コトナ

第一群ノらってハ司上夜ト 鶴那街ト チ 昆合シ、又ハーモラク、おト司ジク「及民生重新統一人見てり。ナンドア

)

殊ニ最後ノ選定ニ係ル十餘系ハ「實 験的可移植性鼠肉腫」ラソノ個體ヨリ同時ニ剔出シ、攝氏零度近 クノ暗所腫」ラソノ個體ヨリ同時ニ剔出シ、攝氏零度近 クノ暗所腫」ラソノ個體ヨリ同時ニ剔出シ、攝氏零度近 クノ暗所腫」ラソノ個體ヨリ同時ニ剔出シ、攝氏零度近 クノ暗所腫」がル可ラザル場合ニ立チ至レリ。加之、著者 ノ 行ヒタメザル可ラザル場合ニ立チ至レリ。加之、著者 ノ 行ヒタ

ナルコトラ決定セリ。

呈セルモノ(肝臓・脾臓)アリ。 之ニ關聯セル結節性組織ナリ。又是等 / 移植川組織片/ 化ラ現ハセル肺臓・肝臓・脾臓・腹膜・肝臓胞蟲嚢胞壁並ニ ノナリ。 翻ラ按ズルニ、上記ノ「實驗的可移植性鼠肉腫狀新生物」 組織學的檢査ニョレバ、 ノモナリ。『即チコノ中ニハ試食日敷約一年半二亙レル動 ハ上記ノ第一、第二、第三ノ群ノ試験動物ニ由來セ モアリ。 ノ十餘系ハ何レモ第二群ノ試驗動物ニ山 而シテソレヨリ選定 セル「實驗的可移植性鼠肉 移植ニ應川セル臓器組織ハ或ル 種類ノ病的變 ソノ中 又特二弦二 日 ハントスル ニハ一種ノ炎症性變化ラ 水セルモノ ルモ

關聯セル結節性組織/等アリ°』性(肉腫性)變化ヲ示セル モノ(肝臓胞蟲囊胞壁竝ニ之ニ性(肉腫性)變化ヲ示セル モノ(肝臓胞蟲囊胞壁竝ニ之ニ

○ 人名見をカラ五角 をフォオー 三乙年近白書中国「名名一至マン・来白物」プルニモラ記

三階段ニ於テハ是等二十餘系中ヨ リ 諸種ノ實驗並ニ檢索 並ニソノ關係材料ラータソノ實驗ノ順序二從ヒテ 示説ス 『說明一覽表』ヲ本會席上ニテ配布シテ、ソ ノ 各系ノ標品 各々ソノ六種ノ系統別ニ從ヒテ供覽シ、何レ モノナリ。著者ハ移植後ノ日數約二週間目 ソノ移植世代ハ六系共ニ三十二上リ一年有餘 ル所アリタリ。又現在保存セル肉腫系ハ都合六系統アリ、 シテ是等ノ中ヨリ第二階段ノ二十餘系二 就 テ「實驗的 於テ多數ノ「實驗的原發性鼠肉腫狀新生物」ヲ得 至鷄卵大前後ノ移植腫瘍ヲ有ス ルらってニ就 ルコトラ得タリ。著者ハ該十餘系ノ山來及消長 ニ 關スル ニ基キテ十餘系ノ「實驗的可移植性鼠肉腫」ヲ選出決定ス 移植性鼠肉腫狀新生物」ラ實證シ得 タ リ。更ニ進ミテ第 コト無キ實驗方法ト試驗的材料トニ由リ先 ヅ 第一階段ニ 以上ノ記載ニ於テ明ナル如ク、著者ハ骨テ試 モ ラレタル , ŧ ニ互リタル ラ 生活動物ラ タリ。 ソノ説明 mi

物」ニ就テ記セルモノト大同小異 ノ 概括的分類ヲ試ムル 甚ダ多端ナルモ、之ヲ要ス ルニ「原發性ノ風肉腫狀新生 性鼠肉腫狀新生物」ノ系統及ピ種類ニョリ 代)、ソノ局部ニ於ケル性狀ヲ觀察スルニ、移植用ノ「原發 増殖性組織成分ラ前記方法ニョリ移植シ (是レ移植第一 本新生物ハ著者が殊更ニカラ川ヰラ、進ン デ 追究セシ |總移植数ノ「八分ノ五」ニ相當セルモ ノ ハ、即手弦ニ述 堪へタリ。コノ移植試験二陽性ナリシモノハンラ「實験 ノ可移性鼠肉腫狀新生物」ニな入シ、遂ニニ十餘種ラ實 トスル 今コノ「鼠肉腫狀新生物」ノ一個ラトリ 来り、 「實驗的ノ原發性鼠內腫狀新生物」ナリ。 テソノ結果ハ 而シ 7

試験列ョリ見ルモ其數同ジク二十餘トナレ ハ移植試驗ラ更ニ續行シテ一年有餘二互 リ 三十餘移植世 十系餘ラ選出シテ。ソレ等ノ生物學的及病理解 剖 及組織 ニ於テ著者ハ是 等「實驗的ノ可移植性鼠肉腫狀新生物」 二及ベルモノアリ。 更ニソノ移植増殖性能ノ顯著ナル り。コノ中ニ モノ

> 學的ノ諸性質ヲ更ニ深ク探知スルニカメタリ。是等ノ十 明ナル如ク肉眼的並鏡檢的ニ明ニ腫瘍性 餘系ハ失々二供魔セル切片並標品殊二移 內腫ト比較研究セリ)ニ全然一致セルヤ否ヤラ檢索セリ。 ヲ知リ得タル故ニ尚是ガ生物學的性質上果シ テ 從來知ラ レタル自然界ノ「可移植性鼠肉腫」(エンゼン系並藤縄系 表者ト看做シテ)ニ就テソノ移植腫瘍組織ニ於 達性轉移形成アリシ事實アリ。又二乃至三系(是等ラ代 原發性腫瘤剔出後, 具備セルコトハ頗ル注目ニ價ス。又一乃至二系ニ於テハ 移植増殖性能ハ最モ重要ニシテ之レガ全十 原發部位ニ於ケル再發性增殖及ビ遠 植 (肉腫性)ナル事

界ニ發見セラレタル所ノ「可移植性鼠肉腫」ニ形態學的乃 テ陰性ナリキ。 之二據テ著者ハ以上ノ十餘系ハ 從來自然 汁、乾燥粉末ヲ以テスル移植試験乃至色素液ニ テ 染著 至生物學的諸性質上全然一致セル「新生物」ナルコトラ認 ル組織片ラ以テスル移植試験ラ行ヒタル ハ陰性ナリキ。又ソノ移植腫瘍ノべるけ 分離培養試驗ラ行と、且組織內細菌染出ラ試え タルガ之 ふえるご濾過液 ガ、是等ハ亦總

テ細菌

例二過ギザルラ以テ、果シテ統腫ナリヤ否ヤハ 現今明言 不正ヲ來シ、全ク初期稲ノ像ラ星スルヲ認メ + 半期ヨリ卵黄ラ與ヘタル一例ニ於ラ、其ノ舌上 皮ニ著明 **尚余ハ一年二ヶ月間生存シ。約六十回注 射 シ。尚試驗後** 程度二止マリ、ヨリ以上ノ變化ラ呈セザリシハ遺憾ナリ。 期間中二死亡セルヲ以テ、上皮ノ變化 ハ 遠型增殖ト云フ ノ如 著明二强キ舌上皮ノ遠型増殖ラ生ズルコトナリ、余ハ斯 ヲ避ク。 位)、ニョリテ、注射部位ト全ク無關係ニ、極メテ 短時日 n 約 口 ル建型増殖ラ來シ、小部位ナレドモ、其ノ上皮ノ整列 時 事ニシテ、而シテ斯ノ如キ動物ニびちろーるヲ注射ス セシメンガ爲メニ插入スル木片、或ハ舌挟 一百頭ノ中數例二於テ、極メテ轉度ノ 刺戟 口肝、 + ハ他ノ動物ノ同期間、 動物二多大ノ望ラ屬シテ注射ラ續行セルモ、 舌背。 古絲、 舌下面ニぱぴるろー むノ發生ス 同回数注射セルモ 2 ノニ比シテ 3 り、 (例へバ開 ノ常ル部 尚一 皆短

12

六、びちろーる」門脈内注入ニ因 ル肝臓ノ腺腫樣増殖ニ就キテ

〇抄

鉄

ちろーるラ家兎及ビ犬ノ門脈内ニ注入セリ。 ラ有スルモノナリャラ研究スル目的ラ以テ石炭でしる。 流ラ道シテ組織ニ達スル時ニハ此ノ組織 ハ 如何ナル反應 時ハ如何ナル變化ラ來タスモノナリヤ、又刺戟性物質ガ血 ラ起シ同時二上皮ノ増殖ラ起ス物質ラ門脈内二注 入 スル 肝臓癌ハシバシバ肝硬變症ニ續發スルモノナ レバ肝硬變

發ス、 説セリ。 殖ラ見ル部分二於テハ何レモ多量ノびちろ - るが残留シ テ明ラカニ之レが刺戟ニョリ上皮ノ増殖ラ來 タセ 上皮が腺腫様二增殖ラ來タセリ、 頭中三頭ハ尚生活ラ保チ他ノ五例ニ於テハ何レモ 膽道ノ 取ルモびちろーるニテハヨク之レニ耐へ肝臓 ノ 硬變症 而シテ石炭でーるハ動物ハ之レニ耐へズ多 ク 而シテ其ノ七十日以上二於テ生活ラ保 耐シ テ 是等腺腫様ノ増 テ 死ノ轉歸 ル動物八 ル事ラ

發見せべる 肝臓細胞自己ハ代償狀ノ増殖ラ見ル モ 未が腺腫様

内織ニ於ケル實驗的惡性腫瘍

ラモ附加シテ供題シタリ。

的可移植性鼠肉腫」ヲ形成セシメタルニ至リタリ。
・問育ノ下ニ健鼠ノ肺臓・肝臓・脾臓・腹膜等ヲ移植ス。此ノ試験ハ都合ニ囘反復シタルガ孰レモ陰性ニ終レリ。此ノ試験ハ都合ニ囘反復シタルガ孰レモ陰性ニ終レリ。此ノ試験ハ都合ニ囘反復シタルガ孰レモ陰性ニ終レリ。此ノ試験・ジテ、著者ハ通常ノりってニ對シテ一種ノ病的現象ヲ誘致シタルコト、並ニソノ動物ノ臓器組織ノ精験がヤガテ前記ノ如キ實験ノ結果ヲ齎ラシ、特ニ「實験移植ガヤガテ前記ノ如キ實験ノ結果ヲ齎ラシ、特ニ「實験経験トシテ、著者ハ通常ノらって二十餘頭ヲ川ヰ通常對照試験トシテ、著者ハ通常ノらって二十餘頭ヲ川ヰ通常

皮ノ達型增殖ニ關スル其後ノ經五、びちろ1る注射ニ因スル舌上

京都府立醫科大學病理教室(主任角田博士)

(第二回報告

本川郁也

影響ナキ事ラ副メタリ。

鬼ノ舌上皮下ニ注射シ、著明ナル舌上皮ノ違型 増 殖ヲ認鬼ノ舌上皮下ニ注射シ、著明ナル舌上皮ノ違型 増 殖ヲ認

尚余ハ上皮ノ達型増殖ラシテ悪性化シ癌腫 ラ 發生セシム

り二百項ノ中找列二个子、面·子震是, 川龙/川·ドリ

ル目的ラ以テ研究ラ瀬行セリ。

動物ニ次ノ操作ヲ施セリ。要カ感ジ、研究最初期ニ於テ要約ニ分析シ研究スル ノ 必要ヲ感ジ、研究最初期ニ於テ要ナリ、腫瘍素因ハ素ヨリ難解ナリ、余ハ之レ ヲ 個々ノモ拘泥セズシテ、腫瘍素因ナルモノヲ併セ研究 ス ルハ重元來悪性腫瘍發生ノ研究ニハ單ニ局所ノ刺戟 ノ 研究ニノ

テノ飼養 - 「兩睾丸ノを摘出,■、脾臓 ノ 全摘出,■、卵黄ヲ以

期間等ニ關係スルモノニシテ、施セル種々 ノ 要約ハ何等途型増殖ノ强 弱 ハ、動物ノ個性、生存期限、刺戟繼續ノ於ケル上皮ノ變化ノ强弱ヲ對照セリ、研究 ノ 結果、上皮於ケル上皮ノ變化ノ强弱ヲ對照セリ、研究 ノ 結果、上皮而シテ是等要約ヲ施セル動物ノ半期以上 乃 至一年以內生

尚興味ヲ感ズルハ余ガ約二年ニ渡 ル 研究期間中使用セルニハ何等りほいごーゼト看做ス可キ變化ヲ認メザリキ。ノ全身ニ著明ナルりほいごーゼヲ惹起セル ニ 拘ラズ、否尙卵贳ヲ以テ飼養シ、半年以上乃至一年間生存 セ ル動物

研究ニ持タザレバ明言シ難シ)。 死亡セルヲ以テ其ノ可移植性ナルヤ否ヤニ就テ ハ 今後ノ死亡セルヲ以テ其ノ可移植性ナルヤ否ヤニ就テ ハ 令後ノ

著變ヲ認メザリキ、又同一種類ノ動 物 ノ同一臓器ニ同一然レドモ犬、らって、家鷄、鳩等ニ於テハ以上刺戟ニヨリ

ニ同一刺戟ヲ作川サス場合ニソレ等反應ニ大ナル 差異ア刺戟ヲ作川セシムル場合乃至ハ同一動物ノ種々 ナル臓器

ルラ部メタリ。

世增殖、類腫瘍乃至真性腫瘍形成ニハ刺戟ノ種 類 (性質) 塩サ (量) 並ニ生物學的、個人的乃至臟器的感受性即子素 個トノ間ニ於ケル要約ノ完備ヲ必要トスルモノナルベシ、 因トノ間ニ於ケル要約ノ完備ヲ必要トスルモノナルベシ、 日あヲ注入スルコトニョリ 膽石ヲ形成シ其ノ部ニ破壊性 腺腫ヲ形成セルコト並 ニ 單ニ石ヲ括入スルコトニョリ破 腺腫ヲ形成セルコト立 ニ 單ニ石ヲ括入スルコトニョリ破 腺腫ヲ形成セルコトニ シ テ之レ人間ニ於ケル膽石ニ 作フ腺嚢癌嚢生機轉 ヲ 實驗的ニ證明セルモノナリト云フ ヲ得可シ。

就テハ他日改メテ報告セントス。 (自抄)胱結石、尿道結石)乃至膽石ヲ形成シ得タ ル モソレ等ニ総合絲、石等ノ插入、ニヨリ尿 石、(腎石、輸尿管結石、膀離嚢内ニぴちろーる.らのりん注 入(一囘乃至數囘)、及膽嚢内ニぴちろーる.らのりん注 入(一囘乃至數囘)、及

八、人工的癌腫發生二就テ(補遺第一)

北海道帝國大學比較病理學教室

歌響學博士 市 川 厚 新野 里 季 第

思師山極教授ト共同研究セル人工的縮麗發生 實 職ハ旣デニ内外一般ノ承認ヲ得タリト雖、時ニ轉移形成 ノ 少カリシ事、移植困難ナルニ徴シ、尙多數ノ疑 義 ヲ其間ニ有スルモノアリ。然シ之レ問題トスルニ足ラズト雖 余ハ(二) 東ラニ深ク追究セント シ 目下實驗繼續中ナリ。其令日迄ニ得タル主ナル成績ヲ報告ス。

(一) 癌腫及同轉移形成率

以テ、實驗動物ガヨク長時日ノ實驗ニ堪へ得 ル 者ナルヲ従來ノ經驗ニ由リ長時日ノ實驗繼續ヲ必要條件 ト スルヲ

形成 (第一報告)

風間美顯

宗ハ大正五年來興味ヲ以テ檢索ヲ續行セル 日本住血吸蟲余ハ大正五年來興味ヲ以テ檢索ヲ續行セル 日本住血吸蟲の行力、所以ニ計判と表別、所述をより、大正十年十月三十日)席上ニ於テル財ニ直接種の大正十年十月三十日)席上ニ於テ州、 関 国トナリノを (大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州、 関 国・ナリノ (第一大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州、 関 国・ナリノ (第一大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州、 関 国・ナリノ (第一大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州、 関 国・ナリノ (第一大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州、 関 国・北越醫學會本研究ノ大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州大正十年十月三十日) 席上ニ於テ州大正十年第三世 (第十六年第二册) 二詳細月マデノ成績ニ就テハ近ク (福) (第十六年第二册) 二詳細月マデノ成績ニ就テ州、 関係表別、 (第十六年第二册) に対して、 (第一大年) (第

多數例ノ悪性腫脹即チ膽凝破壞性腺腫ノ二十例、輪膽管 もっこノ胃乳喘性腺腫)ラ東ニもるもっこノ腺養ニ於テハ らふじん球插入、二、石插入乃至ぴちろーる。ばらふじ ラ肝臓、腹壁、胸壁乃至腸壁ニ證明セリ、(此ノ中數例 二浸潤性二增殖セルノミナラズ其ノ 中十例二於テハ轉移 破壊性腺腫ノ一例(三十例中)ラ形成シ是等ハ周圍組織中 型性增殖乃至類腫瘍ラ形成シ得タルノミナラズ ノ大多数二於テ其ノ部ノ粘膜上皮ノ増殖、 的二作川サスコトニョ リ家恵及もるもっごニアリテ ハ非 ん球插入後びちろーる注入)、ラー定期間持續的乃至反復 ろーる飼食) 乃至機械的化學的刺戟(一、ぴちろーる、 ーる注入、二、たーる注入、三、らのりん注入、四、ぴち 縫合絲插入、四、粘膜片插入」化學的刺戟(一、ぴちろ 飼食並ニ胃潰瘍形成、ハ、胃粘膜凸出)、 二、 石插入、 三、 戟[一、食物ニョル機械的刺戟(イ、胃潰瘍形成、 即チ余ハ家児、もるもっこ、犬、らって、家鷄、鳩等ノ目、 ニアリテハ真性腫瘍(家兎ノ胃腺腫及膀胱 膽藏、子宮、腸管等ノ粘膜表面ニ 直 接、機械的刺 **吳所性增殖、** 或ルモノ 口。卵黄

成績二就キ略述セントス。

一 新月日まるの付う リ 新服子窓ノ傷ノ如キ

上皮性ノ組織ノ移植ヲ兄ズ全ク陰性ニ終レリ。 一般育セルモノアルモ、主トシテ結締織性 ノ モノニシテノ移殖ヲ試モタルモノ十九例 ア リ、米粒乃至時ニ小豆大胚迫ヲ受ケ縮少吸收セラレタリ其間ニ移植増殖セ ル 結節 根組織以上多數ナルモノ ア リ。然ルニ以後漸次結締織ノ

縮第八例ノ自家移植

狀小結節ヲ生ジ、漸次潰瘍ト ナ リ。動物ノ斃死セルハ其ト縫合シ、接觸自家移植ヲ試ミ タ リ。該縫合ハ術後七日ト縫合シ、接觸自家移植ヲ試ミ タ リ。該縫合ハ術後七日次ニ內面皮膚ト癌性化部ニ外面皮膚 ヲ 癌性化部外面皮膚

ナルヲ鱧セリ。 サルゼ蝕性潰瘍ノ像ヲ呈シ、組織的ニ モ 原舜瘟腫ト同様術後四十三日目ナ ル ガ當時ソノ 直徑一・五糎ニ達シ著明

癌第六例

ノモノラ使用セ り。木例ハ目下移植後ノ結果觀察中ナリ。モ自家生産ノモノ、生後六十日前後ノモ ノ 及ビ約一ケ年供試家兎三十頭、右側耳殼皮下ニ轉移結 筛 片移植、何レ

鉄

山本伊勢男 唯令先ニ御作リニナツ タ 癌ガ轉移ヲ作ルコー本伊勢男 唯令先ニ御作リニナツマ カ ガ、私ノ發見シル人ガアルカラ、本常ノぶらすこしむデアル カ 疑ヒトストガ少イカラ、本常ノぶらすこしむデアル カ 疑ヒトスーキンテオキマス。

州腫瘍發生ノ素因ニ就テ盟ノ移殖腫瘍發育ニ及ボス影響

醫學博士 片

潮

前者ニ屬シまぐねしうむ及かりうむ融の後者ニ屬ス。 実現及まうすニ注射シ血液・變化ヲ検セシニ該臘類ノ血液ニ變化最モ顯著ナルヲ立證セリ、而シテ 該臘類ノ血液ニリ變化最モ顯著ナルヲ立證セリ、而シテ 該臘類ノ血液ニリ變化最モ顯著ナルヲ立證セリ、而シテ 該臘類ノ血液ニッ酸・最大の () は、 () は、

●要ス。故二健康ナルラ選擇スルハ 勿論。三週間前後比較 的多量ノたーるヲ塗擦シ、豫備試験ト シ 其間 二體重ノ減

ル 事多シ。次ニソノ飼料等一般衛生ニ注意ス。 傾向アル者ヲ除外セザレ バ 中途ニ斃死シ 徒势二終

豫備試験ラ行と二十頭中ヨリ八頭ラ選擇セリ 家兎ハーケ 列(八頭)大正八年十月十五日開始。 繼續中,

結ら ノモノニシテ何レモ、 自家生産ノモノナリ。

癌腫發生 八頭中六頭即手七十五%

轉移形成セル

ハ八頭中四頭即チ五十%

殘存動物癌腫 ラ發生シ居ルモノ二頭アリ 轉移形成ノ見

第二列 (十頭)大正十年二月十九日開始

込モアリ。

家生産ノモノニシテ。 豫備實驗二十頭家屯中ヨリ十頭ヲ選擇ス家見 成績癌腫發生十 生後満一ケ年ノモノナリ。 18 何レ モ自

頭中四頭即手四十%

轉移形成十頭中一 存家鬼儿頭ニシテ、 頭印チ十% 縮腫發生ノ見込ノモ ノ齢カラズ

母組織以上多数ナルモノアリ。

第 列二比シ遜色ナシ。

人工癌中轉移形成例ノ轉移電ヨリ移植ラ試え タルモノハ 縮第四例。 6 第八例及ビ第六例ナリ。 其成績 11 次ノ如シ。

癌第四例

川セリ。 結節ノ一小片ラ移植ス、 家兎耳殻ニたーる途擦ノ前處置一ヶ月ラ行ヒ 供試家兎十五疋左右 / 耳殻ラ使 皮下ニ轉移

* = ミタルモノ三例アルモ陰性二終レリ。 父ソノ局所二稍、發育セルモノア 脛倒セラレ吸收セラレ終レリ、 時人豆大ニ發育シ、 強胞狀ニナレル 1) 第三代 然シ結締織ノ偽 ノ 移植ラ試 ŧ ノアリ。

痛八例

供試家鬼二十五正、 個 試をタリ、 同様乃至以上ノ癌腫性増殖ノ像ア ハ直チニ 然カモソノ大部分ハ移植後九目前後二於テハ 吸收消 本成績ハ前例ヨリモ逝カニ良好ニシ 失セルモ他ハ大豆大乃至豌 左右耳殼皮下二轉移 1) 細胞分裂ノ像ノ如 粘 節片ノ移植ラ 豆 大二發育 母組織

然ルニ以後漸次結締織ノ

Ca 餌食ニ闕シテ余等モ曾テ之ヲ試驗シタコトガアツタが、充分ナ成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分ナ成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分ナ成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分ナ成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分・成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分・成績ヲ得無カツタ カ ラ、特ニ報告ヲ出サナガ、充分・成績ヲ解して、率、 身體組織ノ使質ニ若干ノ異變ヲ來タシ、之レガニ移植腫瘍ノ發育ニ不良ノ影 響 ヲ及ボシタト解釋シタイト思テ居ル。

木村哲二、淋巴球ガ腫瘍發育制止作用アル カ 否カノ事ニニモ言及シオキタリ。

即チ腫瘍ヲ以テ處置シ タル 家 兎 ハ無處置家兎ニ比シュヨミル・

〇抄

Lymbhoacivity ノ狀著明 ナリ、然レ共脾及淋巴腺系含す(前處置動物ノ) ノ 發育制止作川ハ脾臓ノ方ガ淋巴腺す(前處置動物ノ) ノ 發育制止作川ハ脾臓ノ方ガ淋巴腺系含

まぐねしうむ及かりうむ鹽ノ減淋巴球的作用 ハ 略ボ同一 | 介スルモノナリ、従ツテ食物内ニ於 ケ ル四鹽類ノ不調和 肉腫ヲ移植セシニかるちうむ及なごり う む鱧ハ腫瘍ノ移 タル如上ノ血液變化ヲ惹起セシメ、 之ニま う す癌腫及鼠 五瓦ヲ腹腔内ニ毎日一囘注射シ、豫 メ 動物ニ其體ニ應ジ 物(まうす及らって)ノ 體重一瓩ニ對シ右四 鹽ノ〇・〇二 ts 程度ナレドモかるちう む 鹽ノ増淋巴球的作用ハなごりう 植率ヲ顯著ニ低下セシメ其發育ヲ阻害シ、之 ニ 反シまぐ 演者ハ如上ノ實驗ニ現ハレタル二事實即チ쮎類 ニ ヨル血 ラズ同期間二於テ其發育ラ極メテ良好ナラシメタリ。 ねしうむ及かりうむ鹽ハ移植率ラ高上セシメ タルノミナ 液變化ト鹽類ニヨル腫瘍發育ノ移動間ニ ハ 密接ノ關係ノ 鹽ヨリモ遙カニ强大ナリ。而シテ演者 ハ 他ガニ於テ動

換言スレバかるちうむ及なごり う む鹽ノ比較的缺乏及ま 二影響ラ及ボシ淋巴球ノ減少ラ來シ延ラ ハ腫傷ノ發育ラ 類ノ不調和ヲ以テ腫瘍發生ノ素因ヲナスモ ノ ト看做サン 容易ナラシムルモノト看做スヲ得 ベ シ、故ニ演者ハ此鹽 ぐねしうむ及かりうむ鹽ノ比較過多ハ 血液特ニ白血球数 トスルモノナリ。

付論

滕浪鑑 70 ル判断ラ下スニハ、餘程注意ラ拂ハチ アルコト、思ハレル。然力モ個々ノ事實力 ラ 全般二豆 合二出タガ、飲食物ト腫瘍發生トノ關係ハ固ヨリ 意義 我が教室ニ居ラレタ鈴木博士ノ地理的調査が引 18 ナ ラヌト考

淋巴球ガ移植腫瘍發育二阻害ヲ與フト云 フ 説ハ、西洋 ナコトハ、余モ全ク同意見デアル)。 ノ研究家ノ間ニアルガ、移植腫瘍ノ發育スルトセザル (腫瘍ノ病理ニ於テ、局 所的變化ノ外。

進作用ハ同鹽ニョル淋巴球ノ減少ニ嫌ルモノナルベシ、近 所大ナルベク、又まぐねしうむ及かりうむ鹽ノ腫瘍發育促 鹽ノ腫瘍發育阻害作川ハ同鹽類ニョル 淋巴球増加ニ負フ 成立セルヲ惟へリ。換言スレバかるちうむ 及 なごりうむ

植地ニテ生存シ且増殖スルヤ否ヤデァ ル 周剛組織ノ 翻テ考フルニ右四鹽類!身體内ニ 輸送セラ ル、ハ食物ラ

Murphy 氏ノ發表セル多數ノ實驗ニ見ルモ首背セラル。

Lymphoactivity ノ狀著明ナリ、 然レ共脾及淋巴腺系き

トニ對シテ最重要、最直接的ナ事柄ハ、腫瘍自己ガ移

射セリ。

腫瘍 ハ らって癌(フレキシナー)らって肉腫、(エンゼン)家

兎肉腫(加藤系)。

接種部位右側背部、各頭〇二五年量宛。

所置セル動物ニ腫瘍ヲ接種セルモノ等ヲ區別ス。 實驗ハ腫瘍接種ト同時ニ試驗物質ヲ注射セル モ ノ及ビ前

競表シタリ。

成績

續行中ニテ完全ナル成績ハ末ダ明ラカナラ ザルモ、今迄

得タル結果トシテ、對照二比シ、

一・らって癌腫ハ影響ヲ蒙ラザルガ如シ。

※高トプロン。

一、家晃内腫ハ少数ナルモ、注射列發育住良ナリ。

|二、麻酔ノ可移植性腫瘍ノ發育

ニ及ボス影響

木 村 哲 二

中日本用名

著者等ハ嘗テ Caylord & Simpson ガもうす船二就テ行と

鉄

腫瘍發育ニ及ボス影響ニ關シ追試スル事數回ノ後其結果ヲ肉腫、家兎肉腫ニ就キくろ♪ ほ るむ麻醉及ビ乳酸注射ノ腫瘍ニ就キ行ヒタル乳酸ノ影響ニ關シテ、らってノ癌腫及腫瘍ニ就キ行ヒタル乳酸ノ影響、叉最近 Rostock が まうす

ヲ制止セラレ、焙腫ニテハ發育ノ制止或 ハ 促進ノ狀ヲ認腫瘍粥ニ作用セシメタル場合ニハ肉腫ニテ ハ 却リテ發育ル發育增進ノ狀ヲ認メ難ク、又直接くろゝほ る む蒸氣ヲ卽チらって腫瘍ニテハ是等 ノ 研究者ノ云 フ ガ如キ著明ナ

或場合ニハ却ッテ他ノ對照群ニ比シ發育不良 ナ ルノ狀ラ乳酸注射ノ影響モ亦決シテ著明ナ ル 發育促進ヲ認メズ、

メ難カリシナリ。

ヲ促進セシムル事ハ甚ダ疑ハシト。 (自物)故ニ是等ノ結果ヨリスレバ麻醉或ハ乳酸注對 ガ 腫瘍發育

星セリ(らって瘤)。

ノ寄生ニ因ル新生物ニ就テ スル一新 Physaloptera 及同蟲

一四七

至大ノ關係アルラ物語ルモノナリ。

一〇、れんち**ん照射ノ可移植性 家鷄軟骨腫ニ對スル作用

線及ビド線ヲ作川セシム。 照射ニ川ヰシ「R」ハ百瓱及ビ二〇瓱ニシテ主ト シ テβ硬 實驗ニ供シタル腫瘍ハ大正四年以來百數 十 代累次移植セ ラレ居ル家鷄軟骨腫ニシテ約九十七、八%移植可能ナリ。

實驗例ハ二十列ヨリ成リ別表ニョ リ局處ニ及ボス影響及 ビ移植能力ヲ説明シ序デ顯微鏡的所見ヲ述ブ即チ先ゾ。 (甲)移植直後ニ照射シタルモノ(乙)、移植 襲 育後照射シ

置シタルモノ、態度及ビ移植成績、次二 對 稱側ニ於ケ 第二、第三世代ノモノニ於 テ 弱、中、醖照射ノ各場合 ノト一〇〇瓱。短時間貼川ノモノトラ比較ス。 ル同様ノ實驗ラ 遠 べ、最後ニ二〇種長時間。貼川ノモ タルモノ、局所二於ケル鏡檢所見ヲ述ブ次ニ 二於ケル所見ニョリ之二説明ヲ與 へ 又强照射後長時放

一一、人類胎盤及牛黃體粉末ノ可 移植性動物腫瘍ノ發育ニ及ポス

東京慈惠會醫科大學病理學教室

71

余ハ人類胎盤及ビ牛黄體粉末ラ使用 シ 動物腫瘍ノ發育ニ 對スル影響ラ檢セリ。

粉末。酒精浸出乾燥粉末。黄體パパーク、デビス」會社發 賣ノモノラ使用セリ。 胎盤ハ新鮮ノ細擽セル乳劑。五倍水浸忍 きす。水浸乾燥

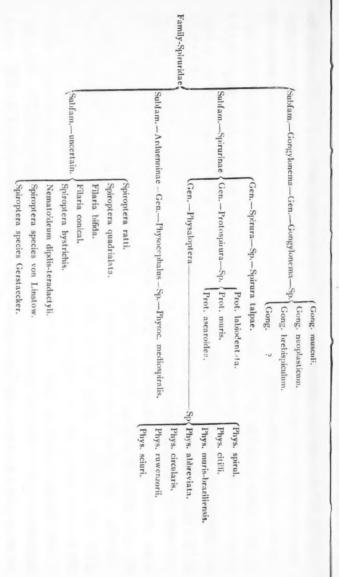
六・○竓ヲ注射セリ)水浸乾燥、粉末合 計 ○・五瓦あるこ 兎ニ對シラハ六・○竓、即チ家兎ハ 乳 劑三・五瓦、水浸液 黄體ハ一頭ニ對シ、一膠雞、卽チ、五「グレン」 (新鮮ノ十二) ほる浸出粉木合計〇・五瓦ラ注射セリ。 川量ハ、胎盤乳劑ハ一頭ニ對 シ 合計○・六瓦、(但シ家兎 ニ對シテハ約三・五瓦)水浸液ハ 合計 四・○竓,(但シ家

タルくろゝほるむ麻酔ノ影響、又最近 Rostock が まうす

「グレン」二相當ス)ヲ注射シ、又ハ之ノ」2量ヲ注射セリ。

以上物質!注射部位ハ左側背部皮下。隔日ニ主 トシ テ注

射セリ。



Gongylonema neoplasticum トハ全ク異リッソノ構造ヨリセー Spiruridae ハ右ノ二十二種 ニシテ Fibigor ノ發見シタル

abbreviata 二類似スルモ同蟲ニ ハ 固有ノ頸棘ラ有セルモ Abbreviata 二類似スルモ同蟲ニ ハ 固有ノ頸棘ラ有セルモ

横 川定

呼バル、一 腫瘍ノ發生ト寄生蟲トノ關係二就テハ古クョリ 注意セラ -1-ラ證明シ該腫瘍ノ一新線蟲類二因リテ催起セラル、コト ナル意義ラ有ストノ意見ラ酸表シ Fibiger ハ家鼠ニ寄生 %二於テ本蟲ラ寄生シ且ツ特殊ノ腫瘍ラ形成シ 居ルコト 7 ラ形成セシメ得ル事ラ證明シ以テ斯界ノ注意ラ喚起セリ。 スルー線蟲 Gongylonema neoplasticum ニ依リテ癌性腫瘍 レ Borrel 及 Haaland 等ハ動物性寄生體ハ腫瘍ノ發生ニ大 知り、 八昨年九月鼠族ニ寄生スル線蟲類ノ 研究中偶、臭鼠ト 七正二本蟲ヲ證明セリ即臺北地方ニテハ泉風ノ約四十 レリ。 本日マデニ檢査シタル臭鼠八十五正ニシテ中三 動物ノ胃壁ニ米粒大乃至豌豆大ノ限局性腫瘍

本蟲ハ乳白色ノ小線蟲ニシテ體ノ前部ハ後部 ノ前端外側ニハ箸明ノ乳頭ラ有シ内側 ニ ハ三對ノ大ナ ノ角皮ョリ被ハレ、其内側ニアリテ僅ニ仲縮ス、 ニロラ有ス。ロハニ唇ョリ成り體ノ前端 ラ 成セル圓 ヨリモ細ク

ル協ラ有ス、此齒ハ角質ヨリ成リ、其下方兩口唇ノ對向

る中二投入シ數時分後之レラ振盪スルコトニ 人工的ニ之レラ分離セントスルモ蟲體ノ生存セ ル限リ 耗(七·七〇乃至一〇·五粍)幅○·五八九粍(〇·五乃至 二位置シ横二深キ截痕ラ呈ス、雄蟲ハ長サ平均九・一六五 ハ長サ平均二三・四四粍(二一・〇〇乃至三〇、五粍)幅 〇、七九粍(〇・七乃至一・二〇粍) ニシテ陰門ハ體ノ前部 分離センコト難シ。唯本蟲ヲほるまりん水又ハ あるこほ 養ラ有シ、横二深徹痕ラ成セル陰門ト接合シテ 変著ス、 〇・七年)ニシテ體ノ後端ハ微二腹側ニ彎曲セル 强キ交接 ハ固有ノ横輪ラ呈スルモ頸乳頭义ハ頸棘ラ有セズ。 側二ハ角皮ノ小皺襞ヨリ成レル無数ノ小歯ラ有ス、 又ハ雌蟲ノミ單獨ニ見出サル、コトナシ。 而シテ本蟲ハ常二對性寄生ラ成スモノニシ テ 決シテ雄蟲 可能ニシテ假令蟲體ハ一部破壞セラル、 モ完全ニ之レラ ダ充分ニ發達セザル幼若期ノモノニ 於テモ常ニ相接合シ 即生殖器ノ 低リテノモ 未

モノニシテニ Hall 依レバ貧歯類及 ピ 喰 戯類ニ寄生スル 本蟲ハ其構造ヨリスル時ハ乳ニ Spiruridae 類ニ 入ル可キ 比較的完全ニ兩者ヲ分離シ得べシ。

ルニ至レバ腫瘍酸生學上資スル所アルベキラ信ズ。増生ラモ證明シ得ルガ故ニ實驗的ニ本蟲ヲ寄生 セ シメ得ト雖治癒的傾向ラ有セザル肉芽腫ニ兼ヌル ニ 腺管ノ異常上述ノ如ク本蟲ノ寄生ニ依リ未 ダ 真正腫瘍ノ發生ラ見ズ

腫瘍ノ發育ニ及ポス影響ニ就テ一四、生殖腺摘出ガ可移植性動物

京都帝國大學醫學部病理學教室

1

川蘭

〇抄

銯

自ラ次ノ實驗ヲ行へリ。 セル者少カラズ。演者モ亦其等ノ報告ヲ通覽 セ シ後ニ、モル者少カラズ。演者モ亦其等ノ検索ノ結 果 ハ、相互反對テ、従來發表セラレタル幾多ノ検索ノ結 果 ハ、相互反對生殖腺摘出が、各種動物腫瘍ノ發育ニ及ボ ス 影響ニ願シ

選ブベク努メタリ。 選ブベク努メタリ。 選が、勿論毎回ノ實驗ニハ出來得ル 限 リ、同一體量ノ者ヲ 最小五十五瓦,最大百九十五瓦迄ノ間ノ者 ヲ 使用シタル 最小五十五瓦,最大百九十五瓦迄ノ間ノ者 ヲ 使用シタル 質驗動物ニハ、雌雄ノ白鼠ヲ用ヒ、其ノ總 數 五十三例ニ 實驗動物ニハ、雌雄ノ白鼠ヲ用ヒ、其ノ總 數 五十三例ニ

移植二供セシ腫瘍ハ、可移植率行常殆、百%ニシテ、且

loptera formosona ト命名シ置カントス。 本蟲ニハ之レヲ缺グガ故ニ別種ナル可ク余ハ 假ニ physa-

シ 壁二肉眼的變化ナクシテ本蟲ヲ寄生シタルモノナシ。 **歯牙ラ有シ强ク胃壁ニ咬著スルガ故ニ常** シ得ザリシト云へり、然ルニ水蟲ニ於テハ 强キ口唇並ニ 匹ニハ癌性變化ヲ認メ他ノ九匹ニハ癌性變化 ノ 前驅的變 上皮縮様ノ増息ラ呈スルモ亦何等ノ病變ラ モ 呈セザルコ 主トシテ粘膜上皮ノミヲ刺戟スルガ故ニ往々著 シ キ扁平 セズ鼠ノ消化管中特ニ扁平上皮ニテ被ハレタル 部ニ寄生 圓錐形ヲ呈シロハ等邊三角形ヲ呈セル モ 口唇及歯牙ヲ有 Fibiger ノ報告シタ シテ固有ノ肉芽腫ラ形成ス。從テ本蟲ラ寄生スル場合ニ アリ 常二目壁二一定ノ變化ヲ認ムルモノニシテ 未ダ管テ目 7 其頭端ヲ粘膜上皮ノ角皮層ト胚芽層トノ間ニ插入シ、 證明シタルモ他ノ二十二匹ニハ何等ノ變化 ラ モ證明 即同氏ニ依レバ該線蟲ヲ宿セル 家鼠四十匹中九 ル Gongylonema neoplasticum ハ前端 二其部ラ中心ト

化

11

出ノ咬著部ラ中心トシ テ

門ノ粘膜面及漿膜面ニ半米粒大

ラ呈シ腺管ノ増生擴張ラ呈スルモノアリ。

本蟲ノ寄生二因リテ起ル變化ハ主トシテ 內芽腫瘍ニシテ

١

乃至豌豆大ノ結節ヲ形成ス、漿膜面 ハ粘膜ノ壞死崩潰ニ因リ テ 深潰瘍ヲ形成シ、周圍組織ハ 離レタル部ニ於テ固有胃腺ノ heterotopische Wucherung 膜下層乃至筋層ラ破壞シ テ 漿膜面ニ結節性肉芽腫ヲ形成 ル大ナル細胞等ラ混有スル肉芽組織ノ増生浸潤 ニ 依り粘 胞 好細胞,遊走白血球及種をナル 形態ノ巨態細胞,色素細 强度ノ炎性浸潤ヲ呈シ淋巴細胞、類上皮細胞・ 隆起ヲ成シ、蟲ノ咬著部 コトアリ、粘膜面ニ於テハ蟲ノ寄生部ラ中心ト シ テ堤狀 ナルモ稀ニハ大網膜、 ソノ部ニ細血管網ヲ見ル事 ア リ、結節ノ表面ハ普通滑澤 ル細血管ノ充張二依リテ紅褐色ノ量ラ有ス、 紅色乃至灰白色ノ抗抵强キ結節ラ形成シ、 スルモノアリ 關係ラ考慮外ニ置 ク 時ハ纖維內腫乃至內腫樣ノ造構ラ呈 シ及粘膜ノ堤狀腫起ラ呈ス 纖維形成細胞及胞體內二好鹽基性 尚潰瘍部ニ觸接セル或ハ之レ 脾胃間膜又 ハ 體壁腹膜ト癒著スル ハ臍狀ニ凹陷ス、 斯ル結節中ニハ ニアリテ ノ和大顆粒ラ有ス 7 即蟲ノ咬著部 3 ノ周衛ニア えおじん階 ソノ成立的 加之稀ニ 多クハ淡 リモ稍し

五、動物肉腫ニ對スル特殊血清

ノ竹用ニ就キュ

慶應養塾大學醫學部病理細菌學教室

教授指導ノ下ニ本實驗ヲ企テタリ。 ク其腫瘍ニ對シ何等カノ作用ヲ營爲スベキ ヲ 想定シ川上ク共腫瘍ニ對シ何等カノ作用ヲ營爲スベキ ヲ 想定シ川上ヲル、ガ如キ場合ニハ退行期ニ於ケ ル 該動物血清ハ恐ラシル、ガ如キ場合ニハ退行期ニ於ケル 該動物血清ハ恐ラ

スルコトアリ。

氏型鼠肉腫.試驗動物ニハ日本産鶉,名古屋 こーちん,材料 腫瘍トシテ ハ藤浪加藤氏型寡鶏粘液肉腫及藤繩

矮鷄

白鼠等ラ使川セリ。

収セラル、モノナルヲ知レリ。 性率九二·九%更ニ其五二·五% ハ 皮下第一代ニ於テ吸傷の消滅スト。余之が追試ヲ行ヒ得タ ル 成績ハ移植陽の消滅スト。余之が追試ヲ行ヒ得タ ル 成績ハ移植陽の消滅スト。余之が追試ヲ行ヒ得タ ル 成績ハ移植陽ののである。

レタルモ余ノ實驗ニヨレバ殆全數ニ 於 テ移植後數日間2、林氏ハ家鶏粘液肉腫ハ鳩ノ皮下 ニ 移植不可能トセラ

〇抄

錄

陷ルモノナルヲ見タリ。 ハ或程度迄腫瘍組織ノ増大 ヲ 見次デ急速ニ退行萎縮ニ

功セラレタルガ氏ニヨルニ此ハ 一 定期間ノ後同ジク退5.本教室白非氏ハ鼠肉腫ヲ鳩皮下ニ移植ス ル コトニ成

作用ヲ檢シ凡テ次ノ如キ成績ニ到達シタリ。以上種々ナル場合ニ於テ種々ナル 時期ニ血清ヲ採取シ其

行消失スベキ運命ニアリト。

期ニモ關シ腫瘍消失後一定期 ノモノ 最 有效ナルガ如ニンテ中途發育挫折シ退行萎縮ニ陷 ル 場合其退行期血ニシテ中途發育挫折シ退行萎縮ニ陷 ル 場合其退行期血ニ於ケル腫瘍ノ退行狀態ニヨリ異 リ 之ガ急劇ニ行ハルルトキハ其價高ク緩漫ナル時ハ 低 シ。尚血液採取ノ時加ルトキハ其價高ク緩漫ナル時ハ 低 シ。尚血液採取ノ時ルトキハ其價高ク緩漫ナル時ハ は シ レタル腫瘍

七囘 明カニ小ナルコ認メタリ。 實職動物ノ發育腫瘍平均ノ人 サハ、對照ノ者ニ比較シテ 各個二就キ 除外セルハ言ラ俟タズ。 數二至ラズシテ、中途ニ死亡シ成績不明ニ終 リシ動物ラ H 驗 セ 選べり。 「職立ニ對照共ニ、 目乃至十八日目ノ間ニ、該動物 ヲ 屠殺シ其ノ協出腫瘍 立二對照動物ノ背部皮下二移植セリ。 ノえむるぢおん或ハ、 ハ二日日、遅キハ八十日目ニ行へり。 |二藤縄氏系鼠肉腫ラ川ヒタレドモ、多 クノ場合、 要スルモノナリ ノ實験ノ内、 メタル注射器又ハ套管針 ラ 川ヒテ、其ノ一定量ラ實 腫瘍ノ壞死狀態モ之レニ從ツテ 反シ對照ノ者小ナリシハ、其ノ原因明ナラ ズ、 腫瘍ノ組織形態略、 生殖腺摘出後腫瘍移植二到 其ノ大サラ測定且ツ秤量 初回五例ヲ除ク六回六 十例ニ於テハ、 腫瘍移植後時日ノ經過長キニ互ル者 摘出腫瘍ノ 小切片ラ、 而シテ其ノ結果ニ據 同様ナルイェンゼン氏 系 鼠肉腫 但シ初回 内眼 特二此 ノ實驗ニ於テハ。 増加シ 的 ル迄ノ日數ハ、 セ 1) 移植方法ハ 所見ニ據レバ、 而シテ移植後十 ノ目的ニ作製 v 兩者ノ間 但 18 目的 後者 倘考 前後 腫 速 2 11

ニモ特殊ノ點ヲ見出シ難カリキ。 何等確然タル差ヲ認メザルノミナ ラ ズ、鏡檢上組織變化

如上ノ實驗成績ヲ綜合觀察スル

4:

殖腺ノ摘出ラ施

トショウスキー氏等ノ成績ニ相反セルヲ見タリ。 本邦ニ於ケル栃原氏ノ實驗成績ニ一 致 シ、彼ノコーレンヲ若干度抑制セラル、傾向アル者ノ如シ。 即チ該成績ハ、ル成熟白鼠ニ移植セシ鼠肉腫ハ、恐ラク概シ テ 其ノ養育

1

淺田爲義、 著明デア 私ハ肉腫 表スルコトニナツテ居りマス。 率ノ上昇。 使川シマシテ鼠縮ニツィテ去勢動物ハ對照ヨ 動物デアツテ移植率ノ低キ時期 テ 居リマス、去勢動物約三百匹對照動物 1) 私モ本問題ニ就テハ大正九年以 ノコトハヨク知りマセ 腫瘍發育ノ旺盛ナルコト 7 ス 尚術後 一乃至二週間 (秋冬) ニ於テハ其ノ差 ンガ鼠癌ニ就テハ成熟 7 ノモ 確メ得テ近ク發 來 11 1 實験ラヤツ 1) ガヨクア 移植能

リマス

ハ龙星度岩重勝組織ノ耐大 チ 毛欠デ急車三良子委留言

シ同時ニ毎日6ののん(十瓦)侗養ヲ行フ事前ニ同ジ。テハ之ニヨリ結節發生後一定時ヲ經テたー る 塗擦ヲ廢止ニたーるヲ二日置キ位ニ塗擦シ繼 續 ス。實驗動物ニ在リニ 別第三列實驗方法.對照動物六匹 ハ 實驗動物四匹ト共

りん 隆起ラ作リツ、發育スルモノ多シ。結節ノ數 ハたーる塗擦廢止ト共ニー旦縮少シ硬結 一列實驗成績(第四表), 7 坳 飼養一定時後再ピ成長シ灰白色多少軟カキ 有 加 ス ス ini ルモ シテ ノアリキ。 廣基皮角型ラ為スニ對照動物ニハ癌 實驗動物二發生セ = ハ塗擦廢止 ル毛嚢上皮 傾りそら 半球形 移 0)

考案

般ニ早ク、 1 いジーじす比較的弱キハ外來刺戟ニ由 共二漸次弱クナルモ りん飼養ノ為メ脂肪輸送ノ旺ナラザ 物ニテ皮角ノ發育旺盛ナ らのりん飼養ニョリ人工た - る瘤ノ發生及發育 局所りほいジーじすハ侗養中漸次强 如 か。 12 11 常四表ノ實驗動 外來刺戟 ル ル 爲ノ如シ。 充血中経後ノら 中 ク殿山ト 絕 初 りり 义此 3 11 1) 13

居 氏あらうんへまごきしりん過染法(神經髓鞘染色法)ヲ施 1 t ラ示サベルニ反 1 -ハ何故ナルカ』ニ就テ山極教授 ご、組織的標本製作ニ當り嘗テ山極・市川氏ノ唱へラレタ 作り行クハ其成長ニらのりん飼養ガ多 少 ノ影響アランカ ル『人工的癌細胞ト成レル上皮細胞原形 主 ル標本ニョレバ明暗像殆ン ド右ビルショ 見 テハ胞巢内凡 テ ノ細胞原形質明性ニシテ殆ンド網状 感ヲ抱カシム。 反對ナリ印手初期編ニテ胞集全部縮移 行 スキー氏鍍銀法ヲ以テ檢セルニ初期痛 トシテ外部二向ヒ成長シ一旦縮少再 健態又單純增生ニラ基底ノ鍍銀物質少 I 腻 小形質 撃疎ナ シ健態乃至單純増生上皮索ハ唯其基 組織的所見ハ大體李氏報告 ル網狀像見 共レヨリ内層ノ細胞ハ尚暗 ョリ注意アリ ユルハ n ノミ行ハレ原形質 ガ ť 質 如 初 廣基軟性皮角 + 型 20 1 期 , n RJA 爲メ明性 スキー標本 ベキ 次二上 ニテ ピルショ 性トナル テ テト 常の 性、細、

〇抄

维

7i

13 順

以テ實驗ニ著手セリ、唯其腫瘍發生ガ豫期ノ如 ク ナラザ 昨年李氏報告後其後ヲ引織ギ九月下旬ョ リ 家東二〇匹ラ ルハ或ハたーるノ種類ノ差異ニ山ルモノカ。

第一實驗(李氏/引織)

實驗方法,實驗動物ニハらの り ん飼養(毎日五瓦)ラナシ ツ、全部たーる塗擦ヲ爲スコ ト 冬氏ニ同ジ,但シ末則ニ

至り一週間置き位二途擦セリ。

第一實驗成績(第一及第二表參照) 第二實驗(大正十年九月實驗著手)

水らのりん(五瓦ヨリ漸次増シ十瓦)ヲ豆腐渣ニ混ジテ飼 (A)第一列實驗方法、五匹 (内一匹ハ途中死ス) ヲ毎日無 ノ二匹(甲ノ一)ハ尙繼續シ同時ニ對照動物五匹(乙)ト共 養シ凡一ヶ月半後二匹(甲ノ二)ハらの り ん飼養ヲ廢シ他 第一列實驗成績(第三表)、毛囊上皮腫ノ發生 二全部たしる塗擦ラ初ム二日置キニ行ヒ方法前同様ナリ。 照動物ヨリ早ク、實驗動物中ニ ハ 初期癌及癌移行型ト見

シ。

三、該作川ハ全ク特異性ラ有ス。例 へ バ家鷄粘液肉腫ニ 對シ效果著明ナルモノト難鼠肉腫ニ對 シ 何等認ムベキ

四、腫瘍增大期ニ於ケル血清ヲ以テシテ ハ 以上ノ作川ヲ 作川ヲ示スコトナシ。

認ムルコト能ハズ。

作用ラ示サズ。 鳩、家鷄、矮鷄、白鼠等ノ正常血清ハ、著明ナル

ハ腫瘍ニ對スル發育防止作用ラ 證明スルコト 能ハザリ 對照トシテ腫瘍乳劑ヲ以テ處置セル 家見血清ニ於テ

ノ研究ニョリ更ニ明確ナル報告ラ致シ得べキラ 信ズ從 ルノ陳ナ ク 依テ血清ノ作川ヲ特ニ免疫體ニ歸スルヲ避 ツテ今日迄免疫反應等ノ如キ血清學的檢索未 ダ 査了ス (附記) 本研究ハ未ダ漸り其緒二就キタルノモ。今後

一六、らのりん飼養ト人工的たー る癌發生トノ關係 (第二報告)

ケ故ラニ特殊血清ト假稱セリ。

ルベキモノアルニ對照動物ニハ之ラ見ズ。 主トシテ外部ニ向ヒ成長シー旦縮少再 ピ 廣基軟性皮角ラ

ル。而テ陽性率ハ時日ノ經過ニ一致シ テ 漸時下降スルニ夜ヲ經過スレバ通常移植ニ於ケル移植力ヲ消失 ス ルヲ知レバ本腫瘍ハ四三時間迄ハ移植力ヲ保有スル モ 旣ニニ蜚

(2)、寒冷試輸

非ズシテ消失期頃迄略へ稽留セリ。

筋發生素ラ正二豫想シ得ベキナリ。余 ハ 此目的ノ爲メ比 比較的高度ナラザ 較的高度ナラザル寒冷トシテ炭酸雪ニ = ~ 寒冷ナルタメ組織ラ死滅セシメテ陰性ナル 場合ト考へ得 キナリ。又高度ナル寒冷ラ作川セシメ テ 陽性ナル場合 審組織二寒冷ラ作川セシメテ移植陰性 ナル時ハ、寒冷 九移植性が減削セラレテ陰性ナル 場合ト、 組織ハ死滅セルラ以 テ 生活腫瘍細胞以外ニ或ル腫 ルタメ腫瘍組織ハ死減セサ 3 ル蒸餾水冰、 ルモ組織 高度ナル 高 中

藻錦水冰ハ少クトモ零下數度ヲ超エ居ル可シ。
※錦水冰ハ少クトモ零下數度ヲ超エ居ル可シ。
と移植シタリ。炭酸冰ハ攝氏零下約三十四度 ナ レバ此ノシ移植シタリ。炭酸冰ハ攝氏零下約三十四度 ナ レバ此ノシ移植シタカ。炭酸水が攝出器上二 ヲ 蒸餾水ヲ以テ度ノ寒冷トシテ液體空氣ラ使川シ癌腫⟨抵抗ヲ檢セリ。

陰性ヲポセリ。 成績ハ五分間及ビ 十 分間に

液。 得ルニ比シ興味アル事ナリ。 腫ハ零下數度ニテ腫瘍發生力ラ失フラ 知 使川動物ハ途中死セルモノアルモ三八匹 ナリ。試驗成績 テ 氣中ニ人レテ冰ラシ後直チニ 攝氏三六度ノ溫湯中ニ入レ り常帝國大學工學部物理學教室二於テ試驗セリ。 n ハ全部陰性二終レリ。 12 融カシ移植セリ。 移植苗ヲ半分。 體空氣試驗 ガ如ク家鷄肉腫ノ零下百九〇度十五 桑木理學博士及 分 液體空氣ハ攝氏零下百九〇度ナリ。 之ヲ以テ是ヲ概 三分 五分、 ビ 伊藤理學士ノ好意ニョ 十五分間 分 v 間 ル 15 二結構 之心後述ス ١ 液體空

(3)、溫熱試驗

於テハ九〇%ノ陽性率ナルニ温熱ニ作川 しゃーれ二入レタル蒸餾水ラ電氣解卵器中二入レ各 ル 氏五〇度、五五度。六〇度二十五 ハ各度全部陰性ラ示セリ。 モノラ移植ス。 使川動物ハ四〇匹ナ 之レ又後述ス 分間宛移植苗ラスレ 1) ル t 2 家鷄內腫 成 メタル ハ對照 タ Ti.

04

ルニ反シ上條氏法ニテハ同上部暗染ス是 レ 恐ク發生學上ニョル可染物質(顆粒狀物質ニ適ス?)増加ノ程度が上皮細胞惡性化ノ程度ト正比例スル者ノ如クナル ト 同時ニ終神經ト同ジ起原ヲ有スル上皮ノ原形質内 ニ 上記ノ過染法神経・同ジ起原ヲ有スル上皮ノ原形質内 ニ 上記ノ過染法

(大正十一年三月三十一日)

其組織形態變化ニ就テーセ、可移植性腫瘍ノ抵抗力竝ニ

山本伊勢男(福岡)

實職目的で、金別の腫ハー○○%ノ移植率ヲ有ス。で、今ので、金別の腫ハー○○%ノ移植率ヲ有ス。で、今ので、金別の腫ハー○○%ノ移植率ヲ有ス。で、今ので、金別の腫ハー○○%ノ移植率ヲ有ス。ので、金別のでは

ノベルケフェルド濾過液試験ヲ行 ヒ 尙是等濾過液ニ各諸種温熱ニ 對スル 抵抗力 ヲ 職シ又新鮮及 ビ 乾燥腫瘍イ、腫瘍移植苗ノ乾燥試験、諸種ノ寒冷ニ對スル抵抗力、

度モ試験セルコトナキまうすヲ川ヰタリ。 焼き一ル態度ヲトルカヲ検索セリ。被移植動物ハ凡 テ 賞テ一種温度ヲ作川セシメタル試験ヲ行ヒ是等腫瘍 ガ 如何ナ

ロ、通常移植ニ際シテ發生シタル諸種ノ組織形態變化

(原種まうす腺性癌ョリ發生セル所謂肉腫(第二世)、

世)、及ビ家鷄肉腫ヨリ發生セル粘液肉腫) ヲ觀察セリ。性小囊腺腫、(第二世)、邊縁性血管腫 樣 腫 瘍、(第三

第一 抵抗力試驗

(一)、乾燥試験

本腫瘍の四三時間迄の移植力ヲ保有スル モ 旣ニ二晝 一使川動物ハ二〇匹ナリ。成績ハ五分間及ビ 十 分間作用共

V

18

活細胞以外或ル物質ノ存在ヲ意味スルモノナリ ル程概シテ思シクナレリ。 下百九〇度ニ至レバー分ヨリ十五分ト長 ク 作用セシメタ まうす癌腫ト甚ダシク相違スル所ナリ。然共其發育ハ零 度十五分間冰結ニテサへ其移植率二大差ラ生 ビズ、とい ハ既二死滅セルラ以テ、此移植腫瘍ノ酸生二八生 カ、ル高度ノ寒冷ニ遭ヘル肉

(2)。 監然試驗

殆ド移植力ラ失フラ別ル。としまうす癌ト異ル所ナリ。 五度マデハ移植率ニ大差ヲ認メザルモ。六○度ニ テ 急ニ 豆大、六〇度ノモノ蠶豆大ニ建シ酸育ハ大體ト シ テ温度 植後十五日ニシテ五〇度! モ ノ梅實大、五五度!モノ豌 性ニ終ル、唯八個中一個陽性ノモノ ア リ。最大肉腫ハ移 ノモノ百%ノ陽性率ラ示セルモ、六〇度ニ至レバ 始ド陰 二逆比例セリ。之二由テ是ヲ観レ バ 本家鷄肉腫ハ紙氏五 二人レタリ。 まうす癌ノ場合ト同ジク 十 五分間宛電氣椰卵器中蒸餾水 作川溫度攝氏五〇度ノモノ 九〇%、五五度

〇抄 銯

(3)、乾燥及ビ滤過試驗

反シテ陽性ノモノヲ得ズ。 テ花燥シ皮下移植ラナシ五十九日間觀察セ 次二四日間室温二放置セル党燥肉腫ヲ蒸餾水 ハ百%ノ陽性ラ得タルモ乾燥苗ニテハ陽性ノモノナシ。 ヲ作リテ二○個所ニ注射シ四十八日間觀察セ ル ニ豫期ニ n ラリテ乳刺 二對照ニテ

ノラ得ズ。 ○延宛皮下ニ注射 セ リ。使川鷄十三羽注射個數合計五十 攝氏五〇度、 鮮肉腫ノ蒸館水濾過液ラ作り、之 ヲ 常温、及ビ半時間宛 四個所ナリ。三十日間觀察セルモ豫期ニ反シ テ 陽性ノモ ケルト同ジキ注意ノ下ニベルクフェルド濾過器 ヲ 以テ新 得ルニ非ラザルヤトノ豫想ヲ有シタルニ ヨ リ、風縮ニ於 次二初メ本家鷄肉腫ハベルケフェルド濾過液ニ テ 陽性ラ 五石度 六〇度二加熱セル四群二分チ約一・

內腫移植菌ヲ滅菌,し゚ーれ 中ニ人 レ 三十四日間宝温ニ │ 十四羽,各温度群ノ注射個數二十四個所合計 四群二分チー・〇乃至一・五年宛皮下二注射セ 述ノベルケフェルド濾過器ニテ濾過シ、之 ラ 前試験 次二肉腫ノ乾燥粉末ヲ蒸餾水ニテ越幾斯 ヲ 作リ、之ラ前 ク常温及ビ半時間宛攝氏五○辰、五五度、六○度 加熱ノ 九十六個所 リ。使用鷄 が如

五度マデ耐エシニ比シまうす痛ハ温熱ニ對ス ル 抵抗弱十

ベルケフェルド週過液試験

ラ知ル。

移植腫瘍陽性ナル時、 L n ヨク 摺り潰シ、之ヲ蒸餾水ニテ越幾斯ヲ作リ、之ヲ ル物質ノ有無ラ檢スルタメ、新鮮腫瘍組織ラ数時 其生活細胞以外ニ腫瘍 ラ 發生セシ

川セリ。

及ど其他二於テ蒸餾水ラ川ヰラ生理的食鹽水 ラ 川ヰザル ラ○・五乃至一・○廷宛まうす/皮トニ注射 セリ。木試験 ○○回廻轉スル電氣遠心機ニー時間カケテ後濾過シ ベルケフェルド濾過器ニテ濾過シ、又ハ初メー分間二五 2

通過ナルラ確メテ絶對正確ナルモノラ使川 ヘルル 11 ハ緒方博士及ビ大島學士ノ指摘セル如 ク 腫瘍試験ニ於テ 蒸餾水ガ溢カニ適當ナルニョリ余モ之ラ使用セリ。 クフェルド鴻過器ハ獨逸製ニシテ 使川前鹽桿菌ノ不 セ IJ, 和製义

ハ米國フェラデルフェヤ製ハ直チニ川フレ バ 信川ラ置ク ベルケフェルド細菌瀘過器ハ不安心ナリ。途中死セル ハズ、獨逸製ト雖モ殿桿菌試験ラ經タル 7 ルモ使用動物ハ二八匹ナリ。成績ハ凡 テ 陽性ラ示 E ノニ非サレ

18

Æ

セルモノナシ。

まうす痛二於グル場合ト同ジク炭酸雪及 ピ

液體容氣ラ使

ク茶碗大二達セリ。 中二十分間包埋セルモノ モ陽性率百%、最大腫瘍ハ同ジ 炭酸雪試驗,三十日間観察セルニ對照ニ於テハ 陽性率一のののの ○○%其中最大腫瘍ハ茶碗大ニ達 セリ。 炭酸雪蒸縮水冰

五分間八三%、十分間六七%、十五分間七五%ノ陽性ヲ 十分, 液體空氣試驗,液體空氣中ニ肉腫苗ラ夫 々 一分,五分, ラナシタリ。二十三日間觀察セルニ成績ハ一分間六七% 十五分間宛清ケテ冰結セシ メ 鷄十二羽ニ皮下移植

鷄肉腫ニアリテハ攝氏零下數度十分間ノ寒冷ニ テハ其移 植率及ど發育ニ殆ド影響アルヲ認ムル能ハズ。零下百九〇 豆大、十五分間雀卵大ニ達セリ。之ニ由テ是ラ観レバ家 最大腫瘍ハ一分間琵琶實大、五分間梅 實大

得タリ。

度十五分間冰結ニテサへ其移植率二人差ラ生 Ę ズ、シンレ

テ乾燥シ皮下移植ラナシ五十九日間觀察セル 二對照ニテ

(2)、移植第二世代ニ於テ旣ニ Ehrlich 氏ノ報告セルガ如キ肉腫ヲ發生セリ。即チ腺腔ハ全 ク 消失シ癌腫ニ於ケルキ肉腫ヲ發生セリ。即チ腺腔ハ全 ク 消失シ癌腫ニ於ケルキ肉腫・致廉と Woglom 氏ノ報告セルガ如キ癌性部分トク混合型ニ遭遇 セ リ。此所謂肉腫ノ本態ニ就キテハ次席ニ淺田學士ノ發表アルベシ (第三號及ビ第二二一八號顯微鏡的標本及ビ其寫真供覽)。

ノ部アリ(第六號、顯微鏡的標本及ど其寫眞供覽)。然レ共其他ノ部分ニテハ矢張リ原種ニ見 ル ガ如キ腺榛癌 園柱形細胞ニヨリ被 ハ レ所々分泌物及ど脱落細胞アリ、種ヨリ遙カニ著シク擴張シ乳嘴形成 著 シ、腺腔壁ハ大抵

ナリ。此ノ腫瘍細胞外套ノ周圍の大抵壌死ニ陷 リ 又ハ壊管周圍部ヲ外套狀ニ取リ関ミテ 存 シ、細胞外套境界ハ鋭腫性ニナリシモノニ特ニ著 シ ク發生ス。即チ腫瘍細胞ハ腫性ニナリシモノニ特ニ著 シ ク發生ス。即チ腫瘍細胞ハ腫の大抵壌の大変を表。即チ腫瘍細胞の血管を表して、 第三世ニ至リ血管肉腫様像ヲ呈 セ リ。コハ原種ニ

の持

絲

供覽)。 腫瘍細胞外套ヲ見ル、カ、ル部ノ外套ハ境界鋭 ナルノミ 非ズ(第一八號及ビ第一六〇號顯微鏡的標本及ビ 其寫真 又壞死ナキ所ニモ此ノ變化ハアルガ 故 ニ、血管肉腫ニ見 生存シタルモノナリ。然レ共細胞外套非常二鋭ナルニョリ 由ナシ。カ、ル變化像ノ發生原因ニ關シテハ周圍ニ壞死 うむ様結締織細胞ニヨリ菌マレタルモノ ア リ。 ナラズ、くろまちん二富メル細長ナル 一層ノぢんちちゅ 死性ナリ。然レ共壤死ナキ部ニ同ジク小血管ラ取卷キタル アル所謂血管肉腫ノ成因ニ就テ或ル一顧慮ヲ與 育セルコトモ加騰セルナルベシ。此ノ所見ハ爭 ル血管が壞死ョリ死レ榮養良キ血管周圍 ルニョリ腫瘍ガ先が壌死ニ陷り其間質ニ相當スル 部ニア ノミノ鏡像ラ見ル時 ハ 通常ノ所謂血管内腫ト識別スル ルガ如ク腫瘍細胞ガ血管腔ヲ取リ園ミテ、あくちーぶニ發 ノ 腫瘍細胞ノモ ^ 11 カ、ル部 サル レツ

バ著シク引絲性粘液物アリ。鏡見的ニ ハ 長紡錘形細胞モ粘液内腫ヲ發生セリ。移植腫瘍ニ個共割面ニ刀 ヲ アツレ(5)、次ニ家鷄腫瘍ハ紡錘形細胞肉腫ナ ル ガ、其移植中

北モ軟骨性硬度乃至骨性硬度ナル所 ハ 九大第三系ノ其レト一致セズ、又常温及ビ五○度ノモノ ニ ヒゼシハ普通却テ乾燥濾液ノ五五度及ビ六○度ノモノ ニ ヒゼシハ普通乾燥肉腫濾液ニ於テハ各温度共殆ド大多分陽性 ノ モノラ整燥肉腫濾液ニ於テハ各温度共殆ド大多分陽性 ノ モノラ 雖モ軟骨性硬度乃至骨性硬度ナル所 ハ 九大第三系ノ其レ雖モ軟骨性硬度乃至骨性硬度ナル所 ハ 九大第三系ノ其レ

消失シ、温熱ニ對シテモ攝氏五○度温湯ニ 一五分間入ルヤ移植力ナシ、寒冷ニ對シテモ 攝氏零下數度五分ニシテ四十三時間マデ移植力ヲ保持シ二晝夜ヲ經過ス レ バ最早シク抵抗弱キヲ知レリ。卽チ鼠瘡ニ テ ハ移植苗室溫放置シク抵抗弱キヲ知レリ。卽チ鼠瘡ニ テ ハ移植苗室温放置

レバ既ニ消失ス。反之シ家鷄肉腫ニアリ テ ハ寒冷ニ對スル抵抗極メテ高り攝氏零下數度十分ノ寒冷ニテ ハ 移植力及ビ發育ニ殆ド大ナル影響ナシ、攝氏零下一九〇十五分間作用ニテモ其移植率ニ大差ヲ認メズ、即チ余ハ緒方博士ノ家鶏肉腫ノ液體空氣試驗ヨリ遙カニ高 キ 耐寒成績ヲ得タリ。高森氏ハ家鷄軟骨腫ノ溫湯試驗 ヲ五 分間攝氏五五度マデ移植力陽性ナルヲ檢セ ル ガ、余モ之ト殆ド同ジキ成補ヲ得タリ、然シ余ハ十五分間五五度ニ テ 尚ホ移植率ハ偕酒移植ト大差ナ キ ヲ認メ、尚ホ十五分間六〇度ニテー個ノ陽性ヲ得 タ リ。家鷄肉腫ノ濾過試験4成績ハ尚ホ今個ノ陽性ヲ得 タ リ。家鷄肉腫ノ濾過試験4成績ハ尚ホ今後ノ實職ニ俟ツモノトス。

第二、組織形態變化

メタリ。 余ハ普通移植ニ際シテ腫瘍ノ種々ナ ル 組織形態變化ヲ認

(工)、余ガ發見セル、鼠癌原種ハ定型的ノ腺性癌ニシテ、大抵圓柱形乃至骰子形細胞ヲ以テ被ハレタル多數ノ小サ大抵圓柱形乃至骰子形細胞ヲ以テ被ハレタル多數ノ小サ

(2)、多直第二世代二个元死二 Fhrlich モノ限与にしが四一 巴生トノの大ノ大夏モトト的二司ジット加拿大文送中なし

過 細 出現セシ肉腫 ノ 本態ラ究 メントシ、得タル 多数ノ材料 ナルコトラ主張 + 就キテ檢索ラ行と遂二其ノ本態ラ知 形態學的並二生體染色ニョル サ ソハ昨年學會二發表セシ結締織刺戟說ラ廢シ ルト 癌細胞自身ニシテ唯單ニ -ス E ノナリ セントスルモノナリ 形態的變化 腫瘍細胞ノ生物學的性 ŋ 即發生セシ内腫 7 得 ナシ タリ テ上皮 タルニ ト信

其 、理由

" 有スルニ カ ì チ 呈スルニ ル再發移植ノ法ニアラザレバ直ニ絶種 反シ余ノ例ニアリテハ一度 まうす アラ見 至レバ移植能率ハ甚ダ低下 シ ルニ移植性腫瘍中肉腫 11 ス 余ノ考按ニカ 癌が純肉腫 高移植能率 ル Æ 1 ナ 1 ラ

F 數 オラ 世代移植セラレタル純肉腫トラ比スル 二初期二ハ尚 肉腫發生ノ初期的癌腫ト 容易二紡錘狀二變形シ得ルハ勿論癌細胞ニ特有ナル 余ノ癌細胞 形成 スル機能ラ失ヘル像ラ見ルコト屢くナリ ハ周園 ノ狀況ノ變化例 肉腫ト ノ混合型時代ノモ 15 壞死竈附近二 於 1

ナ

〇抄

鉄

四 船網胞ニ近似セル形態ラ有スレドモ建ニハ 初メヨリ分化セル肉腫ノ像ラト 形細胞肉腫狀 ŀ ナル、 モシソレ 結締織性ノモノナリセ ルベシ。 典型的ノ紡錘

ハ集團ラ形成セズシテ分離シテ以テ肉腫狀ラ 端ハ扇ノ要狀 り同時二其ノ細胞核ハ紡錘狀トナル、ヤ 二至レルモノラ見タリ ニ至レリ。 テ癌細胞自身が直接紡錘形狀ニ變 ジ 遂ニ肉腫狀ヲ呈スル 肉腫酸生ノ 二周国二 初期二 放射シ、 於テ而 即癌胞薬ハ狭小ナ モ移植後 遂二紡錘形 日尚 ガ 送 ŀ ル テ細胞索ノ末 呈セシメル + + 細胞索トナ V モ ル細胞 ノニ 於

2 所見ニシテ抑 錘形內腫細胞モかるみん顆粒ヲ攝取スルコト 全然無シ。 見ルニ近日迄上皮性腫瘍ニシ 粒攝取ノ機能ヲ檢 五、最モ有力ナルハりちおんかるみんニョル 2. ヤラ區別シ得べキ最上ノ方法ハ生體染色ニョル 色素顆 余ノ例 結締織性ノモノナレバ顆粒ラ攝取セザ -7 E リテハ本來ノ筋 腫瘍細胞ガ上皮性ナリヤ 2 ル ニア リト テ色素顆粒ラ織取セシモノ 細胞 信 ズ、清野博士ノ著書ラ ハ勿論 JIK. 11 發生 ルモ 結締織性ナ 生體染色ノ セ 1 シ紡

スレ共大部分蒼白ニナリ星狀ノ粘液細胞ヲ認ム。

色二染り粘液ニシテ其單ナル粘液樣變性ナ ちかるみんニョリテ染色スルニカノ着门ナル 本肉腫ハ大正七年ノ發見ナルモ、之レマデカ、ル變 ラ サ 部分 n ラ 知

要之ニ余ハ移植實驗セル鼠癌及ビ家鶏肉腫ニ在 リ テ移植 rfi ・種々甚ダシク異レル組織形態變化ヲ認メ タ

ニ接セルコトナカリキ(顯微鏡標本供覧)。

非ズシテ周圍ノ環境要約ニヨリテハ隨分甚ダシ ク 其性狀 傷ハ常ニ必ズシモ本來的ニ不變性性狀ラ保持 ス ルモノニ シム スル腫瘍ノ必ズシを常二絕對的像二非ザルコト ヲ 想到セ | 變化シ得ルコトヲ證スルモノナリ。コハ 吾 人ガ日常接 り。之レ腫

7

スル抵抗力著シク弱シ。 一、まうす船ハ家鷄内腫ニ比シ 寒冷、温熱、乾燥等ニ對

二、腫瘍ハ常ニ本來的ノ恒性性狀ラ問持スル モ ノニ非ズ テ環境要約ニョリテハ甚ダシク其性狀ラ變化 シ 得ルモ

見さいる事といるがあり

しい、 ける レス火、イト 石間切って以こしの場ですい

一八、鼠癌移植經過中ニ於ケル肉

H

腫発生ニ就テ

且ツーガニ於テハ内腫ナルガ故ニ結締織性 ノ モノナリト 信ゼラレタルハエールリッヒ、アポランノ唱導セシ間質 傷學上二於ケル最モ興味アル問題ニシ テ 其ノ本態二就テ 思料スルガ至當ナリト云フニ過ギズシ テ 其ノ根底薄弱ナ ルコトラ風、目撃シテ以テ肉腫發生ノ前提ナリ ト 想像シ 結締織刺戟説ナリ、然レドモコハ鼠癌ニ於 テ 間質増殖ス ハ朱ダ渾池トシテ解決セラレルニ至 ラ ズ、世二最モ多ク まうす縮移植經過中二出現ス.ル 肉腫發生ノ現象ハ實驗腫

余ハ大正九年十月ヨリ內腫發生ノ現氣ラ發見 シ 機多ノ好 腫ノ數世代二及ブ移植ラ成功セリ、文獻ラ案ズル モ此 如き成功ハエールリッヒ、 カノ結果初メテ山本(伊)系まうす病第十三世氏ョリ ニシテ未ダ他ニ例アルヲ知 ラ ズ、余ハ鼠艦移植經過中ニ アポランノ鼠癌一例アルノミ

成ニ影響スルモノナルヤ否ヤハ今日述ブル實驗ナリ。 一家鷄肉腫(藤浪、加藤南氏第二系) ヲ移植セ ル 家鷄ョリ再 三採血スル際轉移形成ノ對照ニ比シテ著シキコ ト ハ旣ニ 三採血スル際轉移形成ノ對照ニ比シテ著シキコ ト ハ旣ニ 家鷄肉腫(藤浪、加藤南氏第二系) ヲ移植セ ル 家鷄ョリ再

ルコトニ於テ同一ナリト雖モ種々ノ點ニ於テ差異 アルモらちんトニ依リテ起ル貧血ノ間ニ於テ ハ 赤血球ノ減少ス水溶液ヲ皮下ニ 注射セリ、勿論採血ノ時 ト ふぇにるひご其ノ目的ノ爲メニ 肉腫移植家鷄ニふぇにるひご ら ちんノ

成ノ誘因タルコトヲ知ル。 用ニ依ルコト勿論ナレドモ貧血自己ガ或 ル 程度迄轉移形力ルヲ知ル、依テ採血ニヨリ轉移形成アル種々ナル共働作力ルラ無ノ結果試験動物ハ對照ニ比シ轉移形成 ノ 頻敷

ノナリ。

門記

トヲ思フモノニシテ ふぇにるひごらち ん 注射ノ際移植腫余ハ移植腫瘍ノ成長ト血糖量トハ或 ル 程度迄關係アルコ

〇种

鋒

血糖過多ヲ生ズ,本問題ニ關シ テ ハ(血球毒素ト血糖量リ、然ルニ家鶏'家浜'まうすニ就テ小量即チ 余 ノ腫瘍移り、然ルニ家鶏'家浜'まうすニ就テ小量即チ 余 ノ腫瘍移り、然ルニ家鶏'家浜'まうすニ就テ小量のチ ネ ノ腫瘍移り、然ルニ家鶏'家浜'まうすニ就テ小量の大量ニ於テ ハ 極メテ小量

二〇、鼠癌ノ轉移ニ就テ

二就テ)他日報告スベシ。

蓼 沼 憲 一

小此木修三

ノ一誘因タルコトヲ知ル。 鼠癌ニ於テモ前記家鷄肉腫ト同樣ニ貧血自己 ガ 轉移形成

二一、陰莖凍傷瘢痕癌(馬)ノ轉移

ト貧血トノ關係

熊醫學博士 市 川 厚

北海道帝國大學比較病理學教室

家鷄肉腫及ビ鼠癌が採血ニ由り轉移形成ラヨ リ 多キ率ニ

於テ證明ストハ小此木、蓼沼兩氏ノ實験的研究

ナリ。

ユレニ反シ組織球性細胞及 ビ 腫瘍嚢、胞寒間結締織ノ増をシ幼若ナル細胞即結締組織成形細胞ハ明カ ニ かるみ 種をシ幼若ナル細胞即結締組織成形細胞ハ明カ ニ かるみ が如キ間質結締組織ヨリ發生セシモノトセ バ 色素顆粒ラガ如キ間質結締組織ヨリ發生セシモノトセ バ 色素顆粒ラガ如キ間質結絡組織ヨリ發生セシモノトセ バ 色素顆粒ライナリ。

決論

癌腫ト命名スベキモノナリ。 ・ はずないでは、 ・ はずれに、 はずれに、

ラズト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。 (自抄)カスト信ズ。

討論

市川厚一。我々ハ先キニ人工家兎てーる癌中 Carcino

家雞內腫(藤浪

加藤兩氏第二系)ラ移植セル家鷄ョリ再

masarcomatodes ト認ムベキモノラ 嚢生サセタトキニ、エーリッヒ、アホランノ例モ此ノ如キ者ナラズヤト述ベテオキマシタ、又豪樹ノ血尿中ノ膀胱癌中ニモ肉腫ト誤別サレルモ ノ 粉カラズ故ニ癌腫中ニ肉腫狀ノモノアルハ注意スベキ コ トデアリ、殊ニエーリッヒ、アボランノ例ニ比スベ キ 實験例ニテソノ關係ヲ明ニセラレタルハ甚ダ愉快ノ事ナリ。

長與又郎、標本ヲ拜見シ大體著者 丿 所説ニ贊意ヲ表スラレタコトヲ聞イテ滿足ニ存ジマス。ラレタコトヲ聞イテ滿足ニ存ジマス。 川本伊勢男,市川博士へ、私ガ本學會デ吾人 ガ 日常鏡山本伊勢男,市川博士へ、私ガ本學會デ吾人 ガ 日常鏡

ヲ 如

一九、家鷄肉腫ノ轉移ニ就テ

夢 沼 憲

瘍ノ急劇ニ増殖スル傾向アルハ或ハ其ノ理ニ依 ル ベキカ

十二日ニ於テ皮質ノー小部分ヲ残シ テー側ノ大腦半球ノ 清シ來リ其ノ程度ハ世代母ニ甚シ ク 移動ス。腫瘍 於テ世代ラ重ヌル時組織内ニ園形及ビ紡錘形 ノ 細胞ラ混 强ノ陽性成績ラ得タリ。第二ノ方針ニ從へル 研究成績ハ %强、七九·一%强、八五·○%、八六·六%、八四·六% %、八二·三%弱、七五·六%弱、八八·八 % 强、八九二 二十羽、第八代十五羽、第九代十三羽ヲ川ヒ、各八○・○ 代三十六羽,第五代二十八羽,第六代二十四羽,第七代 こ二於テハ移植成績全然陰性二終リタリ。鳩二於テハ 第 %、八○・○%ノ陽性成績ヲ得タリ。但シまうすハ第十二 ○%、一○○・○%、六○・○%、八○・○%、一○○・○ ラ六六・九%、第二代ヨリ第七代迄各五頭宛ラ川ヒテ六〇・ ハ甚迅速ニシテ移植後第五日ニ於テ小豆大トナリ 或ハ第 本來藤縄氏型鼠内腫ハ多形性 ナリ、各異種動物ノ脳内ニ 陽性成績ラ得タリ。家兎ニ於テハ第一代百十五 頭ヲ川ヒ 六代ヨリ第十二代迄各三頭宛ヲ 川 ヒ 悉 ク一○○・○%1 | 大部分ヲ占領スルコトアリ。敍上各異種動物 ノ 腦内ニ移 一代九十五羽,第二代六十二羽,第三代四十 五 羽,第四 家鬼二於テハ第七代 ニテ實驗ヲ中止セリ。もるもっ が対殖

植セル肉腫ラ谷同種動物ノ皮下へ移植セル成績ハまうす ル成績ハ現今第十二代迄重子得テ獨世代ラ重子ツ、アリ、 コト、及ビ圓形細胞ノ浸潤アルコトナリ。 ヨリ皮下へノ移植能率ハ減少ス。此ノ現象ハ 同一實驗ラ 腦內移植世代ラ重ヌル二隨と、各世代ヨリ皮下及ど皮下 成績ラ得タリ、即チ鳩腦內移植第一代ヨリ鳩皮下二移植セ 及ビ家鬼二於テ至然陰性ナレドモ鳩二於テハ 確實二陽性 チラレタル内腫ノ組織學的特長 ハ 細胞ノ比較的圓形ナル 五回反復スルモ變ルコトナシ、皮下ニ於テ移 植 世代ラ重

討論

藤浪鑑、省ラ川上博士カラ標本ラ示 サレ、家鬼腦内ノ異 間、其組織ノゔいるれんつ或ハ性格ニ若干ノ差異ガアツ 種動物腫瘍移植が成功デアツタコトラ確カメ 得夕。然 レ無イガ、 來無カツタ。之レ或ハ手術方法が異ツテキル為カモ 知 シ我が教室ノ山川卓爾氏ガ之ラ復試シタ レバ、是し迄、木、充分陽性ト謂と得ラレルモノ ガ出 本ト此教室カラ出タ腫瘍種ナガ 1 ラ、彼此ノ ם

事實ラ立證スベキモノナルラ信ジ弦ニ報告セントス。 甚ダ興味アル事實ナリ。余ガ近時剖檢セ ル 例モ亦此! |驗・一例證ト認ムベキ者ト信ズ、然 シ 本例!貧血ハ手術

約十七歲(牡) 栗毛、北海道產

蹊部淋巴腺ニ小兒頭大ノ轉移ニ初 マ リ該周圍及ビ腹膜 先キニ陰莖凍傷ニ罹り、局所潰瘍瘢痕部ヨ リ 癌腫ラ發生 大正九年六月局所ラ切除セリ。然ルニ 其後再發シ鼠

斃死セシメタルモノ ナ リ(大正十一年三月,手術後二十 及ビ胸腺轉移ハ相互ニ融合シ氣管ヲ壓迫(高度ニ)シ窒息 信ゼラレズ然ルニ轉移形成顯著,殊ニ 前 縱隔膜部淋巴腺 モ再發セル局所ハ潰瘍狀ラ呈スト雖ソ ノ 限界明瞭ニシ 他陰莖癌例ニ比シ轉移形成ノ著明ナ ル ベシトハ 肺,及ど骨髓二轉移形成アリ。然

1

胸腺

革癌ハ人畜ヲ問ハズ轉移形成ノ本例ノ如キ者 尠 ク、殊ニ 本例ハあでのかんくろいごト認ムベキ者 ナ リ。一般二陰 局所!限局シ比較的良性!性狀ナルニ轉移ノ顯著 ナ ルハ 本例ガ高度ノ貧血ナリシ事ニヨリ小 此 木、蓼沼兩氏ノ籔 | 二十頭、第二代ヨリ第四代迄各三頭宛、第五代 五 頭、第

六代ヨリ第十二代心各三項元チリときクーランのる。一つおから項にい

微シ腫瘍組織ノ壌死、融解セルモノ、吸收サレ、之レガ ノ際ノ失血以外肝脾等ノ高度ノへもじてろーじ すアルニ

二二、鼠肉腫ノ成熟異種動物殊ニ 成熟鳥類ニ於ケル移植ニ就テ

もりーゼラ起セルニ由ル事物カラズト信べ。

余ガ藤縄氏型鼠内腫ラ異種動物ノ腦内ニ移植 シタル實験 二方針二後ヒテ研究上二歩ラ進メタリ。 成績ハ諸種ノ雑誌二於テンラ像報シタリ。 余 ハ更ニ次

白井珍三郎(東京)

第一ノ方針ニ從ヘル研究ノ成績ハまうすニ於 テ 第一代百 實驗動物ハまうす、家見、もるも、三及ビ鳩ラ川ヒタリ。 第一、異種動物ノ腦内ニ於テ移植世代ラ 重 子 得ル ヤ否 ル時必ズ起ルベキ腫瘍ノ生物學的關係ノ變動如 第二、異種動物腦內移植及ビ腦內ニ於テ移植世代 ヲ 重ヌ ヤ。前者ノ場合其ノ陽性率如何。

デァリマス。但シかるちうむ臘ハ腫瘍發育ヲ阻害シ、関リ反應(特ニ淋巴浸潤)が强度ナルヲ認メマシタコト・重圧、(ちってんさるこーむ) ヲ移植セシニかるちうむたいかるちうむ及まぐねしうむ鹽デ動物ヲ所置 シ 之夫レハかるちうむ及まぐねしうむ鹽デ動物ヲ所置 シ 之夫レハかるちうむ及まぐねしうむ鹽の一が見今問題 ニ ナッテ語炎、移植腫瘍片周圍ノ反應如何ガ只今問題 ニ ナッテ

ノ一節(異種移植ニ關スルコトニ三、「腫瘍移植ノ組織的態度」中

まぐねしうむ鹽ハ之ニ反シ促進スルノデアリマス。

ニ就テ

京都帝國大學醫學部病理學教室

浪

杉山繁輝

ョリ、其一二ヲ抽キ出シテ,茲ニ之ヲ述ベテ見ヤウ。移植ニ闢スルコトニ就キ,近者,余等ノ得タ ル 所見ノ中腫瘍移植ノ組織生物學研究ノ一項ト シ テ,異種動物腫瘍

腫。 二ラ插入シ置キタルニ (大量ノ腫瘍片ラ入レ タル試験ハ デアラウ乎。家鷄尺骨ヲ折リ、弦ニ白鼠腫瘍 答えツ、アルモノナラバ、と二對シテ如何ノ關係ラ示ス 其反對ニ、 又、別デアル)、骨折部二出來タかる」す内二包封サレテ 新生ヲ營ンデ居ルニ反シ、此處デハ、骨膜面カラ 骨梁新 反對ラ示シテヰタ。即、他ノ附近部ノ骨外膜 逞ウスルコトアリヤト云フニ、余等ノ得タル所見ハ寧、 部ノ骨外膜が直二之二山テ益、其增生、 骨外膜面二附著或ハ之二隣接シテ居ル場合 ニハ、此接著 有樣デアル。又移植片ガ骨折端或 ハ 骨傷部附近ノ骨幹ノ 此骨梁ガ移植片内ニ向テ好デ進入シ來ル傾向ハ無ク、寧 組織形成アリ)ラ繞テ骨梁ノ新生ハ盛ニ認メラレルガ、 留テ居ル移植腫瘍片(其原組織ハ旣ニ類壞シ ニ對シ如何ナル作用ヲ及ボス ヤ、若シ周圍組織が増殖 生ヲ促ガスコト無ク、 [4]異種動物腫瘍移植ニ際シ、移植片ノ周圍組織 新鮮ナルモノ、及ハ煮沸殺生セルモノ)ノ小片一、 新生骨梁ハ此移植片ラ囘避シテ現ハレ 若クハ之レ甚乏少デアツタ。 ガ盛ニ骨梁 周圍二內芽 テ居ル

タト云フャウナコトハ無イデアラウ乎。

期ノ組織態度ハ果シテドンナデアル平。 以若シ鼠肉腫が「濾過性ノ發病體」ラ有スル モノナラ 型の が、移植腫瘍ト思ハレルモ ノ ハ、或ハ周闑組織カラ酸 はシテ來タモノデアルマイ乎ト云フ疑ノ挟マレ ヌ コトモ無イガ、白鼠腫瘍ニ此「濾過性ノ發病體」ラ有スル モノナラ 双若シ鼠肉腫が「濾過性ノ發病體」ラ有スル モノナラ

物ノ腦内ニ於テハ之レヲ醯實中ニ移植スル方 ガ 陽性能物ノ腦内ニ於テハ之レヲ 缺 ク。異種動から、周圍組織ノ反應ハ唯鳩ニ於テ僅ニ淋巴 細 胞ノ集疾白井珍三郎、鼠肉腫ヲ異種動物ノ腦内ニ移植セル 場合ニ

川上漸,鼠癌ヲ鳩ノ腦實質内ニ移植スル 時,又タ陽性成丸脂内移植實驗ニ於テ余ノ實驗ニ於テ ハ 全部陰性ニ終ルリ。

鎖ラ舉が得ルヨリ視 レバ、肉腫ヲ移植シテ増殖スルモ

ノハ組織ノ反應性增殖ニハアラズシ テ 確二移植肉腫片

20

ノ増殖セルナリ。

セラル、ハ當ヲ得ザルベシ。 「性狀ノ變化」ヲ軽々 ニ 云偽 い技術ノ精巧ナルヲ要ス。『性狀ノ變化』ヲ軽々 ニ 云偽 駅決變ジタルモノナラムトセラル。サ レ ド腦質内移植 藤浪先生ハ同一種ノ腫瘍ガ京都ヨリ東京ニ送 ラ レテ性

植片二於テ多イヤウデアル。 駅外線部位:脈ハレル脂肪球ノ發現モ、亦槪シ テ 新鮮移

ラレ、 デ ^ 及増生ハ、 ル + ガ 除 11 デアルガ 淋巴細 = 1 (Ⅱ) 周嵐組織ニ顯ハレル反應性炎性變化、 形成 移植地ニ於テ、巨多ノ淋巴細胞集團ガ重疊シ テ 形成セ ノガ多数デアル。 於テ煮二比ベテ多少强盛二見エル シテ若干程度強イ観ガアル。然カシ、之ニ モ 固ヨリ取 ハ無イ。 亦與テカガアルー 5 好イ點 ハア 必シモ然ラザルコトアルガ)、少クト モ 比較的强盛 セラル、ノデアルカラ、 兒 ――此際ニモ個體素質如何、 共組織像、 此淋巴細胞增生八、 斯様ナ淋巴細胞集團ノ重疊ハ生ニ限ツタワ 結締織性細胞(組織球ハ固ヨリ含マル)ノ集簇 ガア 殊ニ淋巴細胞ハ家鷄皮膚ニテ好ン デ 其集團 淋巴細胞腫ノヤウナ観ラ三皇 no 加之、 此淋巴細胞増生の概シテ生ノ周圍 多數例ノ所見二據レバ、生二於テ、 生 煮 移植共大體二於 稍飞 之二山テ 移植腫瘍細胞 此細胞ノ研 時日ヲ經タ例デハ、屢し、 (個々ノ例二就テ謂 移植片性質如何 ス 殊二 死ニ向 n テ 白血 コト 略へ同様 ハ都 ガア 5

> 煮 えるめんごノ働キラ失ヒ。且、蛋白ノ凝固 得ラレル生ニ於テ、 斯カル反應性變化ガ、餘計ニ『刺戟』ノ强イコト 對スル反應性炎性變化トシテ現ハレタノデァ 死滅若クハ其類壊ヲ惹起シ タ 直接的原發的原因作用 スル組織標本六葉及圖畫供覽」。 ノ多イコトハ、 スモノデハ無ク、之ハ全ク移植腫瘍細胞ノ死 滅及頽廢 ノ移植三比シ――比較的多の現ハレ、又長の残ルモ 容易二首首シ得ラレルノデアル[以上 移植ノ際既ニ生活ヲ奪ハレ、 ル。 7 7 來シ 推測 而シテ ラナ 5. ク III 3

少ノ差異ラ示シテ居ルモノガアル。 (抄)移植陰性デハアルガ、『移植免疫性』ノ 同 種動物體腫瘍移植陰性デハアルガ、『移植免疫性』ノ 同 種動物體腫瘍移植ト、同ジク

討論

モノト同様ナリ。故ニ兩氏ノ觀察セラレタル變化 ハ 必埋シテ組織反應ヲ觀察シタルコト ア リ。其ノ包埋物ノ川上漸、鼠ノ皮膚下ニ腦、肝、腎、煮熟卵白等 片 等ヲ包

〇抄

示說スル組織標本二葉、及圖畫供覽」。

+ 異ガアル。斯ノ方面ニ於ケル質験ノートシテ、左ノ試験 狀。 I 7 腫瘍組織自個ノ種類及ビ性質(例之、 癌ト肉腫トノ別ノ如 「態ニ於テ「以下之ヲ生ト稱ス」、一ハ之ヲ煮沸殺生シテ (鷄腫瘍ヲ白風皮下ニ插入シタモノモアル)、ヲ一ハ新鮮 タノガ土デアツテ 腫瘍片(白鼠ノ瘤及肉腫、並ニ家兎肉腫ラ家鷄皮下ニ植 行ツタコト 並二移植ノ方法。 物 ガアル。 腫瘍ノ移植ニ常り、其移植ノ組織態度ハ其 部位、 其他、人體腫瘍ヲ家鶏皮下ニ、又ハ 同一ノ試驗動物體ニ同一ノ 異種動 又ハ個體ノ素質ニョリテ差

就テ觀察シタガ、今殊ニ其兩者ノ差異ニ關シ テ 聊述ベテ八個所ニ移植ヲ施シ、種々ノ期間ニ於テ之ヲ檢査シタ)ニ試驗例(試驗動物ハ前後七十七頭ヲ川ヰ、毎囘.四乃至七試験の(試験動物ハ前後七十七頭ヲ川ヰ、毎囘.四乃至七財態ニ於テ〔以下とヲ|生ト稱ス〕。一ハとヲ煮沸殺生シテ

於テモ、

略く同様ニ現ハレルモノデアル。

ツテ、一定シ雛1點モ少ク無ク、一慌ニ生ト煮トノ區牛ルモノデアルカラ、共組織像ニハソレゾ レ 差異ガアーをノ例ニ就テ謂へバ、之ハ種々ノ要約ノ下 ニ 立ツテーをノ例ニ

見

たヤウ。

メル。 多數!例ニ就テ觀タトコロニ鏤り、概括的ニ説 クニ止りを割り例ニ就テ觀タトコロニ鏤り、概括的ニ説 クニ止

(Ⅰ)移植片自個二就テ觀ルニ、孰レノ場合ニ テモ、終ニ モ、又始メカラ死ンデキル(煮)組織ガ破壊サレル時二 此變化ハ活キテ居タ組織が死ンデ且破壞サレ 最早り類壞二陷ルコトハ、生モ煮モ同様デアル。即チ、 Oli ツテ有機化二就クモノモアル。 + ハ全者ノ組織構造額壌シ、 ル。中二ハ割合早々周圍カラ進入シタ 結綿織細胞 異種動物體的ニテ其體液ニ先ヅ直接觸接ス 細胞核ノ染色モ形態 īńi 3 テ移植片ノ最外層、 ル時二於テ モ不

例モ無イデハ無イ)。又一定時期ニテ、周闍組織ニ對スルケレドモドチラカト謂ヘバ、[生]ニ 於テ 之レ ガ 早ク現 ハナルギルギリング ガ 早の現 ハリ中部ニ於テ)不明トナルモノデハ無イ。 而シテ其類壊ノノ中部ニ於テ)不明トナルモノデハ無イ。 而シテ其類壊ノ

界線部位:無ハレル脂肪球ノ發現モ、亦瓶シ テ 新鮮移 | 死盧若クハ其領夷ヲ意思シ タ 自妾的原礎的原則をリテト

维

○ 法人 癌研究會第十五囘定期總會 高研究會第十五囘定期總會

學會正 数室二於テ第六囘日本醫學會第三部分科會第十二 第十四囘學術集談會ヲ開催セリ、出席者土肥副會 囘日本病理學會ト合併シ本會第十五囘定期總會並 肥副會頭先ヅ開會ノ辭ヲ述ベラレ次デ大正十年度 者ヲ以テ充サレ = 大正十一年四月四日京都帝國大學醫學部病理學 於ケル役員及會員ニシテ逝去セラレタル 長典 清野博士諸氏ヲ始メ其他多數ノ會員並ニ 副會長、 理事長、 藤浪、 頗 細野理事及速水、 IV 盛會ナリキ、 佐多、 草間、 午後一時開會土 角田 林、 川村、 日本 病理 來聽

郎君、 評議員醫學博士伊丹繁君、同ドクトル大森英太 報告 博士筒井八百珠君、 博士男爵佐藤進君、醫學博士瀨川昌耆君、醫學 並副會 賞記位二賞金ヲ授與セシ ヲ表シ次デ細野理事ノ前年度ニ於ケル庶務會 邊純一郎君ノ為メ會員一同ノ起立ヲ乞ヒテ用意 決以次二定款改正ノ件二付キ決議セ タル後土肥副會長鏊沼憲二、小此木修三兩氏 查委員長與理事長ノ授賞論文審查要旨報告アリ (第十六年第一冊雜報欄参照)アリ、 同醫學博士相馬又次郎君、 頭 ノ改選アリ何レモ多數決ヲ以テ重任 丸山震五郎君、 後議事ニ入り本會會頭 通常會員醫學 器學博 IV -次デ 別項原 審 渡

滕浪艦、異種動物腫瘍片ラ移植シテ、之レ ガ 頽敗ニ就クノ特殊ノ變化ニハアラザルベシ。

イ。本報告ニテ余等ノ主眼トシタコトハ、新鮮組織移植コロニ對シ、全ク特殊ナ差異ラ示スモノデ ハ 固ヨリ無場合ノ組織像ハ、他ノ非腫瘍性組織移植ニ於 テ 見ルト

二四、實驗的腫瘍移植ニ關スル研

究(第二報告)

ト煮沸組織移植トノ間ノ比較デアル。

醫學博士 長 與 义 郎

醫學博士 和合平之助

| 五、異種族腫瘍ノ臘內移植ノ組

加加草爾

大 田 義 一(東京) 大 田 義 一(東京)

臨床的二腦腫瘍ノ診断ニテ剖檢セラ レタルモノニテ、該

檢査ニヨレバ泡狀細胞ヨリ成ル 定型的 こるごーむナリ。シ、延髓ヲ壓迫 セル小兒手拳大軟骨樣腫瘍ニシテ、組織腫瘍ハ第二頸椎 ノ 體部ヲ中心 ト シ テ 周圍骨組織ヲ破壞

一七二

自抄

滿場一致ヲ以テ可決ス。

本會定款中左ノ通リ改正ス 法社人国 癌研究會定款改正案

第十四條ヲ左記ノ通リ改正ス

特別會員ハ會費トシテ一時二金百圓以上ヲ ムルモノトス

第十五條中「金參圓」ヲ「金五圓」ニ改ム

第十九條ヲ左記ノ通リ改正ス

副總裁ハ評議員會ノ決議ニ由リ之ヲ推戴ス 本曾い皇族ヲ推戴シテ總裁トス

選界ス

會頭

副會頭い會員中ヨリ總會二於テ之ヲ

理事長、 ニ由リ總裁之ヲ嘱託ス、但監事ハ他ノ役員 理事、 監事、評議員の會頭ノ推薦

四 第三十三條ヲ左ノ通リ改正ス

銀ヌルコトラ得ス

の雑

文雑誌トシ無料ヲ以テ會員ニ頒布ス 會報「癌」ハ毎年五回之ヲ發行シ內一回ヲ歐

O第三同理事會 大正十一年四月三十日理事會開 右之通り可決ス。

催決議事項左ノ如シ。

本年度二於ラ左記ノ通リ追加支出スルコトニ 癌研究補助費追加ニ關スル件

决

金五百圓

聯學博士 淺山 田本伊為勢

二、審查委員屬記之件 一個學博士 田川田 孝

金五百圓 金五百圓

文審査ノタメ左記諸氏ヲ勵託ス 第十四回本會學術集談會二於ラ發表セル授賞論

智學博士 d: 肥 慶

聯學博士 膝 浪

速 水 猛君

經學博士

一七五

學術上有益ナルモノ動ナカラザ 談會ニ移り別記ノ諸演説アリ何レモ内容充實シ 楽通リ滿場一 致ヲ以テ可決セリ、 リキ。 終リテ學術集

大正十年度授賞論文審查要旨

R 志二

小此木修三

實驗的成績ヲ報告セルガ就中家鷄肉腫 ラ「家鷄肉腫ノ胃轉移ニ就ラ」ナル題下ニ更ニ多數 本會總會二於テハ路學士小此木修三君ト共著ヲ以 が試験鷄ヲ採血ニョリ貧血スルコトヲ以テ對照鷄 家鷄肉腫轉移ニ關スル研究ト題シ前年來行ヒタル 醫學士参沼憲二君ハ大正七年四月本會總會ニ於テ " Æ 多ク形成セラル 、コトニ著服シ塾大正八 ノ轉移形成 年

> 移 會授賞論文規程ニ基キ賞金ヲ授與ス。 新知見ニシテ學術上有益ナル論文ナリトス仍テ本 右参沼、小此木兩學士ノ研究ハ腫瘍生物學上ノ ニ捌スル實驗的研究」ト題シ其 成績ヲ發表

大正十一年四月四日

審查委員

醫學博士 資學物士 ılı 膝 勝 郎

容學博士 验學博士 佐 1:

将學博士

滿丁ノ處總會ノ決議ニョリ重任スルコト、ナレ 副會頭ノ改選 醫學博士 得學物士 本多、 土肥正 鹽 田 副會頭 木

〇定款ノ改正 總會ノ決議ニョリ左配議案ノ通リ

"

910

事實アリャ否ヤヲ檢セント欲シ多數ノ實驗ヲ積

シラ小此木、蓼沼兩學士ハ更ニ鼠癌ニ於ラ同様 ノ實驗ラ積ミテ此事實ヲ確メ其詳細ヲ報告

セッ而 1

0會頭、

テ之ヲ證シ大正十年度本會總會二於テ

「鼠癌ノ轉



息

Ш 極勝三 郎君

A、B. C、順

O第四同理事會 大正十一年五月五日理事會開催 決議事項左ノ如シ。 總裁宮殿下奉戴式舉行ニ關スル件

總裁宮殿下奉戴式ニ關スル件 評議員嘱託ニ關スル件

評議員ヲ囑託ス。

爵

中

久 萬

吉君

會頭

推薦ニ依リ副總裁ヨリ左記諸氏ニ

中 原 君

西野忠次郎君 田 郎君

雨 青 宮量七郎君 山 徹

〇寄附金

、森村、今村兩監事ョリ今囘奉戴式費用ノ內 へ指定寄附トシテ金五百圓宛寄附セラレタ

二、森村豊明會ヨリ引續キ來年度ヨリ三ケ年間 り。 年賦金五百圓宛金壹千五百圓ノ寄附アリタ

〇平和配念東京博覽會出品 覧育ニ際シ本會ハ多數ノ腫瘍ニ關スル實物標 シ癌ノ宣傳ニ努メタリ。 並ニ各方面ノ統計表其他本會創設以來公ニ發表 セル業績「癌」ヲ出品シテ尚ホ本會趣意書ヲ配布 今回開催セル平和博

月二十五日午後六時九ノ內日本工業俱樂部ニラ 舉行セラル、豫定ナリ。

〇總裁宮殿下奉戴式

伏見宮博恭殿下奉戴式ハ五